

チャールズ・ディケンズとクリスマス物の作品群

目 次

序 章	3
第一章 <i>The Holly - Tree</i> について.....	7
— 宿屋の回想についての叙述をめぐって —	
第二章 <i>The Perils of Certain English Prisoners</i> について...26	
— 離婚直前のディケンズ —	
第三章 <i>The Haunted House</i> について.....	51
— 離婚後のディケンズ —	
第四章 <i>Doctor Marigold</i> について.....	79
— 主人公の光と影の軌跡をめぐって —	
第五章 <i>Mugby Junction</i> について.....	93
— 主人公の蘇生をめぐって —	
第六章 二つの幽霊譚と <i>No Thoroughfare</i> について.....	106
— 死の影をめぐって —	
あとがき.....	124
主要参考文献	126
索 引.....	132

序 章

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) (1812-70) は1843年の *A Christmas Carol* を皮切りに1867年の *No Thoroughfare* まで、総計25篇に達するクリスマス物の系譜に属する中短篇の作品群を発表している。このうち最初の5篇は1843年から48年にかけて、クリスマスの一週間前に書き下ろし作品として刊行され、1852年 *Christmas Books* と題する一卷本にまとめられた。残りの20篇の内1850年から58年にかけて発表された作品は、彼が編集と経営に全責任を負って刊行した週刊雑誌 *Household Words* のクリスマス増刊号に掲載され、1859年から67年にかけて発表された作品は、同じ形を踏襲して刊行された週刊雑誌 *All the Year Round* のクリスマス増刊号に掲載されたものである。そして、1867年から75年にかけて Charles Dickens Edition が編纂された時、*Christmas Stories* と題する一卷本にまとめられた。ということは、実に25年間もクリスマスにこだわって、それにちなむ作品をディケンズが発表し続けたことを示している。長篇を月刊分冊の形で発表し、自作の公開朗読 (public reading) の巡業を行い、肉親と友人による素人劇団を編成しての芝居の興業、紙面の編集から経営まで全てを一人で全責任を

負って刊行した週刊雑誌の運営、慈善活動や社会事業への指導的関与等、当代の代表的作家であり国民的名士として、ディケンズは文字通り多忙を極めた生涯をおくった。彼の本格的な作家活動は1836年にスタートするが、1870年の他界で終息するまでの35年に達する文学活動の中の25年間も、クリスマス物の作品群の執筆と刊行にエネルギーを注いだ事実、クリスマスとこの作家の関係の持つ深く重い意味が含まれていることはいうまでもない。無論経済的理由も見落とす訳には行かない。出発点の『クリスマス・キャロル』の執筆動機の一つに、子沢山の家庭と両親や弟妹などを抱え込んでいたため、不安定であった生活を安定させるに足るだけの収益をあげたい、という期待と打算が込められていたごとく。その後1847年と1849年を除く毎年執筆し刊行し続けた諸作品のほとんども好調な売れ行きを示して、ディケンズに多額の収益をもたらしたことも事実である。それ故、クリスマスという最大最高の年中行事を、その宗教的色彩と祝祭的要素を巧みに織り込んだ善意、寛容、慈愛などを源泉とする作品群を発表することで、彼が金もうけの手段として活用し続けた側面が存することは否定できない。だが、彼のクリスマスへの関心が経済的理由だけで占められていたら、1867年以降において、クリスマスを作品の重要なモチーフやプロットに関わるものとして扱う、という姿勢は、まずは考えられないことといえてよい。しかしながら、事実はその反対で、それを端的に示しているのが1870年彼の他界で未完の遺作となった長篇 *The Mystery of Edwin Drood* の第14章である。“When shall these Three meet again?”と題するこの第14章は、“Christmas Eve in Cloisterham.”¹⁾と書き出されていて、クリスマスを背景としてプロットが展開することが

示唆されている。3人の中心人物達の三者三様の過ごし方が叙述されているこの第14章は作品のプロットの展開に重要な意味を持つ箇所であり、クリスマス・イヴがその舞台として設定されていることが、ディケンズがクリスマスへ依然として衰えを見せない関心を注いでいたことの表れであることは指摘するまでもない。つまり、死を迎えるまでディケンズはクリスマスへの関心を深く強く抱き続けていたのである。ということが、作家とクリスマスの関係がディケンズ文学の重要で中心的な主題の一つを成している事実を示していることは、もはや述べるまでもあるまい。

Christmas Stories に収録されている20篇の作品の中から6篇を選び出し、それらの分析と考察を進める作業を通して、クリスマスと作家の関わりを探るのが本書の目的であり、中心的テーマでもあるのである。対象となる6篇はあくまでも私の個人的な興味や好みを中心にして選び出した物なので、恣意的な感じが付きまとうことは免れないが、ディケンズの1855年における初恋の相手マライア・ビードネル (Maria Beadnell, 1810-86) との20年ぶりの再会と、1858年における離婚問題が出来た生涯における重要な時期と最晩年に発表された作品を集中的にとり上げているので、全体像へ迫るといふことは無理としても、それなりの連続性と一貫性のある考察を繰り広げることができたのではないかと考えている。そして、ディケンズというこの巨大な作家の生涯と文学世界の一端でも明らかにすることができれば、と思っている次第である。

以下、その6篇を対象とする6章立ての構成で本書の記述は展開されるが、それらの作品名は下記のごとくである。

- (1) *The Holly - Tree* (1855) (以下 *HT* と略す)

- (2) *The Perils of Certain English Prisoners* (1857) (以下 *Perils* と略す)
- (3) *The Haunted House* (1859) (以下 *HH* と略す)
- (4) *Doctor Marigold* (1865) (以下 *DM* と略す)
- (5) *Mugby Junction* (1866) (以下 *MJ* と略す)
- (6) *No Thoroughfare* (1867) (以下 *NT* と略す)

テキストとしては *Christmas Stories* (The New Oxford Illustrated Dickens, 1964) (以下 *CS* と略す) を使用。本文に続き括弧で示している数字は頁数である。(なお *HT* だけは行数もあわせ示している。) それと、ディケンズの他の作品に言及している場合も同じエディションによっている。なお各作品をそれぞれのクリスマス増刊号に掲載した週刊雑誌 *Household Words* と *All the Year Round* は、以下 *HW*, *AYR* と略す。

[注]

- 1) *The Mystery of Edwin Drood* (The New Oxford Illustrated Dickens, 1966), p. 154.

第 一 章

The Holly-Tree について

— 宿屋の回想についての叙述をめぐって —

HT は最初は *The Holly-Tree Inn* というタイトルで、1855年12月15日に刊行された *HW* 第12巻所収のクリスマス増刊号に、他の4人の作家との合作という体裁をとって掲載された作品である。掲載された順序に従ってタイトルと作家の名前と頁数を記すと、次のようになる。

- ① “The Guest” by Charles Dickens (pp. 1-9)
- ② “The Ostler” by Wilkie Collins (1824-89) (pp. 9-18)
- ③ “The Boots” by Charles Dickens (pp. 18-22)
- ④ “The Landlord” by William Howitt (1792-1879) (pp. 22-30)
- ⑤ “The Barmaid” by Adelaide Ann Proctor (1825-64) (pp. 30-31)
- ⑥ “The Poor Pensioner” by “Holme Lee”¹⁾(1828-1900) (pp. 31-35)
- ⑦ “The Bill” by Charles Dickens (pp. 35-36)

CS に本作品を収録する際に、ディケンズは①を “Myself” とタイトルを変更し、末尾の部分に補筆修正を施し、③はタイトルと全文をまったく変えないで、⑦は冒頭の数行を削除しタイトルを変えな

いで、作品のタイトルを *The Holly-Tree Inn* から *HT* に変更し、更に *Three Branches* なるサブタイトルを付けて収録したのであった。*Christmas Books* に収録されている『クリスマス・キャロル』から始まる5篇を含めて、本篇はディケンズのクリスマス物としては13番目にあたる作品である。

この作品の粗筋は次のようである。

チャーリー (Charley) なる語り手を兼ねた主人公が、近い内に結婚することになっている婚約者アンジェラ・リース (Angela Leath) が実は親友のエドウィン (Edwin) を愛していることに気付き、失意のうちに密かに身を引くことを決心して、リヴァプールから新大陸へ渡る前に初めてアンジェラと出会ったヨークシャーの地を一目見ておこうとして、12月22日にロンドンを郵便駅伝馬車で出立してヨークシャーに辿り着いたものの、*The Holly-Tree Inn* なる宿屋に一週間も大雪のために閉じこめられ、やっと往来が再開された30日の夜、思い出の場所を見届けた後リヴァプールへ向けて出発しようとしていた時に、エドウィンがアンジェラならぬその従姉妹のエミリー (Emmeline) と、後見人であるアンジェラの父親の許しが出ない結婚を果たそうとして、駆け落ち結婚の名所グレットナ・グリーンへ急行しようとしているのと鉢合わせになる。そこで真相を知ったチャーリーはロンドンへとって返し、アンジェラとめでたく結ばれて以後エドウィン夫妻ともども幸福に暮らした、という次第だが、*Second Branch* として、大雪のため閉じ込められた宿屋で塞ぐ一方の気持を少しでも晴らそうとして、主人公が話し相手として呼んだコブズ (Cobbs) なる宿屋の靴磨き (the Boots) から聞かされた話—昔庭師として仕えていた屋敷の7歳の息子ハリー・ウォル

マーズ・ジュニア (Harry Walmers, Junior) が愛する同い年のノーラ (Nora) とグレットナ・グリーンで結婚式をあげようとする旅路の途中で、コブズが働いていたこの宿屋に立ち寄ったがために、知らせを受けて駆けつけて来たそれぞれの肉親に二人の幼子が引き取られて別々に帰途につき、成人してからも結ばれることはなかった、というエピソードが挿入されている。

作品の粗筋は以上のものであるが、挿入されている幼児の実らぬ恋を描いたおとぎ話もなかなか興味深いものではある²⁾けれども、表題に掲げておいたように、本章の主旨はチャーリーが一週間に渡って降りやまぬ雪のため終屋で足止めを食っている間、時間を潰すためと失意のどん底に沈んで行くばかりであり孤独感が募る一方の内面を紛らそうとして、“experience of Inns” (104, 5) を昼夜を問わず回想し続けたシーンの分析と考察にあるので、以下それを追って行くこととしたい。

だが、奇妙な話ではある。“I am a bashful man” (97, 1-2) と自称する、しかも結婚を目前に控えているというのだから、たかだか30歳前後のテンブル地区に“my chambers” (98, 10) を持っているという説明からすると、駆け出しの法律家と思われる人物が、イギリス国内はおろか大陸諸国からアメリカの片田舎の宿屋まで巡って歩いて宿泊した経歴を持っているというのは、それともう一点奇妙な合点がいかないことがある。後見人として遺産を所有するエミリーとエドウィンの結婚を認めなかったアンジェラの父親が、チャーリーと娘の結婚には別に反対していなかったらしいことがである。「内気な」駆け出しの法律家が一体どうやってアンジェラの父親を納得させる程の財産や地位を築きあげたのであろうか。本人の

説明によると、エドウィンの方が学生時代からはるかに優れていたというのだから、どうも合点がいかない。莫大な遺産でも相続していたのであろうか。

奇妙な話といえば、実はもう一点あって、主人公が “There was no Northern Railway at that time, and in its place there were stage-coaches” (98, 42-43) と述べているのが、どうも合点がいかないのである。ロンドンから北へ向かう鉄道というと、1838年、1844年、1846年と敷設されて行った訳だが、最も遅い1846年の鉄道開通以前のクリスマスシーズンに、つまり1845年にチャーリーが郵便駅伝馬車で出発したと考えても、宿屋をめぐる回想には時間的にはそれ以後のものとしか思えない叙述が出て来たりして、奇妙といえば奇妙な話ではある。この調子で探せば他にも枚挙にいとまがない程奇妙な合点がいかない設定、叙述が出て来るものと思われ、いくらディケンズという作家に付きまとして離れない宿命的な欠点だとしても、ここではその度合いが激しすぎて、何故気付かなかったのかと、首をかしげざるを得ないのである。恐らくその答は本篇の主人公が語り手を兼ねる叙述のスタイル、つまり一人称体にある、といってよいだろう。主人公チャーリーの叙述を進めている筈が、一人称体の強みで、力が入って来ると、何時の間にか作者が自分のことを物語る箇所が出現するという変幻自在の現象が出来て、信じられないような矛盾だらけの奇妙な話もそれに伴って引き起こされて来たものと思われるのである。それで、作者もつい見過ごしてしまったのではないかと想像されるが、矛盾、奇妙さの指摘はこれ位にとどめて、これから宿屋をめぐる回想を追って行くが、当然のことながら、作品全体の三分の一に渡って繰り広げられているこれ

に関する叙述の主体は、チャーリーではなくてディケンズである。前述のごとくイギリス国内から大陸諸国を経てアメリカにまで描写対象が及んでいるので、できる限り叙述の順序に従いつつ、国別に分類する形をとって見て行くこととしたい。

- (1) 物語に登場する宿屋 (104, 10-106, 17)
- (2) イギリス国内の宿屋
 - ① the Mitre なるロチェスター (実際はチャタム) の宿屋 (106, 23-34)
 - ② 義妹メアリー・ホガース (Mary Hogarth) の死をめぐる回想とそれと関連を持つ宿屋 (106, 42-107, 26)
 - ③ ウィルトシャーの宿屋 (107, 33-108, 28)
 - ④ イングランド北部のとある宿屋 (110, 26-111, 2)
 - ⑤ コーンウォールの辺境の地にある宿屋 (111, 8-112, 6)
 - ⑥ ウェールズとイングランドの国境地方の宿屋 (112, 11-38)
 - ⑦ ウェールズの宿屋 (112, 39-42)
 - ⑧ スコットランドの宿屋 (112, 43-113, 10)
 - ⑨ イングランドの釣り人用の宿屋 (113, 11-22)
 - ⑩ 郵便駅伝馬車時代の宿屋 (113, 23-39)
 - ⑪ 当世風の鉄道経営のホテル (113, 40-114, 2)
- (3) スイスの宿屋
 - ① とある小さな宿屋 (108, 29-110, 9)
 - ② モンブランの麓の宿屋 (110, 10-25)
- (4) フランスの宿屋
 - ① パリの宿屋 (114, 2-7)

- ② 田舎の宿屋 (114, 7-13)
- (5) イタリアの宿屋
 - ① 粗末な路傍の宿屋 (114, 13-20)
 - ② さびれた宮殿風と寺院風の宿屋 (114, 20-27)
 - ③ マラリア地区の狭くて小さな宿屋 (114, 27-29)
 - ④ ベニスの広くて風変わりな宿屋 (114, 29-34)
- (6) ドイツの宿屋
 - ① ライン河沿いのせわしい宿屋 (114, 31-115, 2)
 - ② その他の宿屋 (115, 3-7)
- (7) アメリカの宿屋 (115, 10-36)

こうして列挙してみると、言及されている宿屋の多彩さとその存在する国と地域の無限とも思える広がりには驚く他ないが、次に各項目の叙述に立ち入って検討してみることにしたい。必要な場合は年月日とかその他の伝記的事実を補足し付け加えながら。

(1) 物語中の宿屋

三種類の身の毛もよだつような恐ろしい宿屋をめぐる物語が回想されているが、これを若いディケンズに話して聞かせたのは、例えば晩年の随想集 *The Uncommercial Traveller* (1860-69) の第15章 “Nurse’s Stories” で言及されている、やはり恐怖に満ちた物語を好んで語って聞かせた乳母メアリー・ウェラー (Mary Weller) とは別人で、どうもディケンズの祖母エリザベス・ディケンズ (Elizabeth Dickens) (1745?-1824) のようである。ディケンズの父親や近親者を

徹底的に悪く話す癖があったというこの女性が、使用人である乳母であるとは到底考えられないからである³⁾。祖母の膝に抱かれて聞かされた話というのが、宿泊客の喉をナイフで切って殺害してパイに変えてしまう宿屋の主人についての話であったことが、まず回想される。それに続けて、強盗として押し入った屋敷の美しく勇敢な女中に右耳を切り落とされたある田舎の宿屋の主人が、復讐する目的で結婚したその女中に逆に返り討ちにあって、熱く焼けた火かき棒で落命して果てる話が紹介され、三番目に極め付きの話が回想される。この話には下敷きとなったゴシック小説が存する事実長じに気付いたと注釈付きで、語り手である祖母の義兄が犬をお供に連れて旅に出た時、行き暮れてとある宿屋に宿泊することになったと回想の筆が起こされる。そして既に閉じこめられていた犬が義兄が宿泊していた部屋に飛びこんで来て、隅にわらで隠してあった血まみれのシーツを嗅ぎ出すシーンへと進んで、続けて次のような叙述が展開していく。

Just at that moment the candle went out, and the brother-in-law, looking through a chink in the door, saw the two dark men stealing upstairs; one armed with a dagger that long (about five feet); the other carrying a chopper, a sack, and a spade. Having no remembrance of the close of this adventure, I suppose my faculties to have been always so frozen with terror at this stage of it, that the power of listening stagnated within me for some quarter of an hour. (105, 36-43)

丁度その瞬間ろうそくが消えた。そしてドアの割れ目から外をうかがった義兄は、二人の凶暴な男が足音を忍ばせて2階へ上がって来るのを見た。一方の男は(およそ5フィートほどの)長々とした剣を持っていた。もう一方の男は

斧、袋、鋤を持っていた。この恐ろしい物語の結末については何の覚えもないので、物語がここまで進んで来ると決まって私の感覚が凍りついてしまったので、聴覚が15分くらいは機能を停止してしまったのではないかと私は思っている。

暗闇の中で繰り広げられる惨殺の場面を目前にして、恐怖のあまりおよそ15分間も感覚が凍りついてしまう死にも等しい体験をさせられるとは、人生の出発点において、早くも残虐非道に過ぎる扱いを受けたものだとしかいいようのない感じである。祖母対孫という図式だけにことさらその感がふかい。

四番目にジョナサン・ブラドフォード (Jonathan Bradford) なる宿泊客を殺害した馬丁の罪を被って誤って処刑された実在の宿屋の主人⁴⁾を描いたけばけばしい色彩の廉価本の回想へと叙述が進んで、この項は終了となるが、死の雰囲気によって覆われている回想であることだけは、指摘するまでもなく明らかである。

(2) イギリス国内の宿屋

① the Mitre なるロチェスター (実際はチャタム) の宿屋

これについては特に記すこともないが、この宿屋をめぐる回想の中で、作者が喧嘩をして目に黒いあざを作った時、泣き出した“my rosy little sister” (106, 31-32) と描写されているのが、実際は2歳年上の姉でこの時はもう帰らぬ人となっていたファニー・ディケンズ (Fanny Dickens) (1810-48) であることは、多少注目に価するか。

② 義妹メアリー・ホガースの死をめぐる回想とそれと関連を持つ宿屋

“I had lost a very near and dear friend by death” (106, 43-107, 1)

といきなり記述されているのは、いうまでもなく妻キャサリン (Catherine) の妹メアリー・ホガースのことであり、彼女の突然の死がもちあがったのは1837年5月7日⁵⁾のことであった。享年17歳。広大な荒野をのぞむある寂しい宿屋で、窓から月光に照らし出された銀世界を眺めながら一通の手紙を書いた。その中で“the dear lost one” (107, 11) が「美しく穏やかで幸福な」(107, 4-5) 霊となって出現する夢を毎晩見続けている事実を報告した途端に、以後“the beloved figure” (107, 14-15) が夢に出現することは絶えてしまった、と述べられている。この手紙は妻キャサリンに宛てて1838年2月1日にディケンズが、グレタ・ブリッジの the George and New Inn で書いた手紙を指し、内容や事実関係も特定の人物名は伏せられてはいるが実際の通りである。しかも the George and New Inn は本篇の舞台となっている柵屋のモデルとされている宿屋で、このメアリーとそれに関係のある宿屋をめぐる回想こそ本篇の中でディケンズが最も記述し描写したかったものではなかったか、という印象が否応なしに強烈なインパクトを持って襲って来るのである。メアリーとディケンズの関係はキャサリンを含めて要約すると、「妻に告白することによってメアリーの幻影が訪れなくなったということは、ディケンズとメアリーの結びつきに、義兄と義妹の関係をはるかにこえた、強烈な、多分に後ろめたいものがあったことを物語っている」⁶⁾ということである。

更にその後の16年間でイタリアに滞在していた時に、一度だけメアリーの霊が夢の中に出現した事実を叙述を進めている。

I entreated it, as it rose above my bed and soared up to the

vaulted roof of the old room, to answer me a question I had asked touching the Future Life. My hands were still outstretched towards it as it vanished, when I heard a bell ringing by the garden wall, and a voice in the deep stillness of the night calling on all good Christians to pray for the souls of the dead; it being All Soul's Eve. (107, 20-26)

霊が私のベッドの傍らに立ち、その古びた部屋のアーチ型の屋根へ舞い上がって行った時、将来の生活に関して私が問いかけた質問に答えてほしいと懇願した。霊が消えた時私は依然として両手をそちらに差しのべていた、その時庭の塀の傍らで鐘が鳴る音が聞こえ、万霊節前夜であるので、死者達の魂のために祈りを捧げるように全ての良きキリスト教徒に呼びかける声を夜の深い静寂の中で、私は聞いたのである。

これも1844年9月23日(?) ジェノアに滞在していた時の実体験を、日付は変えてあるが、そのまま叙述したものである。9月から万霊節(11月2日)前夜への変更は、メアリーを美化し神聖化しようとするディケンズの想いの反映であると思われるが、この項は徹底したメアリー讃歌となっていて、それは異様な程の生々しさに支えられているといってよい。それ程までに1855年の時点においてもディケンズはメアリーの面影にとり付かれ、彼女をめぐる回想にのめりこんでいたのであろうか。キャサリンとの関係はどのようになっていたのであろうか。この1855年は4年間(17歳~21歳)熱い想いを傾注したけれども、結局は破局を迎えて成就しなかった初恋の相手マライア・ビードネル(この時はマライア・ウィンター夫人 [Mrs. Maria Winter] と名乗っていた)と20年振りの再会を遂げ、中年の肥満体のお喋り女に変容していた彼女にひどい幻滅を味わった年としても記憶されて

いるが、この体験もこの項の叙述に影響を及ぼしているのだろうか。

③ ウィルトシャーの宿屋

ここで回想されている宿屋は1848年3月27日に宿泊したソールズベリーの *the White Hart Inn* がモデルとなっているようである。この宿に古代のドルイドの僧の生き残りと思われる得体の知れない居候がいて、枕元に忍び寄って来て大昔のアタナシオスの教義を唱えたのに恐れをなして、翌日一目散に逃げ出したエピソードが記述されている。雰囲気は底知れぬ不気味さに覆われていて、この項も死の雰囲気に包まれているといえよう。

④ イングランド北部のとある宿屋

宿泊した宿屋のどんなに切り取られ穴をあけられても、何時の間にか元の形に戻っている怪物的なパイを回想したこの項も、申し分なく不気味な雰囲気に覆われている。

⑤ コーンウォールの辺境の地にある宿屋

これは1842年10月27日から11月4日にかけて、ジョン・フォスター (John Forster), マクリース (Maclise), スタンフィールド (Stanfield) と共に旅行した体験に基づいている。乗っていた馬車が沼地で破損したこと、宿が祝祭のため超満員でやむを得ず宿泊した椅子職人の家で、枠だけの中身抜きの椅子に座らされて、つい油断してはスポッとハマりこんで動けなくなった“comic pantomime” (112, 4) が綴られている。

⑥ ウェールズとイングランドの国境地方の宿屋

絵のように美しい古い町の宿屋の “the strange influence” (112, 28) が叙述されている。いわゆるツインの部屋で服毒自殺が行われ

た後、そのベッドは決して使用されなかったけれども、同じ部屋のもう一方のベッドで宿泊した客が、きまってアヘンチンキの臭いを嗅ぎ自殺を思い浮かべたことを翌朝報告する、ということが何年間も続いたこと。宿屋の主人がそのベッドをカーテンごと焼却してしまっただ後も、この部屋に宿泊した客の殆どが毒薬の夢にうなされるという噂がある、という「奇怪な影響力」が叙述されていて、死の雰囲気にも濃密に包まれたエピソードであることは指摘するまでもない。

- ⑦ ウェールズの宿屋
- ⑧ スコットランドの宿屋
- ⑨ イングランドの釣り人用の宿屋

以上の三項目は内容的にとりたてて説明するものもないので、省略する。

- ⑩ 郵便駅伝馬車時代の宿屋
- ⑪ 当世風の鉄道経営のホテル

これは対にして見なければいけない項目で、⑩をディケンズが賛美しノスタルジアを寄せていることは、今更説明するまでもない。この箇所においても、⑩を“those wonderful English posting-inns which we are all so sorry to have lost” (113, 24-25) と叙述しているのに対して、⑪を“the new railway-house of these times near the dismal country station” (113, 40-41) と叙述しているのを対比させると、それは一目瞭然である。

(3) スイスの宿屋

① とある小さな宿屋

この項で描写されているエピソードは本篇の中でただ一つ作者の実体験の裏付けがないものだが、それでも実体験に基づく描写としか思えない響きを感じられる。ディケンズが冬期スイスに滞在したのは1844年11月、1846年10月-12月、1853年10月であるが、一番最後の1853年10月にこのエピソードに遭遇した可能性が最も強い、と Philip Collins は述べている⁷⁾。

1853年10月説に従うと、僅か2年前の実体験をめぐる回想を叙述した箇所ということになるが、場所は一山村の一階で牛、ロバ、犬、鶏などを飼っている素朴な宿屋。ここで働いていたアンリ (Henri) という若者がある夜突然姿を消す。その後6週間必死の捜索が行われたけれども、その行方は全くつかめない。宿屋の前に積み上げられているたきぎの山の天辺に、飼われているチャボの雄が登っては狂わんばかりに鳴きたてることがその間幾度も繰り返される。遂にある朝このチャボに怒り狂ってたきぎを投げつける同室でアンリと起居を共にしていたルイ (Loui) の姿を目撃した村のある女性が、閃くものがあってたきぎの山に登って、その底に行方不明の若者の死体を発見する。殺人が発覚したルイは逮捕され、主人の金銭を着服していたことがアンリの知るところとなったので、そのため彼を殺害したと自白する。ルイの処刑の場面は次のように描写されている。

In that Canton the headsman still does his office with a sword; and I came upon this murderer sitting bound to a chair, with his eyes bandaged, on a scaffold in a little market-place. In

that instant, a great sword (loaded with quicksilver in the thick part of the blade) swept round him like a gust of wind or fire, and there was no such creature in the world. My wonder was, not that he was so suddenly dispatched, but that any head was left unreaped, within a radius of fifty yards of that tremendous sickle. (109, 43-110, 9)

その州では依然として死刑執行人は刀で職務を遂行している。私はこの殺人犯が、小さな市場町の死刑台の上で、両眼を目隠しされて、椅子に縛り付けられて座っているのと出くわした。まさにその時、(刃の厚い部分に水銀を塗った)大きな刀が一陣の風か炎のように彼の周りで一閃して、彼をこの世から消してしまった。彼が出し抜けに処刑されたことではなく、そのすさまじい鎌の半径50ヤード以内の首がよくも刈り取られないで済んだものだ、という事実には私は驚愕した。

描写の迫真性は指摘するまでもないが、処刑役人のすさまじい必殺の一振りを描くタッチには、死に魅入れられ引き付けられている心情が感受される。死の雰囲気包まれているというより、死を願望し足を踏み入れかねない心情が描かれているように思われてならない。

② モンブランの麓の宿屋

1846年7月30日から31日にかけて宿泊したシャモニーの Hôtel de Londres がモデルになっている⁸⁾ ようであるが、特に触れるべきものが見当たらないので、この項の説明は省略する。

(4) フランスの宿屋

① パリの宿屋

② 田舎の宿屋

以上の二項目も特に説明すべきものがないので、省略する。

(5) イタリアの宿屋

① 粗末な路傍の宿屋

これも特に説明すべきものがないので、省略する。

② さびれた宮殿風と寺院風の宿屋

“their labyrinths of ghostly bedchambers, and their glimpses into gorgeous streets that have no appearance of reality or possibility” (114, 25-27) と、往時の栄光と余りにも対照的な現在の死の雰囲気に覆われた衰退したたたずまいが説明されている。

③ マラリア地区の狭くて小さな宿屋

④ ベニスの広くて風変わりな宿屋

以上の二項目も特に説明すべきものがないので、省略する。

(6) ドイツの宿屋

① ライン河沿いのせわしい宿屋

② その他の宿屋

以上の二項目も特に説明すべきものがないので、省略する。

(7) アメリカの宿屋

これはディケンズが妻キャサリンと共に1842年1月から6月にか

けてアメリカを訪問した時の経験に基づいている。欠陥が色々あるにもかかわらず、結局はアメリカの宿屋は「親切で、寛大で、度量が大きく、偉大な国民に属している」(115, 35-36) と述べている。

以上必要と思われる分析と考察を加えながら各項目について見て来た訳であるが、(1)、(2) ②、③、④、⑥、⑩、(3) ①、(5) ②と死の雰囲気覆われた不気味な叙述が頻繁に反復されていることが、全項目を貫流する顕著な特徴として浮かび上がってくるように思われる。中でも(2) ②におけるメアリー・ホガースをめぐる叙述は圧倒的で、全項目の核心をなすものであろう。1838年1月30日から2月6日にかけて滞在したグレタ・ブリッジの the George and New Inn を、本篇の主人公チャーリーが降り続く雪のため一週間閉じこめられる宿として設定し、これを舞台として各回想が走馬燈のように現れては消えているのであるから、ジェノアに滞在していた時を唯一の例外として、1838年2月以降彼女の幻影が夢の中に出現しなくなったとはいえ、1855年の時点においても、メアリーはディケンズの内面で無限に美化され神聖化された存在として、生き続けていたことは明らかである。キャサリンとの新婚生活の最初から一つ屋根の下で起居を共にして、一年後に突然他界したこの義妹へ寄せるディケンズの想いは、本篇においても鎮魂の調べをたたえて描き出されているのである。自己の魂の癒しを霊となったメアリーに求めようとしているかのように。これには前述のごとくマライア・ビードネルとの再会と深い失望を覚えさせられた体験が、深刻な影響を及ぼしていることは十分に考えられるし、また1858年の妻キャサリンとの離婚までわずか3年しか離れていないことも、考慮に入れなければいけないであろう。そこまでディケンズの魂は傷

つき、疲れ、絶望し、孤立感に襲われ苛まれていた、ということであろうか。それが幼年期からの死の雰囲気覆われた暗く不気味な宿屋をめぐる回想の連続となって投影されているのであろうか。

クリスマス物の系譜において、1852年の *The Schoolboy's Story* あたりから始まった登場人物のモノログ形式による叙述が、1854年の *The Seven Travellers* で一人称体モノログによる叙述として初めて確立された、と Deborah A. Thomas は指摘している⁹⁾。本篇 *HT* も当然その流れに属している訳で、ディケンズはその技法を十二分に駆使しているといってよい。前述したごとく、主人公チャーリーのモノログを追う叙述に自己のモノログを織りこんで、重層的なタッチで叙述を展開させているからである。これも前述したごとく、本篇の主人公の回想にしては不自然であり整合性を欠いている点は明白であり、否定できるものではない。だが、自己の実体験を土台としてそれを変形させ虚構仕立てにすることを通して、作品の流れの中に嵌めこみ、主人公の宿屋をめぐる回想を叙したモノログに、自身の宿屋をめぐる回想を叙したモノログを付加するという二重の技法を機能させて、作品の枠組みに大きな破綻をきたすことなく、読者を納得させ作品世界へ引きずりこんで行くディケンズの手腕には舌を巻かざるを得ない。少々無理を冒してでも作品の主人公の宿屋をめぐる回想という語りをかりて、自己の半生の回顧にとり付かれたかのごとく駆り立てられ固執せざるを得ない状況に、ディケンズは追いこまれていたのである。それは宿屋をめぐる回想に続く箇所叙述に投影されているように思われる。

I had been going on lately at a quick pace to keep my solitude

out of my mind; but here I broke down for good, and gave up the subject. What was I to do? What was to become of me? Into what extremity was I submissively to sink? Supposing that, like Baron Trenck¹⁰, I looked out for a mouse or spider, and found one, and beguiled my imprisonment by training it? Even that might be dangerous with a view to the future. (115, 37-116, 1)

私は最近は回想にふけるスピードをあげておのが孤独に目を向けないようにした。しかしここまで進んで来て回想の源泉が永久に尽きてしまい、私は断念せざるを得なかった。自分は一体何をなすべきか。これから一体どうなるのか。どんな地獄へなすすべもなく沈もうとしているのか。トレンク男爵のように、鼠か蜘蛛を探し求めて、それを見つけ、そして訓練することで獄中生活を紛らすことにでもなったら、自分はどうなるのか。それでさえ将来への見通しとしては危険すぎるかもしれないのだ。

メアリー讃美を中核に置く宿屋をめぐる回想も出尽くして種切れとなり、暗澹とした絶望的な心情に、回想へ向かって注がれていた心的エネルギーも押し潰され、すっかり燃え尽きてしまうと、チャーリーならぬディケンズに圧倒的な力をもって孤独感が襲いかかり、閉じこめてしまう。幽閉され鎖でつながれた囚人のごとくに。これは同じ1855年の12月より月刊分冊の形で執筆が開始された長篇 *Little Dorrit* の主題と雰囲気にも色濃く投影されていて、ディケンズはまさに出口なしの死の世界に足を踏みこみかねない無明の闇を喘ぎ喘ぎ進んでいるかのごとき状況下にあったのである。

その意味で主人公チャーリーが大雪で閉じこめられて回想にふける宿屋を the Holly-Tree Inn と名付け、それを作品のタイトルとしてもディケンズが用いているのは、いかにも象徴的である。CS

に収録する時 *The Holly-Tree Inn* から *HT* へと改題されたことが、より一層その印象を強くする。柵はいうまでもなくクリスマスを象徴する存在であるからだ。救済と癒しを願望し希求してやまないディケンズに、1855年の柵は多少でも応えることができたであろうか。

〔注〕

- 1) “Holme Lee” はペンネームで本名は Harriet Parr という。
- 2) この問題に関しては Deborah A. Thomas, “The Chord of the Christmas Season: Playing House at the Holly-Tree Inn”, *Dickens Studies Newsletter*, December, 1975, pp. 103-8 を参照のこと。
- 3) Michael Allen, *Charles Dickens’ Childhood* (London: MacMillan, 1988), pp. 31-32.
- 4) オックスフォード在の宿屋の主人で、処刑されたのは1742年のことであったという (*The Dickens Index*, eds. Nicholas Bentley et. al. [Oxford: Oxford University Press, 1988], p. 31)。
- 5) ディケンズの伝記的事実は主として *The Dickens Index* を、そして時間的な方面は、*A Dickens Chronology*, ed. Norman Page (Houndmills: MacMillan, 1988) を参照した。
- 6) 小松原 茂雄『ディケンズの世界』(東京: 三笠書房, 1988), pp. 103-4.
- 7) *Dickens and Crime* (London: MacMillan, 1965), pp. 234-5.
- 8) Cf. *The Dickensian*, vol.2, 1906, p. 244.
- 9) *Dickens and the Short Story* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1982), pp. 81-82.
- 10) Frederick von der Trenck (1726-94)。プロシャの軍人にして外交官。フリードリッヒ大王 (1712-86; プロシャ王 [1740-86]) により16年間鎖につながれて獄中に幽閉され、1787年回想録でそれを明らかにした (*The Dickens Index*, p. 265)。

第二章

The Perils of Certain English Prisoners

について

— 離婚直前のディケンズ —

ディケンズは『クリスマス・キャロル』から数えて15番目の、そして CS に収録されているものの中では10番目のクリスマス作品として、*Perils* を HW に、1857年12月19日号のクリスマス増刊号として掲載した。ただしこの増刊号の日付が12月7日となっていて、12月12日号まで収録されている HW 第16巻の目次に *Perils* がクリスマス増刊号として掲載されているので、ディケンズとしては当然この第16巻に収録する予定であったと思われるが、結局は予定より遅れて第17巻の12月19日号のクリスマス増刊号として収録され刊行されたのであった。この時の題名は *The Perils of Certain English Prisoners, and Their Treasures in Women, Children, Silver, and Jewels* となっており、構成は次のようになっていた。

- ① “The Island of Silver-Store” by Charles Dickens (pp. 1-14)
- ② “The Prison in the Woods” by Wilkie Collins (pp. 14-30)
- ③ “The Raft on the River” by Charles Dickens (pp. 30-36)

これが Charles Dickens Edition の刊行に際して CS に収録さ

れる時、コリンズの手になる第二章が削除され、タイトルも *Perils—In Two Chapters* と簡略化されて収録されたのである。それで、以下削除されたり付加されたりした文章はないものの *HW* と *CS* の異同に必要なに応じて言及しつつ、コリンズ作の第二章と1857年におけるディケンズの他の活動も参照しながら、*Perils* の分析と考察を通して作家の内面の軌跡との関わりを見て行くこととした。

I

コリンズが *HW* のクリスマス増刊号に掲載された物語の作者として登場するのは1854年の *The Seven Poor Travellers* が最初であり、翌55年の *HT* と、56年の *The Wreck of Golden Mary* (簡略化された *CS* のタイトル) に参加し、そして *Perils* と続く訳であるが、コリンズを含めて1854年が4人、55年が4人、56年が5人という風に数人の作家がディケンズの依頼を受けて執筆しているのに対し、*Perils* はコリンズのみが依頼を受けて執筆に参加して作品を創り出していて、その点に際だつ特徴が存していることは指摘するまでもあるまい。12歳も年下の作家としての経験も未だ浅い若い作家を唯一のパートナーとして作品を生み出したことが、「ディケンズのコリンズの文体への信頼の強まり」¹⁾の反映であることは論をまたないが、だからといって、ディケンズがコリンズからの文学的影響を何らかの意味で受けたということにはならないだろう。仮に影響を受けた事実があるとしても、それはコリンズが *The Woman in White* (1860), *No Name* (1862), *Armada* (1866), *The Moonstone* (1868)

と立て続けに力作を発表した1860年代の話になると思われるからである。1857年の時点においてはコリンズはディケンズの「弟子のような存在」²⁾であり、それが端的に表れたのが *Frozen Deep*³⁾ なる戯曲をめぐる出来事であったのである。コリンズの手になる *FD* をディケンズは1857年の1月から8月にかけて四度も座長兼主演俳優として上演したが、実体は「ディケンズの指示に従って」⁴⁾コリンズが執筆した戯曲であることは明白であるという。ディケンズが *FD* の公演に異常とも思えるほど打ち込んだのは、一つには6月に他界した親友であった劇作家ダグラス・ジェロルド (Douglas Jerrold) (1803-57) の遺族救済のために、この公演でどうしても2000ポンドの収益を生み出さねばならない、という差し迫った目標が存していたこともあるが、他にも大きな理由が存していた。それは1845年第二次探検隊を率いて北極地方へ出発したまま消息が途絶えてしまったサー・ジョン・フランクリン (Sir John Franklin) (1786-1847)⁵⁾ をモデルとして創作された *FD* の主人公リチャード・ウォーダー (Richard Wardour) にディケンズが強烈な一体感を覚え、凄まじいばかりの迫真性をもってこの人物になりきった演技を繰り広げたことに、何よりも雄弁に示されている。愛する女性への一方通行の愛に殉じて、自己の命を犠牲にして恋敵を救出したこのウォーダーの「自己犠牲の壮大な悲劇」⁶⁾ に強く魅せられて、異常なほどの興奮と精力をこめて演技したので、短い時間ではその疲労を抜き取ることができないほどであった⁷⁾。なお8月のマンチェスターでの *FD* の公演の際、特に参加を求めた母親と二人の娘よりなるプロの女優達の一人が、翌58年のディケンズ夫妻の離婚の原因の一つとなり、晩年のディケンズの愛人ともいわれるエレン・ターナン (Ellen Ter-

nan) (1839-1914) であったことも見落とす訳にはいかない重要なエピソードである。

こうした *FD* から出てきたモチーフとともに *Perils* に大きく深い影を落としているのが、5月に勃発したセポイの反乱 (the Indian Mutiny) である。これはディケンズに「深く終生消えることのなかった影響」⁸⁾を与えたが、とりわけこの事変で捕虜となったイギリスの女性達の勇敢な行動に感銘を受けた彼は、反乱が出来して騒然となっているインドは避けて、舞台を南アメリカに移した設定でそれを *Perils* のモチーフとして使用する⁹⁾ことに思いを致したのである。

II

以上の二つのモチーフを土台として *Perils* が創作された訳であるが、ディケンズがウィルキー・コリンズともども何時頃から執筆にとりかかったのかは不明である。11月25日付けのミス・バーデット＝クーツ (Miss Burdett-Coutts) 宛の書簡の中で作品の出来栄えに対する自信を披歴している¹⁰⁾ので、その頃までには完成していたことが窺われるだけである。6月に長篇 *Little Dorrit* の19ヶ月に及ぶ月刊分冊による執筆を完成させ、*FD* の公演活動を精力的に繰り広げ、9月には2週間に及ぶ北イングランドへの旅行にコリンズとともに出掛けて、その次第を *HW* に10月一杯をかけて *The Lazy Tour of Two Idle Apprentices* と題する物語にまとめて発表するなど、多忙を極めた1857年を締めくくるクリスマス物語として *Perils* が生み出されたことだけは確かである。

さて、その *Perils* であるが時代設定は1744年、時の国王はジョージ三世となっている。だがこれまでの説明から容易に察知できるようにシチュエーション、テーマ等が1857年当時のものであることは指摘するまでもない。主人公はギル・デイヴィス (Gill Davis) という海兵隊の一兵卒。孤児でチャタム近郊のスノリッジ・ボトムで羊飼いをしていた男に虐待されるだけの境遇に耐えかねて逃げ出した後、転々としている間に29歳の海兵隊員となっていたという説明。ギルなる妙なファーストネームの由来は次のようである。

Such name of Gills was entirely owing to my cheeks, or gills, which at that time of my life were of a raspy description. (163)

ギルという名前は幼児の時私がよくひっかいていた頬、もしくは顎の下の肉に由来していた。

幼児がよくやる顎の下の肉をひっかく癖があったことから、Gills というファーストネームを何時の間にか与えられたと。この箇所と同じ頁の6行ほどさかのぼった箇所は Gills と記述されているけれども、他の箇所は矛盾点について一切説明が加えられないまま Gill と記述されているので、ギルで話しを進めて行かざるを得ない。更に次のような説明が出てくる。

I have the great misfortune not to be able to read and write, and I am speaking my true and faithful account of those Adventures, and my lady is writing it, word for word. (164)

私は読み書きができないという大変なハンディを背負っているので、私が嘘偽

りなく忠実に語るおのが冒険談を、一語ずつ、奥様書き取って下さることになっている。

天涯孤独で社会の底辺を這いずりまわって来た悲惨な生い立ちのために、無学文盲である彼が語る回顧談を‘my lady’と呼ばれる女性書き取るという体裁で物語が進行していく、ということが説明されている。しかもすべて真実のみを語り、筆記する側も一語も削除は行わないという約束の下で。主人公が語り手と筆者を兼ねる設定が殆どを占めているクリスマス物の系譜の中で、*Perils* の語り手と筆者が分離している一人称体は特異な形態をなしているといっよい。しかも語り手と筆者の関係も一種濃密で独特なものが認められ、「奇妙な物語」¹¹⁾という見方も十分に成り立つことは申すまでもあるまい。と同時に先述した本篇のモチーフと密接につながっていることも。

かようなギルと親友ハリー・チャーカー (Harry Charker) 伍長とを含む24名の海兵隊が軍艦クリストファー・コロンブス号に乗り組んで、ジャマイカからベリーズを経てホンジュラスの沖合いに浮かぶ島に辿り着いたところから物語は始まる。これは架空の島で名前は第一章のタイトルにもなっているシルヴァーストア島。本土で採掘される銀を年に一回軍艦が運搬のため受取りに来るまで、安全で便利な保管場所として使われているのでこの名前がついた次第。その銀を狙う海賊の噂が絶えないので、主人公を含む海兵隊が増援部隊として派遣されて来たのである。上陸したギルとチャーカーに、島のイギリス人社会の構成を説明してくれた艦長の妹だという若い女性がいる。

The name of the captain of the sloop was Captain Maryon, and therefore it was no news to have from Mrs. Belltott, that his sister, the beautiful unmarried young English lady, was Miss Maryon. The novelty was, that her Christian name was Marion too. Marion Maryon. Many a time I have run off those two names in my thoughts, like a bit of verse. Oh many, and many, and many a time! (170)

その軍艦の艦長の名前はメアリアン大尉といった、それ故に彼の妹、つまりその美しい未婚の若いイギリス人女性がメアリアン嬢であることは、ベルトット夫人から聞くまでもなかった。ただ彼女のクリスチャンネームもメアリアンであることは、初めて知ったことだった。メアリアン・メアリアン。私はこの名前を、詩の断片のように、何度も繰り返し心の中で呟いたものだ。おお何度も、何度も、何度も繰り返して！

叙述のトーンからすると、*HW* の原文で使用されていた最後の ‘many’ と ‘a time’ の間のコンマは、そのまま残しておいた方がより効果的であったのではないか。それとここで紹介されているメアリアンという名前も注目される。四作目のクリスマス物である *The Battle of Life* (1846) のヒロイン、メアリアン・ジェドラー (Marion Jeddler) と同じ名前であるからである。当然のことながら、婚約している相手アルフレッド・ヒースフィールド (Alfred Heathfield) と姉グレイス (Grace) とを結ばせるために、自分から身を引いておのが愛を犠牲にした気高く崇高な女性メアリアンの人間像を、*Perils* のメアリアンが受け継いでいることと想像される。メアリアン・メアリアンとは木霊みたいで何か妙な感じがするが、それだけそうした「天使のごとき」 (“angelic”)¹²⁾ イメージが強まってくる

ことは確かである。それと同時に *FD* のリチャード・ウォーダーと同じくギル・デイヴィスが、一方通行の愛をこの女性に対して抱いていることも明らかである。

この後乗ってきた軍艦が原因不明の浸水事故を起こし、海賊出現の知らせも飛び込んで来て、兵隊の殆どはボートでその追跡に出払う。ギルは島のイギリス人を守る要員として残り、兄を案じるメアリアン嬢に事情を説明して彼女を住まいまで送り届けた後、おのが素性の卑しさを慟哭する。

It continuing very dark, I asked to be allowed to take them back. Miss Maryon thanked me, and she put her arm in mine, and I did take them back. I have now got to make a confession that will appear singular. After I had left them, I laid myself down on my face on the beach, and cried for the first time since I had frightened birds as a boy at Snorridge Bottom, to think what a poor, ignorant, low-placed, private soldier I was. (181)

とても暗かったので、私は彼女達に送らせてほしいと申し出た。メアリアン嬢はとても喜び、私と腕を組んでくれ、私は無事送り届けた。私はこれから奇異に思われるかも知れない告白をしなければならぬ。二人の女性を送り届けた後、浜辺でうつ伏せになって、スノリッジ・ボトムで子供の頃小鳥を脅していた時以来初めて私は、自分がどれ程貧しく、無知で、身分の低い、一兵卒に過ぎないかということを思って、涙を流した。

HW の原文で ‘cried’ と ‘for the first time’ の間にあったコンマが削除されているが、ここもコンマを使った方がより効果的であろう。メアリアン嬢への愛にとり付かれればとり付かれるほど、彼女

との身分や階級のどうにも埋めようのない隔たりが意識されて、断腸の思いに襲われているギルの哀切を極めた表白がなされているのである。手の届かない高嶺の花を愛した男の宿命とってしまえば、それまでではあるけれども。

もっともそのような個人的事情にはお構いなく海賊の襲撃が始まる。海賊出現の知らせは実は海兵隊や島の守備隊を釣り出すために仕組まれた罠で、一部分の兵士達と民間人しか残っていないところへ大勢の海賊が襲撃をかけて来たのである。

ところで、軍隊をおびき出すための偽りの情報を持ち込み、イギリス人に対して表面上は満面笑みをたたえた陽気で愛想の良い態度を示すが、裏では海賊と通じていた原住民の名前がクリスチャン・ジョージ・キング (Christian George King) というのは、何とも皮肉な設定ではある。皮肉な設定といえばポーディッジ (Pordage) なる弁務官もそうで、この小役人は徹底した皮肉と嘲笑を浴びる存在として戯画化されている。海賊との戦いの真っ最中における彼の姿は次のようである。

All the time, Mr. Commissioner Pordage had been wanting to make a Proclamation to the Pirates to lay down their arms and go away; and everybody had been hustling him and tumbling over him, while he was calling for pen and ink to write it with. (185)

戦闘の間中、ポーディッジ弁務官は海賊に向かって武器を捨てて立ち去るようにとの布告を出すことを望んだ。布告を認めるためのペンとインクを求めて叫んでいる彼に、全員がぶつかりつまずいた。

戦闘中だというのにおのが職務の形式に固執し続ける滑稽な姿が活写されている。仕上げとして、榮譽に包まれ黄疸で他界するポーディッジ氏の最期の姿が第三章で紹介される。

The end of Mr. Pordage... was, that he got great compliments at home for his conduct on these trying occasions, and that he died of yellow jaundice, a Governor and a K.C.B. (203)

ポーディッジ氏の最期は、(中略) 戦闘などにおける振る舞いを故国で大いに賞讃され、二等勲爵士の総督に榮進し、黄疸で死去した、ということだった。

これはポーディッジ氏を通して叙勲に集約される立身榮達の空疎さを痛烈に皮肉ると同時に、戯画化の極致をなす描写といってよい。ディケンズは *Oliver Twist* (1837-9) のバンブル氏 (Mr. Bumble) を始めとする役人や官僚連のすぐれた戯画を創造しているが、このポーディッジもそれに列なる資格を十分に持つ人物である。一方、C. G. キングは当然の報いを受ける感じで情け容赦なく射殺されてしまう (205)。

かくして、海賊との激しい戦闘が繰り広げられたけれども、所詮は多勢に無勢。ギルの唯一の心の友ハリー・チャーカー伍長の死 (187) を始めとする手痛い犠牲を払って相当数の海賊を倒しながらも、生き残った者は結局は捕虜となってしまう。総計82人のうち男が14人、女が15人、子供が7人の合計36人の生き残った者全員が。戦闘が続いている間中、メリアン嬢は男達を助けて抜群の働きを見せる。かてて加えてギルの命を三度も救うという驚くべき勇敢さ

を發揮する。

I saw a heap of banded dark hair and a white dress come thrice between me and them, under my own raised right arm, which each time might have destroyed the wearer of the white dress; and each time one of the lot went down, struck dead. (190)

私は豊かな束ねた黒髪と白い服が三度も私と敵の間に、その白い服を着ている人を倒したかも知れない（刀を持って）振りかざした私の右腕の下に、飛び込んで来るのを目撃した。そしてその度毎に敵の一人が倒れ、事切れた。

これだけでも奇跡的な信じ難い行動であるが、その上彼女はギルの左腕の深手に自分の衣服を裂いて、それを包帯代わりに巻き付けてやったり (ibid.)、捕虜となった後もギルを気遣って、「静かな勇氣、同情、信頼で一杯の」(“full of quiet courage, and pity, and confidence”)(192) 眼差しを注いだりするという風に、優しさと勇敢さの化身としかいいようのない態度を示す。かような彼女の行動を、作家がセポイの反乱で發揮された同胞の婦人達の勇敢な行動への賞讃の具現化として、描写していることは述べるまでもない。それはそれとして、所詮は実を結ぶことは有り得ないにもかかわらず、とり付かれればとり付かれるほど激しい苦悶に喘ぐ状態に陥るだけであるにもかかわらず、こうした態度を示されたギルのメアリアン嬢への愛が募る一方で、とどまるところを知らないことも述べるまでもあるまい。

III

第二章はウィルキー・コリンズの執筆になるものであり、量的には *HW* のほぼ半分を占めている。“The Prison in the Woods” というタイトルが示すように、海岸から遠く離れた本土の山岳地帯の深い密林中に存在する太古の壮大な宮殿の遺跡を最高の牢獄として、海賊により連行された捕虜達が、丸太を作り出す労役を巧みに利用して二隻の筏を組むのに十分な丸太を集め、メアリアン嬢の活躍で夜食に仕込んだ催眠性の果汁が効き目を発揮して海賊達が眠りこけている間に脱出して、大急ぎで（それでも4時間20分もかかって）男達の手で筏を何とか組み立てて、密林中を通り抜けている河に乗り出す、スリルとサスペンスに溢れた物語が展開される。海賊達は銀や宝石と交換する人質として22名の女子供を捕虜にしたのはよいとしても、14名の男達を労役で使うために生かしておいたのが結局仇となってしまったのである。

この第二章においてもギルの内面におけるメアリアン嬢の存在感は強化と深化の一途を辿る。それは例えば次のような彼の言葉より感受することができよう。

“A woman with a clear head and a high courage and a patient resolution — all of which Miss Maryon has got, above all the world — may do more to help us, in our present strait, than any man of our company,” says I. (*The Extra Christmas Number of HW*, vol. 17, p. 26)

「明晰な頭脳と卓越した勇気と粘り強い決断力を備えた女性は—これらのものをメアリアン嬢は、他の誰よりも、備えています—現在の苦境においては、われわれ男どもより、みんなの助けとなって役に立ってくれるものです」

ディケンズほどの切なさを感じさせるトーンで描かれてはいないようだが、高嶺の花として仰ぎ見て、愛とともに崇拜の念を強く含むギルのメアリアン嬢への思慕の情が凝縮され浮き彫りになっている場面である。33歳という年齢から来るのか、資質の違いから来るのか、波乱に富んだ展開でそれなりに面白いけれども、コリンズの手になるこの第二章はどうもディケンズほどの深さが欠けているようで、その辺にもの足りなさが残ることは否定できない。

IV

筏で脱出して7日目の夜、河の水量が増して海が近くなったとのセリフをギルから引き出したのに続けて、メアリアン嬢はイギリスに帰れることを非常に喜んだのであるが、ギルは“England is nothing to me” (197) と母国の価値をすげなく否定してしまう。それを強く諫めて彼女は次のようにいう。

“No, good friend, you must not say that England is nothing to you. It is to be much to you, yet — everything to you. You have to take back to England the good name you have earned here, and the gratitude and attachment and respect you have won here: and you have to make some good English girl very happy and proud, by marrying her...” (197)

第二章 *The Perils of Certain English Prisoners* について

「いいえ、イギリスは自分にとっては無価値だなどと言ってははいけません。母国は貴方にとっては大きな価値を持っています、それどころか一全ての存在といってもよいものです。ここで獲得した名声、感謝、愛慕、尊敬などをあなたは母国へ携えて帰るべきです。そしてあなたは母国でどなたかお似合いの方と結婚して、その人を幸せにし誇りを持つ存在としなければいけません（後略）」

善意と思いやりに溢れた有効適切な助言と励ましの言葉であることは疑いの余地はない。だが、結婚のこゝを持ち出したことがギルを激しく傷つけ悲嘆のどん底に追い込み、徹底的に打ちのめしてしまったのである。この後ギルは一晩中悶々と苦しみ、“you are no better than the mud under your foot” (197-8) と自己を泥と同一視するという、被虐とも自暴自棄とも思えるセリフを自分に向かって投げつける絶望の淵に沈んだ態度をとり続ける。それだけメアリアン嬢への秘められた思慕の情が激しく強かったことはいうまでもない。「貴方が他の娘さんと結婚したところを拝見したい」とはよくぞいったもので、完璧な善意から生まれた言葉が完全に引導を渡す、何とも皮肉な軌跡を描くことになったのである。この後更に追い打ちをかけて駄目を押す出来事が持ち上がる。それは捕虜達の筏が彼等を捜し求めて河を遡ってきた兵士達のボートと無事に再会を果たした時に起こった。一旦は海賊の陽動作戦に引っかかって海上に釣り出された守備隊と海兵隊は大急ぎで島へ引き返し、その後本土へと海賊と捕虜の後を追って必死の探索を続けていたところで、脱出した捕虜達との劇的な再会を迎えた訳なのである。この時ギルは守備隊長であり、メアリアン嬢と恋仲でもあったジョージ・カートン大尉 (Captain George Carton) から、またしても善意に溢れた宣告を受ける。

“My brave fellow, you have been Miss Maryon’s body-guard all along, and you shall remain so. Nobody shall supersede you in the distinction and pleasure of protecting that young lady.” (202-3)

「君はずっとメアリアン嬢を体を張って守ってくれたそうだな。これからもそうしてくれ。彼女を守るという荣誉と喜びを君から取り上げて他の者に譲ることは絶対にありえないのだ」

これは士官が一兵卒に与える言葉としては、最高級の好意と感謝のこもったものであろう。だがギルにとっては、「お前は彼女のボディガードとしてよくやってくれた。これからもよろしく頼む。お前は所詮はその程度の存在なのだから」と宣告されたようなもので、気持が重苦しく屈折するばかりである。表面上は感謝のセリフを口にしながらも、この大尉をその実重苦しく打ちのめされた気持で見つめるばかりである。

I have now this other singular confession to make, that I saw him with a heavy heart. Yes; I saw him with a heavy, heavy heart. (203)

私は今ここにもう一つ別の異様にみえる告白つまり私はカートン大尉を重苦しい気持ちで見つめた。本当に、極度に重苦しい気持ちで見つめた、という一を行う。

これでギル・デイヴィスの運命は決まった。一方通行の片想いに過ぎない妄想であることは最初から分かりきっていたことではあるけれども、前述したごとく当のメアリアン嬢のみならず、その恋人カ

ートン大尉からも、感謝、好意の発露という形をとった決定的な宣告を浴びせられる残酷な場面に遭遇して、徹底的に傷つき参ってしまったのである。無事に再会を遂げた喜びを全身で放射している二人を目の当たりにしているだけに、その衝撃の深刻さが筆舌に尽くし難いものであったことはいうまでもない。かような回復不能とも思えるほどの絶望的で過酷な試練にさらされた後もギルの愛は消えることはなく、そのため激しく長く苦しんだと述懐している(207)。そしてずっと軍隊の勤務を続け、昇進の話(士官かと思われる)も出たけれども、少々努力しても解消できなかった無学文盲が障害となって、結局は一兵卒で終わった¹³⁾彼に対して、カートン大尉の方は Admiral Sir George Carton, Baronet (208) とあるから、順調に昇進を重ねて登りつめていった、という明と暗を絵に描いたような対照的な人生を送ったことになる。それにしても *Perils* における愛と人生の全面的な勝利者のカートンなる名字が長篇 *A Tale of Two Cities* (1859) では、ギル・デイヴィスの役柄を受け継いだ人物の名字 (Sydney Carton) に使用されているのは、一体何故なのであろうか。ディケンズが繰り返し使用していることに重要性がある¹⁴⁾のは当然としても、名字を除けば共通性がないだけでなく、ギルのように一方通行の愛を捧げる人物にカートンという名字を与えるとは、「何とも奇妙」("strangely enough")¹⁵⁾ではある。とまれ、ディケンズにカートンなるこのファミリーネームにこだわり固執するだけの理由が存していたことだけは明らかである。ところで、メリアン嬢がカートン大尉夫人となったことはいうまでもないが、提督となり準男爵に列せられた夫に従ってその令夫人となった彼女についての説明が、本篇を締めくくる末尾において展開されて

いる。

It was my Lady Carton who herself sought me out, over a great many miles of the wide world, and found me in Hospital wounded, and brought me here [i.e. this present fine old country-house of Admiral Sir George Carton, Baronet]. It is my Lady Carton who writes down my words. My Lady was Miss Maryon. And now, that I conclude what I had to tell, I see my Lady's honoured gray hair droop over her face, as she leans a little lower at her desk; and I fervently thank her for bearing so tender as I see she is, towards the past pain and trouble of her poor, old, faithful, humble soldier. (208)

世界中何マイルもかけて、自身で私を捜し求め、傷ついて入院していた私を見つけ出し、この屋敷に連れて来て下さったのは奥様であった。私の言葉を書き留めて下さるのも奥様である。奥様とはメアリアン嬢のことである。そして今、是非とも話しておかねばならなかったことを最後に話し終えると、もったいなくも奥様の白いもののまじった髪が顔の前に垂れ下がり、彼女の机に向かう姿勢がそれまでよりもっと前かがみになっているのを私は認める。その上貧しく、年老いた、忠実で、控え目な一兵士の遠い昔の苦しみと悩みに対して、今その姿を認めているごとく彼女がやさしく接して下さっていることに私は心の底から感謝している。

冒頭から使われていた 'my lady' が (上の引用文では 'my Lady' となっている) メアリアン嬢であることは、この箇所における種明しを待つまでもなく、容易に察知できる事実である。彼女が遠い異国で戦傷を負い病院に収容されていた老兵ギルを捜し当ててイギリスへ連れ帰り、おのが屋敷で療養させたこと。ギルが永遠の恋人メアリア

ン嬢へ身も魂も捧げて独身を守り、彼女の手で連れ戻されるまで故国イギリスの土を踏もうとはしなかったこと。そしてギルの激しく深い苦悩が長い年月の巡りを経ている間に、多少なりとも和らいでいったこと。以上の事柄を述懐するギルの言葉をメアリアン嬢が書き留めていったことは、十分に理解できる納得の行く話しである。だが、机に顔を伏せて涙を流している彼女の姿と、それを見て深い感謝の念に襲われているギルの心情とを叙した部分は、何とも奇妙で納得がいかない。メアリアン嬢に書き留められる話でないことは指摘するまでもないし、字の書けないギルが筆記できる話しでないこともいうまでもない。ということになると、ディケンズでは有りがちな現象ではあるのだが、つい作者の思い入れが強すぎて、ギルの無学文盲という設定を忘れて作品世界に闖入して、彼の立場からの叙述を行ってしまったのであろうか。その意味でも、*Perils*は「奇妙な」味わいを締めくくりの部分にまで引きずっている「奇妙な」作品ではある。

V

1857年を迎えてディケンズ夫妻の仲は悪化の一途を辿るばかりであった。ディケンズが手を入れて改築を済ませ家族ともどもロンドンから移り住んだばかりのギャズヒルの邸宅をデンマークから訪問して、6月から7月にかけて滞在したハンス・クリスチャン・アンデルセン (Hans Christian Andersen) (1805-75) は、毎日かかさず日記をつけているが、その6月29日の項に「全体から見ると、家族全体とディケンズと令夫人との間には、たいへんないざこざがある。そう

いい気持ちはしない」¹⁶⁾という一節が見える。最初は2週間の予定で来訪したアンデルセンの5週間に及ぶ滞在が長過ぎて、ディケンズを始め全家族をうんざりさせ閉口させたが、それを割り引いても、アンデルセンの目にもディケンズ夫妻の仲がうまくいかず、そのために家族中が不安と混乱に陥っているように映った、という印象を率直に述べている一節なのである。更に10月にはロンドンは大ヴィストクの邸宅の寝室を別室に移して、本来の夫婦用の寝室に通じるドアを塞いでしまう、という出来事が持ちあがる¹⁷⁾。これと前後するが、9月友人ジョン・フォスター宛の書簡で「キャサリンと自分とはお互い不適格である」と述べ、更に続けて“*We are strangely ill-assorted for the bond there is between us*”¹⁸⁾と、夫婦としてどうにも不釣り合いでうまくいかず、もうこれ以上は無理だと告白している。10月に入ると同じフォスターに宛てて「何か行動に出て絶えず動くこと以外にはどう仕様もない」と悲惨な状況を訴えかけ、続けて“*Much better to die, doing*”¹⁹⁾と悲痛な心境を吐露している。以上の事柄は決定的な破局を迎えていたことの証左以外の何物でもなく、表面化して別居するに至った時期が翌58年5月までずれ込んだのは、事態がそういう経緯を辿っただけのことである。*FD*の公演とリチャード・ウォーダー役の演技に異常なほどの興奮と熱中を示したのも、ウィルキー・コリンズと北イングランドへの旅行に出掛けたのも、全ては破滅的な状況にあった家庭からの脱出願望のなせる業と理解できよう。

キャサリンとの関係がここまで悪化した原因としては、彼女が毎年のように子供を出産するので生活費がかさむ一方であったこと、その子供達の出来がディケンズが期待した程ではなかったこと、若

い頃は魅力的な容姿を持っていた彼女が次第に肥満した中年女になったこと、等があげられ、そして何よりも、キャサリンとディケンズの間の格差が全ての面に渡ってあり過ぎて、最初から二人の結びつきには無理があったことがあげられる。キャサリンの夫への気持は終生変わらなかったといわれているので、要するに22年間連れ添っている内に次第に熱が冷めて来たディケンズの我慢、忍耐力も限界に達して、この1857年で遂に破裂してしまったということなのである。だからといって、ディケンズは世によくある無責任男のごとき振る舞いをした訳ではなく、かような状況にありながらも、夫として父親としてやるべき行為は誠実に履行し、彼としては精一杯の努力は重ねたのであった。こうした状況を背景として *Perils* は創り出されたのであるが、主人公兼語り手ギル・デイヴィスの人生行路、中でも特にメアリアン嬢との関係に作者ディケンズの心情と想念が強く濃く投影されていることは、もはや指摘するまでもあるまい。両者の関係はこれまで説明してきた通りであるが、そのクライマックスを成しているのは、シルヴァーストア島に全員が帰還して平静を取り戻した後、任務を終了して離島するべく海兵隊が整列したときに起こった場面である。この時彼の活躍に対する感謝を金品で表そうとしたメアリアン嬢の申し出を断わったギルは、彼女が身につけていたリボンの類の物を所望する。これに対して彼女は指輪をはずして与えるとともに、ギルの勇敢さを中世の騎士のそれにととえて最大級の讃辞を贈る。

For the second time in my life she kissed my hand. I made so bold, for the first time, as to kiss hers; and I tied the ring

at my breast, and I fell back to my place. (207)

彼女が私の手に接吻したのはこれで二度目であった。私は、生まれて初めて、思い切って彼女の手に接吻した。彼女の指輪を胸にしっかりと留めて、私は列の中の所定の位置に戻った。

ここも *HW* の原文では 'life' と 'she' の間にコンマがあり、そのまま残しておいた方がギルの気持がより鮮明な形で浮き彫りにされるのではないか。それにしても、愛する女性の指輪を所望してそれをしっかりと胸に抱き締めたというこの場面は、1837年5月7日心臓の発作で突然他界した妻の妹メアリー・ホガースの遺体から指輪を抜き取り、それをディケンズが常に指にはめていた、という例の有名なエピソードを髣髴させるものがあるといってよい。そして行進に移った彼の心境は次のごとくである。

... cheered and cried for, we went out of the gate too, marching along the level plain towards the serene blue sky, as if we were marching straight to Heaven. (207)

(前略) 喝采と歓呼の聲に送られて、われわれは門から出て、平坦な広がりの中を透明で静かな青い空に向かって行進した、まっすぐに天国に向かって行進するように。

特に 'as if' 以下の箇所はギルの心境が嘘偽りない形で投影された叙述であろう。これから先片想いの愛を抱いたままのつらい生涯を過ごすくらいなら、いっそキス、指輪、讃辞などとともに栄光と至福に溢れたこの場を最期として、あの世へそのまま行進していきたいとの。これはメアリアン嬢との距離を大空との距離にたとえた

“she was as high above my reach as the sky over my head” (ibid.) という叙述にも、そのままつながっていることは明白である。ということは妻キャサリンへの失望、幻滅が深まれば深まるだけ飢餓感、空無感が強まり、その救いを20年前に天国へ旅立ったメアリー・ホガースに求めているディケンズの心的姿勢を示しているのではあるまいか。メアリーへの言及は2年前のクリスマス物 *HT*²⁰⁾ の中でも見受けられ、1年前のクリスマス物は *The Wreck of the Golden Mary* というタイトルからして、メアリーを念頭において筆を進めて行ったことは指摘するまでもなく明らかである。という風にみて来ると、姉の結婚を契機として同居するようになったこの機知に富んで明朗活発であり、17歳の若さで帰らぬ人となった義妹を想う気持は、少なくとも20年前に劣らず1855年あたりから、ディケンズの内でひそかに激しく燃えていたことは確実である。1855年、22年振りに再会した初恋の相手マライア・ビードネルが中年の浮薄なお喋り女と化しているのを見て、ひどい幻滅を味わった有名な出来事が、少なからぬ影響をディケンズの内面に及ぼしていることも見落としてはなるまい。

あれやこれやで人気実力ともナンバーワンの作家として君臨していた外見とは裏腹に、ディケンズの魂は抛り所を喪失した不安定な状態で、焦燥感に駆られるまま狂的に動き回った挙げ句、疲れ果てて死の淵をのぞき込んでいる状況にあったのである。そうした彼がおのが救済の対象を現実世界では存在しえぬ故に、天国のメアリー・ホガースに設定したとしても何ら不思議ではない。出自が無学文盲の孤児であるがために届かぬ高嶺の花として仰ぎ見るだけの一方通行の愛にとり付かれて徹底的に苦しみ、かつその対象たるメア

リアン嬢の感化力により教化されて、歪みと怨念を是正された人間として蘇生するギル・デイヴィスの姿は、ディケンズの暗澹たる内面と、それからの脱出と救済を希求してやまない願望との生々しく直叙的なイメージが凝集されたものであることは明らかである。それと主人公が語り手だけをつとめて、筆者は一方通行の文字通りの純愛を捧げた対象である女性がつとめている、という「奇妙な」設定は、作家がこうでもしないと *Perils* に託した心情なり、願望なり、それらを基調とするテーマなりを描写できない程の疲労しきった状態にあったことと、メアリアン嬢に痛切な告白談を聞いてもらうギルの魂と一体化して動くことで、少しでも安らぎと落ち着きを得られたことなどが誘因となって、導き出され案出されたものであろうか。

1857年はエレン・ターナンとの出会いという重要なエピソードも出来していて、*Perils* が「ディケンズのエレンへの熱情に火がついた約2ヶ月後に書かれた」²¹⁾ことは、触れるまでもない事実である。だが *FD* の公演中に見染め激しい恋情を覚えたとしても、*Perils* のヒロインの人間像やギルの内面の描写に影響力を及ぼす程の揺るぎない確固たる存在感を、エレンがディケンズの心奥に確立するには余りにも時間的に早過ぎはしないか、という印象を受けざるを得ないのである。そういう展開を迎えるのは1858年以降のことであって、1857年はエレン・ターナン登場という点で記憶される年であるとしても、少なくとも作家の創作心理に深く強く影を落として影響を及ぼし、創作の源泉たり得ていたのは、メアリー・ホガースの人間像とその思い出、そして彼女の霊であった、といっていよい。

〔注〕

- 1) “Dickens’ increased reliance on Collins’ style of writing” (Deborah A. Thomas, *Dickens and the Short Story*, p. 89).
- 2) “something of an apprentice” (Peter Ackroyd, *Dickens* [London: Sinclair-Stevenson, 1990], p. 761).
- 3) 以下 *FD* と略す。
- 4) “at his friend’s [i.e. Dickens’] direction” (Peter Ackroyd, p. 762).
- 5) ディケンズはカニバリズムの噂さえ流布されたフランクリンを弁護するエッセイを、1854年から57年にかけて7回も *HW* に発表し掲載した。
- 6) “the grand pathos of Wardour’s self-sacrifice” (William Oddie, “Dickens and the Indian Mutiny” [*The Dickensian*, vol. 68, 1972], p. 14).
- 7) “The agitation and exertion of Richard Wardour are so great to me, that I cannot rally my spirits in the short space of time I get.” (8月9日付けの Frank Stone宛の書簡の一節) (*The Letters of Charles Dickens*, vol. II, ed. Walter Dexter [Bloomsbury: The Nonesuch Press, 1938], p. 868).
- 8) “a deep and probably lasting impression” (William Oddie, p. 15).
- 9) 10月18日付けの Henry Morley 宛の書簡を参照のこと (*The Letters of Charles Dickens*, pp. 891-2)。
- 10) *The Letters of Charles Dickens*, p. 894.
- 11) “a curious story” (Peter Ackroyd, p. 799).
- 12) Ruth Glancy, *A Tale of Two Cities: Dickens’s Revolutionary Novel* (Boston: Twayne, 1991), p. 24.
- 13) 「イギリス軍隊の士官以上は、ほとんどがパブリック・スクールの出で、一兵卒、下士官からの叩き上げで出世したものは極めて例外的な存在だ」(小池 滋『英国流立身出世と教育』[岩波新書, 1992], p. 33) というのであるから、ギルの昇進は所詮不可能であったとしか思えない。
- 14) William Oddie, p. 114.
- 15) Gwen Watkins, *Dickens in Search of Himself* (Houndmills: MacMillan, 1987), p. 118.
- 16) エリアス・ブレスドルフ著、渡辺省三訳『アンデルセンとディケンズ』(東京: 研究社出版, 1992), p. 138.
- 17) *A Dickens Chronology*, p. 96.
- 18) *The Letters of Charles Dickens*, p. 888.
- 19) *The Letters of Charles Dickens*, *ibid.*
- 20) “I had lost a very near and dear friend by death.” で始まる27行ほどの箇所が

そうである (CS, pp. 106-7)。

- 21) "...written some two months after Dickens' passion for Ellen flared up" (Philip Collins, "A Tale of Two Novels—*A Tale of Two Cities* and *Great Expectations* in Dickens' Career" in *Dickens Studies Annual*, vol. 2 [Carbondale: Southern Illinois Univ. Press, 1972], p. 351).

第三章

The Haunted House について

— 離婚後のディケンズ —

1858年の妻キャサリンとの別居をめぐって彼の立場を擁護しなかった出版社 Bradbury & Evans と縁を切ったディケンズは、1859年別の出版社 Chapman & Hall より *AYR* を、5月に廃刊した *HW* をそのまま踏襲する形で刊行を開始した。その最初のクリスマス作品たる榮譽を担って、12月13日に刊行されたクリスマス増刊号に掲載されたのが *HH* である。これは『クリスマス・キャロル』から数えて、ディケンズのクリスマス物としては17番目にあたる、そして *CS* として一卷本にまとめられている作品群の中では12番目にあたる作品である。*HW* と *AYR* に掲載された他のクリスマス物の作品群と同じく、この作品もディケンズ自身が執筆したものに加えて、他の作家に寄稿を仰いだ短編群との連合体として構成されていて、掲載順に作家名と物語名とそれぞれの頁数を記すと、次のようである（*AYR* 第2巻に収録されている）。

- ① “The Mortals in the House” by Charles Dickens (pp. 1-8)
- ② “The Ghost in the Clock Room” by Hesba Stretton¹⁾

(1832-1911) (pp. 8-13)

- ③ “The Ghost in the Double Room” by George Augustus Sala
(1828-96) (pp. 13-19)
- ④ “The Ghost in the Picture Room” by Adelaide Anne Proctor
(pp. 19-21)
- ⑤ “The Ghost in the Cupboard Room” by Wilkie Collins (pp.
21-26)
- ⑥ “The Ghost in Master B.’s Room” by Charles Dickens (pp.
27-31)
- ⑦ “The Ghost in the Garden Room” by Mrs. Gaskell (1810-65)
(pp. 31-48)
- ⑧ “The Ghost in the Corner Room” by Charles Dickens (p. 48)

①で紹介された各登場人物がくじ引きをして引き当てた作品の舞台となっている幽霊屋敷の各部屋で寝泊まりをしている間に目撃したそれぞれの幽霊を、仲間に交代で説明していくスタイルで *HH* は構成されていて、例えば④が韻文体で綴られているというように、各作家が趣向を凝らし競い合う形で出来上がっているのである。中でも⑦は全体の三分の一を越える分量も目立つが、質的にも力作で、ディケンズ自身も①と⑥とのおのが2篇（1頁だけの短い⑧は対象外として）を除くと、他の4篇には失望させられたけれどもこのギaskell夫人の手になる⑦だけは評価した²⁾、という。失望させられた4篇の作者の中にウィルキー・コリンズが入っているのは珍しいことであるが、彼の手になる⑤はどうも作品の枠組が単純でサスペンスの盛り上がりを欠いているきらいがあり、本篇のコリンズは単なる一寄稿者の域を超えていないようである³⁾。Charles

Dickens Edition の CS に収録する際に、ディケンズは他の作家の手になる5篇と全篇を締めくくる⑧とを除外し、さらに①の末尾の9行と⑥の導入部分の10行とを削除した上で、*In Two Chapters* というサブタイトルを付けて収録したのであった。前年には上述のごとく22年連れ添って10人の子供までもうけた妻キャサリンとの、体面を考慮しての別居という形をとった離婚という大事件が出来し、*HW* から *AYR* へと出版社も含めて全面的に衣替えするなど、さらに自作の公開朗読の公演に踏み切ってイギリス中を巡業して回るといった風に、公私共に激しく揺れ動き、多大の衝撃を当然受けたと思われる一年の最後を飾る *HH* が、興味深い考察対象であることは指摘するまでもないだろう。この1859年は *AYR* の幕開きを飾る長篇 *A Tale of Two Cities* の連載が4月から11月にかけて行われ、その合間の8月から9月にかけてアメリカの週刊雑誌 *The New York Ledger* に、本格的な推理小説として Ellery Queen が絶賛したと伝えられる *Hunted Down* を寄稿したことが、ディケンズの主要な文学活動である。それで余りにも有名な『二都物語』はさておき、後者を適宜参照し、なおその他のディケンズ自身の手になる作品をも必要があれば引用しながら、作家の内面とのかかわりを主たる考察対象としつつ、*HH* を見て行くこととしたい。

クリスマスシーズンが巡って来ると書き下ろしの単行本として発売された *Christmas Books* に収録されている5篇に続く *HW* と *AYR* にクリスマス増刊号として掲載された *A Christmas Tree* (1850) 以下の作品群において、ディケンズは一人称体による叙述を頻繁に用いている。*HH* までの12篇の中で一人称体が用いられていないのはわずかに *The Child's Story* (1852) と *Nobody's Story* (1853)

の2篇だけであり、7作目の *The Seven Poor Travellers* (1854) から *HH* までの6篇はすべて一人称体が用いられている。長篇の世界においては *David Copperfield* (1849-50) と *Bleak House* (1852-3) 以降は一人称体による叙述は、*Great Expectations* (1860-1) まで姿を消してしまうけれども、その間クリスマス物の短篇の世界においては連続して用いられていたのである。前述したようにディケンズはギaskell夫人作の物語を除くと、他の作家達から寄せられた物語はすべて気に入らなかった。特にジョージ・オーガスタス・サラ作の③の場合はオリジナルの結末に加筆して、結末を変更している可能性が強いという⁴⁾。結局のところ他の作家達から送られてきた物語はありきたりの怪談を綴っているだけのことで、ディケンズの設定した内面から、そして過去から、生み出されてくる幽霊話、というテーマにそぐわないものばかりだったのである⁵⁾。そうした点に彼は強い不満を覚えた訳であるが、それはそれとして、彼自身が設定したテーマは、作品中の“the ghost of my own childhood, the ghost of my own innocence, the ghost of my own airy belief” (252) という、二番目の“The Ghost in Master B.’s Room”の末尾近くにはめ込まれている語句より端的に見てとることができよう。だからこそ最初の“The Mortals in the House”の冒頭の部分における“Rapper” (226) への嫌悪感を示した叙述が出てくるものと思われるが、これら二つの物語を系統立てて、これから見て行くことにする。

I “The Mortals in the House” をめぐって

上述のごとく冒頭に「霊媒」と名づけられた人物が登場してくるが、その箇所は次のように描かれている。

At first I was alarmed, for an Express lunatic and no communication with the guard, is a serious position. The thought came to my relief that the gentleman might be what is popularly called a Rapper: one of a sect for (some of) whom I have the highest respect, but whom I don't believe in. (226-7)

最初私はあわてた、何故なら明らかに狂人と分かる人間と乗り合わせた上に車掌と連絡がとれないことは、由々しい問題だからである。目の前にいる人物は一般的には霊媒と呼ばれている存在であるかも知れないと思い付いて私は安堵した。私としてはこうした類の存在に敬意を持ってはいるが、信じる気には到底なれないのであるが。

これは主人公にして語り手を兼ねたジョン (John) が、健康回復をはかる静養先として友人から勧められた田園のとある邸宅を見に行くために乗った夜行列車でたまたま乗り合わせた「ぎょろ目の男」(“a goggle-eyed gentleman”) (226) が、彼を凝視しては妙な言葉を吐きながら、鉛筆で手帳に何か熱心に書き込むのを見ての印象を述べた箇所である。狂人でないとすれば霊媒らしい、と推測したジョンがそれを確認しようとした矢先に、相手から「私は今晚霊界との交流 (“spiritual intercourse”) を行っていたのだ」(227) と高飛車にいわれる。これに続けてソクラテス、ピタゴラス、ガリレオ、ミルトンなどと

いった歴史上の人物の名前を連発して、彼等の霊と交流した成果だとして奇妙な言葉を並べ立てる。一例をあげると、イタリア語まで混じえながら、ガリレオの霊から託された言葉だと称して、次のように言う。

Galileo likewise had dropped in, with this scientific intelligence. "I am glad to see you, *amico*. *Come sta?* Water will freeze when it is cold enough. *Addio!*" (227)

ガリレオの霊も同様に、次のような科学的知識を携えて、訪れたのだ。「君と会えて嬉しい、わが友よ。気分はどうかね。寒さが厳しくなると水は凍るものだ。ではまた！」

このような調子でしゃべられて一晩中悩まされたのではたまったものではない。ジョンは次のごとく結論付けている。

If this should meet the eye of the gentleman who favoured me with these disclosures, I trust he will excuse my confessing that the sight of the rising sun, and the contemplation of the magnificent Order of the vast Universe, made me impatient of them. (227-8)

この文章が諸々の有り難い話を授けてくれたあの紳士の目に触れたとしても、日の出の光景と、広大な宇宙の荘厳な秩序の眺めとが、彼の話のを耐えがたいものにしたとの私の告白を彼はきっと大目に見てくれるであろうと思う。

霊界からのいかなる有り難い言葉よりも、夜明けと日の出を迎える自然界の営みの方がはるかにまっとうであり意味があると。そして当の邸宅を見に行くため次の駅で主人公が下車したことで、この

「霊媒」は我々の眼前から姿を消してしまうのである。

プロットの展開とは無縁とも思える「霊媒」を冒頭のわずか2頁とはいえ、なにゆえ作家は登場させたのであろうか。結論的には無論プロットの展開やテーマと密接なつながりを持っているからであるが、*HT* に物語を寄稿するなどディケンズの知遇を得ていたウィリアム・ハウイトとディケンズとの間に、本篇公刊の直前に持ち上がった幽霊話をめぐる論争にまず目を向けなければいけないだろう。9月から11月にかけて両者の間で書簡のやりとりが何度かあり、心霊学の熱烈な信奉者である相手が色々と言って寄こした幽霊話や幽霊屋敷の信憑性に関して、その都度ディケンズは全面的に否定し反駁したのだったが、事もあろうに相手がある新聞にそうしたやりとりを公表してしまった。弟アルフレッド (Alfred) (1822-60) にあてた書簡 (11月2日付) の中で、ディケンズはハウイトを “a kind of arch rapper among the rappers” と呼び、相手が言って寄こし彼が否定した事が公表されたクリミア戦争の戦死者の幽霊の件は、「証明できる強力な証拠」がない限りは到底信じられない、と強い不快感を混じえた調子で、証拠や根拠なしの幽霊と幽霊屋敷の存在を真っ向から否定する姿勢を表明しているのである⁶⁾。かような怪しげな根も葉もない幽霊と幽霊屋敷をめぐる噂や法螺話をまき散らし、心霊学などと結び付けてもっともらしい体裁を整えては、人心と世情を無用に惑わしたり欺いたりするハウイトによって代表される連中 (いつの時代でも存在しているものだが、ディケンズの時代においても無視できない社会的影響力を持っていた) に対する批判と風刺を込めて、ディケンズが ‘Rapper’ なる「紳士」を登場させたことは、もはや指摘するまでもあるまい。だから冒頭の2頁しか描かれていな

いとしても、この「霊媒」をめぐるシーンはそれこそ看過できぬ影響力を作品全体に及ぼし、その基調を決定しているといつてよいであろう。ということはいうまでもなく、ここまでの一人称体が主人公即作者という姿勢で叙述が進められていることを示している。同様の叙述がさらに続けられて行く。

かくして「霊媒」と別れを告げた主人公ジョンは秋の早朝の田園を歩き出す。「早朝ほど私にとって1日の24時間の中で厳粛な時間帯はない」(228)とか、「夏季においては私はしばしば夜明け前に起きて、朝食までに私室にこもってその日の仕事を済ませる」(ibid.)といった叙述の流れが、“The tranquility of the hour is the tranquility of Death.”(229)という箇所では凝縮されて、「かつて父親⁷⁾の幽霊をこの時間帯で見た」(ibid.)という記述が導き出されてくる。続けてまるで生きているものごとくベッドの傍の椅子に座っていたので、驚いて起き上がって話し掛けたり、肩に手を置いてみたりしたという記述も。これが作者自身の実体験であることは述べるまでもなく明らかであり、と同時にディケンズにとって幽霊とは早朝という死の静寂をたたえた舞台に触発されて、過去・記憶という極めて内省的世界から紡ぎ出されてくる幻影を意味していることも、改めて指摘するまでもなく明らかである。

それで、秋の早朝に当の無人の屋敷を見たジョンの目に、おのずとそれが幽霊が出没する雰囲気をも備えた場所として映ってきたという叙述に続いて、筆は屋敷のある村の描写へと進んで行く。この辺から、主人公ジョンの背後に作者ディケンズが隠れて叙述を進めるという、フィクションが表面に出て来たいかにも物語らしい展開が始まる。

ジョンは朝食を頼んだその村の小さな旅館で、主人と使用人のアイキー (Ikey) から、屋敷はポプラ荘 (the Poplars) (230) と呼ばれていること、そこで殺害された女性の頭巾をかぶった幽霊と、殺人の場面の間ずっと鳴き続けたフクロウの幽霊が出没する噂があることなどを聞き出す。それを聞いて怯えるどころか、ジョンは先程まで同じ列車に乗り合わせていた「霊媒」の霊界との交流を実践していると称していた話と同じく、この怪談も全くの法螺話だと看破し、続けて次のように述べる。

Moreover, I had lived in two haunted houses – both abroad. In one of these, an old Italian palace⁸⁾, which bore the reputation of being very badly haunted indeed, and which had recently been twice abandoned on that account, I lived eight months, most tranquilly and pleasantly. (231)

その上更に、私は二つの幽霊屋敷にすんだことがある – どちらも外国で。その内の一つは古びたイタリアの宮殿であり、すさまじく幽霊にとり付かれているという評判をとり、私が住む少し前二度も居住者が逃げ出したのであったが、私は8ヶ月間、極めて静かに楽しく住んだのである。

さりげなく挿入されているが、これが主人公の体験ではなくて作者自身の体験を叙した箇所であることはいうまでもない。ここの一人称体による叙述も、ジョンを押しつけた形で作者が表面に出て来て自己の実体験を記述することにより、根も葉もない噂だけが肥大した幽霊話を容認しない姿勢を表白する場所となっているのである。こうした主人公と作者の乖離が表面化している箇所を経て、叙述はフィクションの世界へと更に進んで行く。

無人の荒涼館といった感じの内部を見た後、ジョンは6ヶ月間の賃借契約を結び、10月中旬から居住を始めた。ジョンとパティ(Patty)なる38歳の未婚の妹⁹⁾、クック(Cook)、ストリーカー(Streaker)、オッドガール(Odd Girl)と名付けられている3名の女中、ボトルズ(Bottles)という名前の耳の遠い馬丁、ターク(Turk)というブラッドハウンド種の犬¹⁰⁾がその構成員である。犬とかパティに実際のモデルがいるにせよ、戯画化された名前の羅列を見ると、フィクションへと叙述の比重が色濃く傾斜してきていることは明らかである。ボトルズを除く他の使用人達は些細なことでおびえて早々と逃げ出してしまい、その後に雇った2組の連中も同様に、遂に新規に召使を雇うことをジョンとパティは断念する。その代案として、11月の第3週にパティが信頼できる友人達との共同生活を営むことで、残りの3ヶ月を乗り切ったらどうかと提案し、11月の最終週が終わらないうちに相談を受けた友人達が駆けつけてくれて、幽霊屋敷にせい揃いした、と説明されている。集まった総勢7人の友人達と主人公兄妹の間でくじ引きをして、それぞれが寝起きする部屋を振り分けるとともに、十二夜(1月5日)にこの幽霊屋敷での各人の体験をお互いに披露し合うことにして、その時まで他言は無用、との申し合わせが取り決められた。馳せ参じてくれた友人達の中で「旧友にして最高に素晴らしい海の男」(240)と形容されているジャック・ガヴァナー(Jack Governor)¹¹⁾と、「友人にして弁護士」(ibid.)と呼ばれているアンダリー氏(Mr. Undery)¹²⁾にはモデルがある、とされているが、風貌や雰囲気は相似形であるとしても、例えばジャックがかつてパティを愛していた(241)という設定などは、あくまでも作品世界だけの出来事であると思われて、この主人

公とその妹を中心とする年齢も職業もまちまちの総勢9名の男女による田園の幽霊屋敷における共同生活は、まさにフィクションに全面的にのめり込んだ叙述が繰り広げられる箇所となっている、と
いってよい。

時は12月のクリスマスシーズン。信頼と友情で結ばれた友人同士が営む共同生活は、ユートピア的雰囲気包まれた夢物語として展開される。嵐の夜不快な音を立てる風見鶏をたたき落とすために、危険もものともせずジャックとその友人が丸屋根に登った行動に象徴されるごとく。それ故「私は生涯で一番幸福であったし、それは私達全員に共通する気持でもあったと思う」(241)と述べられている箇所を受けて、理想郷の生活が描き出される。

We had a great deal of out-door sport and exercise, but nothing was neglected within, and there was no ill-humour or misunderstanding among us, and our evenings were so delightful that we had at least one good reason for being reluctant to go to bed. (241)

私達は戸外でのスポーツと運動を大に行ったが、家の中のことも手を抜くことはしなかった。それで私達の間には不機嫌や誤解が存することはなかったし、毎夜楽しく過ごしたので、少なくともこれだけでも各々がいやいや寝室に引きあげる理由に十分になり得たのである。

些細な噂が膨張して幽霊の出没を迫真的に伝える怪談の類に惑わされて、相互に衝突したり離反したりすることが全くない友人同士の完璧なチームワークの下に展開される、いかにもクリスマス物にふさわしいこの幻想的な共同生活に、結婚に失敗して家族を割り家

庭を崩壊させてしまったディケンズの心情が投影されていることは、いうまでもない。一人称体による完全に虚構化されている叙述を覆う影となっているだけに、かえってより一層生々しく浮き彫りにされた形で、作者の心情の反映を看取することが可能である。同様のことはジョン自身が見た幽霊を記述した次の話にもいえそうである。

II “The Ghost in Master B.’s Room” をめぐって

Master B.’s Room とこの部屋に通じるベルのそばにラベルが貼り付けてあった狭く窮屈な部屋で、ジョンは早朝幽霊の訪問を受ける。

The first appearance that presented itself was early in the morning when it was but just daylight and no more. I was standing shaving at my glass, when I suddenly discovered, to my consternation and amazement, that I was shaving—not myself—I am fifty—but a boy. Apparently Master B.!(243)

幽霊が最初に出現したのは早朝、しかも夜が明けたばかりの時であった。私は鏡に向かってひげを剃っていた、その時突然、私が混乱し驚いたことに、私が——私自身でなく——50歳の——一人の少年がひげを剃っていることに気が付いた。紛れもなくB. 少年が！

ジョンが早朝鏡に向かってひげを剃っていると、いつの間にか彼ではなくて少年が映っていて、それがひげを剃っていたという場面であるが、主人公の年齢が50歳という設定は次の2月でディケンズが

48歳を迎えることを考えると、作者自身のことを述べていると解してよいだろう。さらに鏡の中に24, 5歳の若者の顔が映り、それに続いてとっくの昔に他界した父親と一度も会ったことがない祖父¹³⁾が映っていたという。その上、午前2時ベッドのそばにB. 少年の幽霊が出現して、“where is my little sister, and where my angelic little wife, and where is the boy I went to school with?” (244) と叫んだのである。これは主人公兼語り手のジョンが完全に作者ディケンズに飲み込まれかき消されてしまった叙述が、繰り広げられている箇所となっている。‘little sister’は例えば『クリスマス・キャロル』に登場するスクルージ (Scrooge) の妹ファン (little Fan) に代表されるように、2歳上の姉ファニーへ寄せる思慕の情の複雑な陰影を持つ発露であることは、今更指摘するまでもない。‘angelic little wife’は、*The Uncommercial Traveller* (1860-9) の第12章 “Dullborough Town” でルーシー・グリーン (Lucy Green) という名前で登場し第20章 “Birthday Celebrations” ではオリンピア・スクワイアーズ (Olympia Squires) という名前で登場して、「桃のような顔をし、青い帯をしめ、それとよくうつる靴をはいたある子供」¹⁴⁾ (“some peach-faced creature in a blue sash, and shoes to correspond”)(199) と描写されているチャタム時代の隣家の娘で、幼年期のディケンズの恋人ルーシー・ストラウギル (Lucy Stroughill) を指していることも、指摘する必要はあるまい。かくして、小さな妹と妻を探し求めるB. 少年の叫び声に喚起されたかのごとく、ディケンズ文学ではなじみ深い “a little sweetheart”¹⁵⁾が中心を成すイメージとなる子供の世界が、紙面に導き出されることとなる。という風に見てくると、Master B. なる少年は、若き日のペンネームと

結び付けて“Boz”だと読者に想像してほしい、という気持が作者の内に存していたのかも知れない¹⁶⁾。それはますますこの一人称体による叙述が、作者が自己を語る側面が顕著であることを示している。

B. 少年の幽霊を追跡して、シンドバッドの冒険よりも長くて素晴らしいと称する旅行をしているうちに、ジョンがB. 少年と合体して一人の少年に変身する、という現象が出来る。B. 少年が探し求めていた「ともに通学した少年」をそばに出現させながら。

I was marvellously changed. I was myself, yet not myself. I was conscious of something within me, which has been the same all through my life, and which I have always recognised under all its phases and varieties as never altering, and yet I was not the I who had gone to bed in Master B.'s room. I had the smoothest of faces and the shortest of legs, and I had taken another creature like myself, also with the smoothest of faces and the shortest of legs, behind a door, and was confiding to him a proposition of the most astounding nature. (245-6)

私は驚く程変容していた。私自身であって、私自身でなかった。私はこれまでずっと同一であり続けた、そして全ての局面と様相において絶対に変わらないという風に認識して来た、自分の中のあるものは知覚したが、B. 少年の部屋のベッドに入った自分とは違っていた。私は素晴らしく滑らかな顔とおそろしく短い足を備えていた、そして同じく素晴らしく滑らかな顔とおそろしく短い足を備えた私とそっくりの一人の少年を、ドアの影に連れ込んで、仰天するような内容の計画を彼に打ち明けていた。

ここから叙述の主体が一元化されて作者のみに集約される。B. 少年の幽霊という作者の分身と、主人公兼語り手のジョンという作者の分身を合体して消滅させるという過程を経て、新しい登場人物を創造するという、唐突といえば唐突な、劇的といえば劇的な手法を用いて。ジョンの部分は完璧に消去された語り手と作者ディケンズが一体化した叙述が流れ出す。こうした作品への露骨で大胆な闖入は、ディケンズが随所で行っていることではあるが、一人称体を用いている場合は、なおさら頻出する現象であることは説明するまでもないだろう。本篇においても顕著にうかがわれるように、ディケンズはいかなるプロットやストーリーを案出していようとも、結局のところは一人称体を自己を語るために用いているからである。このジョンからディケンズへの突然の変身は、さしたる破綻をきたすこともなく割合巧妙に行われているように思われる。かくして、*A Christmas Tree* の中で “the bright Arabian Nights” (8) と絶賛している『千一夜物語』を下敷とする、“sweet memories” (246) の香りで一杯だという太守ハールーン・アル・ラシッド (Caliph Haroun Alrashid) に扮した8歳位のディケンズ少年を主役とするおとぎ話が繰り広げられて行く。場所はハンプステッド・ポンズのグリフィン女史 (Miss Griffin) が経営する学校。登場人物は2名の男子生徒と8名の女子生徒。2名の男子生徒が後宮 (Seraglio) を持とうと計画を立てた時から話が動き出す。

無論主役はディケンズ。ハールーン・アル・ラシッドに扮した彼に対して、もう一人の男子生徒は脇役に回されて宰相 (Grand Vizier) の役を振り当てられる。この決定に抵抗したけれども、髪を引っ張られて屈服したと説明されている(247)。“the other creature” で片

づけられて、名前すら与えられていない引立て役の扱いしか受けていないのだから、これも当然の帰結というところか。後宮の中心をなすのはミス・ビュール (Miss Bule) で 8, 9 歳の “the ripe age” (246) とある。the Favourite, Zobeide, Sultana と色々の呼称を与えられているが、要は太守ハールーンの正室の役を振り当てられたのである。「熟した年齢」とは何とも艶めかしい描写であり、幼児が繰り広げる遊びを叙述したおとぎ話とは思えないエロティックさを備えている、とあってよい。これには下敷となっている『千一夜物語』のあの豊満な官能性が反映されていることはいうまでもないけれども、ディケンズが「狂ったほど愛していた」¹⁷⁾とジョン・フォースターが伝えているルーシー・ストラウギルの存在も大きく作用していたことも、当然見逃す訳にはいかない。ミス・ビュールを筆頭に 8 人の美少女 (“eight of the fairest of the daughters of men”) (247) にかしずかれた「私」は、グリフィン校長の目が届かない場所と行動に限られていたとしても、権力の頂点にあり幸福の時を過ごす。

Every day after dinner, for an hour, we were all together, and then the Favourite and the rest of the Royal Hareem competed who should most beguile the leisure of the Serene Haroun reposing from the cares of State—which were generally, as in most affairs of State, of an arithmetical character, the Commander of the Faithful [the other creature] being a fearful boggler at a sum. (247-8)

夕食後、一時間ほど、私達は一緒に過ごした、そしてその時わが愛する正室とその他の妃達は国家をめぐる気苦労から神経を休ませている太守たる私の憩い

第三章 *The Haunted House* について

の時間を楽しくしようとして競い合った一国家をめぐる気苦勞は大抵の場合、国家をめぐる殆どの問題と同じく、算術に関するものであった。あの宰相が出す数字は全く信用できないので。

確かに 8 人もの美しい妻が忠実に奴隷のごとく仕えてくれるハールーンは、自己をソロモンに擬して (“my resemblance to Solomon”) (250)、得意の絶頂にあるように見える。だが、太守の座が臣下に据えられて、二番手の座に抑えこまれている「もう一方の人物」の裏切りを絶えず警戒しなければならぬ心勞と背中合わせの、不安の影に付きまといわれているものであることは、上の引用より明らかである。それと、「徳の高い女性」 (“the virtuous woman”) (248) であるグリフィン女史の監督の目を逃れて、重大な秘密を守り通しているというしびれるような恐怖感 (“a mysterious and terrible joy”) (ibid.) に絶え間なく襲われ続けていることも、あわせ指摘しておかなければいけないだろう。こういう風に見てくると、このおとぎ話は「孤独な見捨てられた子供」¹⁸⁾の白昼夢、空想を根源とするものである、という印象が強く迫ってくることは否定できないし、また、妻との離婚が作家の心象風景と叙述に影響を及ぼしている¹⁹⁾ことも十分に考えられることである。それ故に、もう一方の人物とグリフィン女史に象徴される現実の壁におびえ圧迫される太守ハールーンに扮した「私」の意識は、至福の時を過ごせば過ごす程、皮肉にも現実の圧力にあえぐ、というディレンマに陥ることになる。

And now it was, at the full height of enjoyment of my bliss, that I became heavily troubled. I began to think of my mother, and what she would say to my taking home at Mid-

summer eight of the most beautiful of the daughters of men, but all unexpected. I thought of the number of beds we made up at our house, of my father's income, and of the baker, and my despondency redoubled. (249)

至福の歓喜の絶頂にあつて、ひどい悩みを抱えるということが出来た。母のことを思い浮かべ、夏休みに8人もの最高級の美少女を、何の前触れもなく、連れて帰ったら何と言うだろうかと私は思い悩んだ。家で用意できるベッドの数、父の収入、パン屋のことなどを思って、私の失意の念は倍加された。

エロティックで濃密な幻想、白昼夢に基づく世界が、語り手である「私」と両親との断絶(たといかなる経済的理由があろうとも)という現実の風圧にさらされて、揺らぎ悲鳴をあげているかのようなのである。

かくのごとく穴があき傾き始めたおとぎ話の世界にとどめの一撃を加えたのが、ある日突然出現した“a strange man”(250)であった。この男より聞いた言葉として、Mesrour と「私」が命名した学校の純朴な使用人の口を通して、“your pa's dead!”(251)と「私」は告げられる。この瞬間にハールーンも、後宮も、8人の美少女も霧散し消滅してしまつたのである。と同時に、実体が現実に圧迫されて絶えずおびえ続けている状況下、孤独で見捨てられた境遇がなせる憂愁を帯びた白昼夢、幻想に過ぎなかつたとしても、甘美なおとぎ話の世界に浸り没頭することのできた幸福な世界、つまり幼年時代が終わりを告げたこともいうまでもない。これが父親の転勤で両親と弟妹達がロンドンへ移つた後も一人チャタムに残つて学校へ通つていたディケンズが、家計が苦しくなつたためにその学校をやめさせられて、単身ロンドンの両親の許に合流したのはよい

が、学校へ行くことは断念せざるを得なかった1822年10歳の時の体験を指していることは、今更説明するまでもない。*A Christmas Tree* の中では次のように説明されている。

... I perceive my first experience of the dreary sensation — often to return in after-life — of being unable, next day, to get back to the dull settled world; of wanting to live for ever in the bright atmosphere I have quitted. (10)

(前略)私は——長じてからもしばしば経験することになったが——次の日単調で淀んだ世界へ戻ることはできないという、そして自分が放棄した光輝く霧田気の中にいつまでも住んでいたいというわびしい想いを初めて味わったことを覚えている。

ここの一人称体による叙述は、申すまでもなく ‘a strange man’ が登場して来たあたりの叙述と同じく、作者の視点からなされている。まさに「光輝く霧田気」から「単調で淀んだ世界」へと突き落とされてしまったのである、10歳の時のディケンズは、“Dullborough Town” の結びにおいても、ディケンズは同じ想いを綴っている。

All my early readings and early imaginations dated from this place [Chatham], and I took them away so full of innocent construction and guileless belief, and I brought them back so worn and torn, so much the wiser and so much the worse !
(*The Uncommercial Traveller*, p. 126)

幼年期の私の全ての読書と空想はこの地に基づいていた、そして私は無邪気な思考と汚れなき信念で満ちあふれた状態でこの地から持ち出し、ぼろぼろに

し、非常に賢くなると共に墮落もした状態で、この地へ持ち帰ったのである！

すなわち、読書と空想にひたすら打ち込んでいた幼き日の無垢で汚れなき自分を培ってくれたチャタムは、パラダイスでありユートピアであったと。「悲哀と喪失の感覚」²⁰⁾が色濃く投影された想念をディケンズは表白しているのである。それだけに、上述した両親との断絶から父親の死という打撃によって、夢と幻想の世界が崩壊してしまっただけを描いている箇所に込められた作家の怨念、妄執の激しさが感受できよう。いくら作品中とはいえ、父親を死に至らしめるという設定は残酷であり非人間的である、という批判を受けても致し方ないと思われるが、それにしてもディケンズの両親への屈曲した想念の深き激しさが、何とも抑え難く露呈している感じである。

叙述は例の12歳の時の父親の負債返済不能のために家財道具一切を失い、遂には負債者監獄に両親と弟妹達が収容され、とり残されたディケンズ自身は靴墨工場で糊口をしのいだ体験へと進んで来る。

I was taken home, and there was Debt at home as well as Death, and we had a sale there. My own little bed was so superciliously looked upon by a Power unknown to me, hazily called "The Trade," that a brass coal-scuttle, a roasting-jack, and a birdcage, were obliged to be put into it to make a Lot of it, and then it went for a song. So I heard mentioned, and I wondered what song, and thought what a dismal song it must have been to sing ! (251)

第三章 *The Haunted House* について

帰宅してみると、家の中には死とともに借金があり、競売が行われた。私の小さなベッドは、「業界」とあいまいな言葉で呼ばれていて、私としては不案内であったある筋により思いあがった態度で軽くあしらわれたので、真鍮の石炭すくい、焼き串回転具、鳥かご、などと併せて競売用の一山の商品を作ることを余儀なくされ、二束三文で競売に付された。それが言われるのを耳にし、二束三文とは何の歌かといふかしく思い、唄うにはずっと何とも陰惨な歌であったに違いないと思ったのである。

“your pa’s dead !” を受けた ‘Death’ が用いられているのは当然としても、頭韻を踏んでいる訳でもあるまいが、‘Debt’ も使用されているのが何とも痛切の極みとしかいいようのない感じである。一家の大黒柱としての責任を全く果たさない父親を ‘Death’ で断罪するとともに、‘Debt’ に作家自身のベッドを始めとする愛着の深い家財道具一切が、二束三文で競売に付されたことに端を発する、上記の負債者監獄に家族が収監される一方、作家自身は靴墨工場に働きに出されて、そのわずかな賃金で日々の暮らしを支えた人前には出せない惨めな体験のすべてが投影され凝結されている、という印象を受けるのである。

叙述の筆はさらに進んで、父親が何とか出獄し得て実生活に復帰した後、作家自身も数ヶ月に及ぶ靴墨工場の生活にピリオドを打ち、2年余り通学したウェリントン・ハウス・アカデミー (Wellington House Academy) がとりあげられる。

Then, I was sent to a great, cold, bare, school of big boys; where everything to eat and wear was thick and clumpy, without being enough; where everybody, large and small, was cruel; where the boys knew all about the sale, before I got

なった出来事を綴る終幕の部分まで筆が進んで来ると、主人公兼語り手であるジョンの視点からの一人称体という仕掛けはどこかに吹き飛んで、作者の視点のみが紙面全体を覆い尽くしてしまい、『二都物語』にも見られる「自己嫌悪と自己憐憫の結合」²³⁾に貫かれた暗澹たる絶望的なトーンが一気に噴出して来た、ということである。それは “my doom... of lying down and rising up with the skeleton allotted to me for my mortal companion” (252) という結びの語句に、死の影とも結びついて濃縮され凝集されている、といてよい。

HH と同じ1859年に執筆された *Hunted Down* は、ジュリアス・スリンクトン (Julius Slinkton) なる仮面をかぶった恐るべき殺人鬼を追い詰めて自殺に至らしめたが、その魔手から愛する女性を救えなかったメルサム (Meltham) が主人公であるけれども、その心情が吐露されている箇所は次のようである。

“I have no more work on earth, my friend. But I shall see her again elsewhere.”

It was in vain that I tried to rally him. He might have saved her, he said; he had not saved her, and he reproached himself; he had lost her, and he was broken-hearted.

“The purpose that sustained me is over, Sampson, and there is nothing now to hold me to life. I am not fit for life; I am weak and spiritless; I have no hope and no object; my day is done.” (*Reprinted Pieces*, p. 688)

第三章 *The Haunted House* について

「私にはもうこの世での仕事は何もない。だが彼女とはあの世でまた会えるだろう」

彼を元気づけようとしてみたが無駄だった。彼女を救えたのに、救うことができなかった、と言って、彼は自分を責めた。彼女を失い、彼はがっかりと参っていた。

「私を支えてきた目標はついでにしまった、サンブスン、それで生きることにつなぎとめるものも何もなくなくなってしまった。私は死んだ方がいいのだ。弱り果てて抜け殻も同然だ。何の希望も目的もない。私の人生は終わったのだ」

ここで吐露されている心情が「追う人間の目的達成後の虚無感」²⁴⁾であることは動かし難い事実ではあるが、もう少し作者に引き付けて読むことはできないであろうか。エレン・ターナンという新しい恋愛対象の出現があったとしても、1855年の初恋の相手マライア・ビードネルとの22年振りの再会で、単なるおしゃべり女に変容していた事実より受けた幻滅、妻キャサリンとの離婚と家族が分裂するに至り、その上長年の友人サッカレー (W. M. Thackeray) (1811-63)とも仲違いをする等の事態を経て、痛ましいほど正直なディケンズの心情が表白されている叙述である、という印象が強く迫ってくるからである。人生の戦いにおいて頂点を極めて国民的名士としてたたえられるほどの成功を収めはしたが、私生活においては疲労困憊し孤立感と絶望感が募る一方のよりどころを喪失した男の虚無感が吐露されている、と受けとめることができよう。

HH を他の作品を援用しながら以上見て来た訳であるが、特に“*The Ghost in Master B.'s Room*”において、ディケンズが最も愛好した作品の一つである『千一夜物語』を基本的枠組として用いて、少年である作者自身が太守ハールーンとして8人もの美少女にかしずかれた後宮をめぐるおとぎ話と、それを生み出した幼年期へ

寄せる挽歌として叙述が展開されていることは、今更述べるまでもない。孤独な少年が織りなす空想が母胎であったとしても、その無垢の豊かさを踏みにじり破壊してしまった現実の圧力の下で、傷つきあえぎ、遂には絶望感と虚無感にさいなまれるに至った少年期以降の軌跡をめぐる自伝的エッセイとしての側面が、本篇において顕著であることも指摘しておいた通りである。その意味で、*HH* は主人公兼語り手であるジョンをめぐるフィクションというよりも、作者ディケンズの暗影に覆われ死神にすら付きまとわれている自己への鎮魂の書として産み出された作品である、といえよう。1859年のディケンズには一人称体による叙述を、物語とか小説などを創造する推進力として駆使できるだけのエネルギーはもはや残されてはいなかったのである。

CS に収録される際に削除された “The Ghost in the Corner Room” において、パティとジャック・ガヴァナーとが華燭の典をあげるといふ大団円も切ないけれども、作品全体を締めくくる言葉は更に切ない響きを持っているように感じられる。

Let us use the great virtue, Faith, but not abuse it; and let us put it to its best use, by having faith in the great Christmas book of the New Testament, and in one another. (*AYR*, vol. 2, The Extra Christmas Number, p. 48)

信仰という大いなる美德を活用しよう、だが濫用してはいけない。新約聖書という大いなるクリスマス物語と、お互い同士を信頼することによって、信仰を最大限度活用しよう。

新約聖書を持ち出すとはいかにもクリスマス作品らしい結びの言葉

ではあるが、何かそうしたものに縋りつき希求せざるを得ないディケンズの心情が切ない響きとなって余韻を引き、いつまでも脳裡から去らないのである。

〔注〕

- 1) これはペンネームで本名は Sarah Smith という。
- 2) Peter Haining, Introduction to *The Complete Ghost Stories of Charles Dickens* (London: Michael Joseph, 1982), pp. 13-14.
- 3) Deborah A. Thomas, *Dickens and the Short Story*, p. 90.
- 4) Harry Stone, "The Unknown Dickens— With a Sampling of Uncollected Writings" in *Dickens Studies Annual*, vol. I, (1970), p. 16. なお加筆したと思われる箇所は *AYR*, vol. 2, p. 19, ll. 3-13 である。
- 5) Harry Stone, p. 14.
- 6) *The Letters of Charles Dickens*, vol. III, pp. 132-3.
- 7) 父親ジョン・ディケンズ (1785/6-1851) のこと。
- 8) ジェノアの the Palazzo Peschiere を指す。ディケンズは家族ともども1844年9月23日(?)から1845年6月9日にかけて、この宮殿風の邸宅を借りて住んでいた。
- 9) Patty は離婚後も義兄ディケンズに従って、子供達の世界や家計の切り盛りに献身的に尽くした妻キャサリンの妹 Georgina Hogarth (1827-1917) をモデルにしていることは確実であるが、年齢だけを取り上げるとジョージナはこの時32歳であった。
- 10) 実際にディケンズが飼っていた犬と同名同種の設定である。
- 11) 海軍出身にして画家であり、クリスマス物の作品の挿画を担当したディケンズの親友 Clarkson Stanfield (1793-1867) をモデルにしている、といわれている (*The Dickens Index*, p. 107)。
- 12) ディケンズの弁護士 Frederic Ouvry (1814-81) をモデルにするとともに、名前をユーモラスにもじって登場させた人物 (*The Dickens Index*, p. 270)。
- 13) 祖父ウィリアム・ディケンズ (1719-85) のこと。
- 14) 広島大学英国小説研究会訳『無商旅人』(東京: 篠崎書林, 1982), p. 244.
- 15) Michael Slater, *Dickens and Women* (London: Dent, 1983), p. 47.
- 16) Cf. Deborah A. Thomas, p. 78.
- 17) "a red-cheeked baby he had been wildly in love with" (John Forster, *The Life of Charles Dickens* [London: Dent, 1966], vol. I, p. 11).
- 18) "the lonely, neglected child" (Paul Schlicke, *Dickens and Popular Education*

[London: Unwin Hyman, 1988], p. 17).

- 19) Deborah A. Thomas, p. 79.
- 20) "a sense of sadness and of loss" (Paul Schlicke, p. 24).
- 21) Deborah A. Thomas, p. 79.
- 22) Christopher Hibbert, *The Making of Charles Dickens* (New York: Harper & Row, 1967), p. 93.
- 23) "a combination of self-disgust and self-pity" (Paul Schlicke, p. 21).
- 24) 中西 敏一『イギリス文学と監獄 — 18, 19世紀イギリス文学の一断面 —』
(東京: 開文社出版, 1991), p. 79.

第 四 章

Doctor Marigold について

—主人公の光と影の軌跡をめぐって—

DM はディケンズのクリスマス物としては総計25篇中23番目にあたる作品で、*AYR* の1865年のクリスマス増刊号 (*AYR*, vol. 14) に収録され発表されたものである。この時は *Doctor Marigold's Prescriptions* なるタイトルの下に、クリスマス増刊号用の慣例となっていた48頁のスペースを、ディケンズが設定した枠組に基づく8章立ての7篇の短篇群よりなる連合体として発表され、その各作品を彼自身を含む6人の作家が分担して執筆しているのである。その中で第1章 “To Be Taken Immediately”, 第6章 “To Be Taken with a Grain of Salt”, 第8章 “To Be Taken for Life” の三篇をディケンズ自身が担当して執筆し、*CS* に収録した際、他作家の手になる五篇は削除するとともにタイトルを変更し、*In Three Chapters* というサブタイトルを付けて刊行したのであった。他の作家の手になる五篇のタイトルと作家名を掲載順に記すと、次のようになる。“Not to Be Taken at Bed-Time” by Rosa Mulholland (1841-1921) [第2章], “To Be Taken at the Dinner-Table” by Charles

Collins (1828-75) [第3章], “Not to Be Taken for Granted” by Hesba Stretton [第4章], “To Be Taken in Water” by Walter Thornbury (1828-76) [第5章], “To Be Taken and Tired” by Mrs. Gascoyne (1813-83) [第7章] ということになる。AYR の原文と CS 所収の DM を比較すると、スペリングやパンクチュエーション等の細かい異同は当然として、目につく改定といえは前者の第8章を後者の第3章として収録するにあたって、書き出しの4行を削除して “So” (466) 一語に集約するとともに、それに続く9行の繋がりを全く逆にして冒頭のパラグラフを構成していることであろうか。それはそれとして、以下内容的には連続した一つの物語である第1章と第3章を対象として、分析と考察を行っていくこととしたい。

CS に収録されている殆どの作品がそうであるように、DM も全篇が一人称体による叙述で進められていて、主人公兼語り手の名前は作品のタイトルと全く同じドクター・マリゴールドである。ドクターなる奇妙なファーストネームは、主人公誕生の時に世話になった親切な医師への感謝の気持を込めて付けられたことに由来するという (435)。職業は親の代からの旅回りの大道商人。この道においては「王様」 (“the king of the Cheap Jacks”) (446) と讃えられる程の成功を収めている人物である。但し、華やかな外見とは裏腹にその人生行路は恐ろしいまでの悲哀と寂寥感に覆われている。その原因は全て13年間連れ添った妻にある。癩癩を爆発させる病癩を持つ彼女の矛先が娘ソフィー (Sophy) に向けられた時は、まさに地獄であったという。母親とは到底思えない程、4、5歳の幼い娘を苛む常軌を逸脱した悪魔的な姿が描かれている。

She had a wonderful quantity of shining dark hair, all curling natural about her. It is quite astonishing to me now, that I didn't go tearing mad when I used to see her run from her mother before the cart, and her mother catch her by this hair, and pull her down by it, and beat her. (443) (下線は筆者)

娘は生まれつきの巻き毛となっている、驚く程豊かで輝くばかりに黒々とした髪をしていた。荷馬車の前を母親から追いかけられ、母親に髪をつかまれ、打ち据えられている娘を毎日のように見ていた当時自分が発狂しなかったのは、全くもって信じられない思いである。

妻が娘の豊かな黒髪を目の敵にして、それをつかんで引き回しては打ち据える場面に何度となく直面しながら、よくも発狂しなかったものだ、と主人公は吐露しているが、これは一つには平常心を取り戻した時には妻が母親として娘の面倒を驚く程良く見て、清潔でこざっぱりとした服装を常にさせていた状況 (ibid.) が救いとなって、彼を安堵させる瞬間もあったことが与かって有効に作用したからこそ、狂乱への瀬戸際で踏み止まることができ得たのであった。

これに続いて、鉄道の出現で斜陽となり不振をかこつ状態で沼沢地方 ("the marsh country") (ibid.) へ足をのばした時、熱病に冒された娘を励まし、沈まんとするおのが気持を引き立てるために、そして薬代を少しでも稼ごうとして、掛け声も賑やかに行商を繰り広げていた主人公の首に抱きついたまま、ソフィーが通りの向かい側の教会の墓地の「柔らかく緑したたる草」 ("grass so soft and green") (445-6) に横たえてほしいといいつつ息を引き取る場面を迎えることとなる。その時彼は妻に次のようにいう。

“O woman, woman,” I tells her, “you’ll never catch my little Sophy by her hair again, for she has flown away from you!”

(446) (下線は筆者)

「おお、ひどい女よ」と妻に言った、「お前は私のかわいいソフィーの髪を二度とつかめないぞ。あの子はお前から飛び立って行ったのだから！」

激情の奔出を抑制できぬまま憎悪のターゲットであったソフィーの黒髪をことさら持ち出して、マリゴールドは妻に仮借ない言葉を浴びせてしまう。娘の死と夫からの厳しい言葉とのダブルショックの重圧の下、彼女はふさぎ込むことが多くなり、癩癩の発作が出た時は自分の身体を責め苛むようになる。遂にはアルコールにも手を出してしまう。かような日々を過ごして、ある夏の夕方エクセターに巡って来た時、妻の最期の場面が出来する。

... we saw a woman beating a child in a cruel manner, who screamed, “Don’t beat me ! O mother, mother, mother !” Then my wife stopped her ears, and ran away like a wild thing, and next day she was found in the river. (ibid.) (下線は筆者)

(前略) 私達は一人の女が残虐に子供を打ち据えているのを見た、その子は「ぶたないで！ おお、お母さん、お母さん、お母さん！」と悲鳴をあげた。その時妻は両手で耳を覆い、狂ったものごとく駆け出した、そして次の日川で事切れているのが発見された。

この引用において子供を残虐に打ち据えている女を叙した‘woman’と、ソフィー他界の場面において主人公が妻に浴びせ掛けた

‘woman, woman’ とが照応し合い、重層的な反響音をたてながらマリゴールド夫人に襲いかかって一挙に飲み込んでしまった感じである。自業自得であり、罪の報いを受けただけのことだといってしまえばそれまでだが、それとともに何か運命的で悲劇的な雰囲気にも包まれている場面である、という印象が強く迫ってくるのである。暗く陰惨な場面であることは指摘するまでもないとしても。

妻の後を追うようにして、長年苦楽を共にしてきた愛犬までも、寄る年波に勝てずある夜ヨークで痙攣に襲われ、そのまま息が絶えてしまう (ibid.)。かくして、娘、妻、愛犬と相次いで亡くした主人公マリゴールドは、荷馬車を引く老馬のみを友とする悲哀と孤独の影に色濃く覆われた状況に陥ることとなる。

Being naturally of a tender turn, I had dreadful lonely feelings on me arter this. I conquered 'em at selling times, having a reputation to keep (not to mention keeping myself), but they got me down in private, and rolled upon me. That's often the way with us public characters. (ibid.)

生来感じ易い性質であるので、この後私は恐ろしい程の孤独感を抱くようになった。(自分を維持してゆくのはいうまでもないが) 維持すべき名声があったので、行商に従事している時は孤独感を抑え得たが、個人に戻った時は孤独感が私をめいらせ、押し潰した。こうしたことはわれわれ有名人にとってはよくあることなのである。

孤独感と寂寥感に責め苛まれ押し潰されそうになりながらも、それを内に隠し包み込んで、死に物狂いで頑張って口上を述べては商品売り尽くして、成功を収めている主人公の華やかに見える外観

は、作者ディケンズ自身の姿が投影されたものであることは指摘するまでもあるまい。一人称体による叙述というメリットとあいまって、ディケンズは主人公に親近感を強く覚えて、異常とも思える程の感情移入を行い、その帰結として彼自身の悲哀に満ち暗澹としている内面が如実に映し出されている¹⁾箇所であることも。

DM が9月下旬から11月上旬にかけて執筆された²⁾1865年は、ディケンズが1週間の休暇をパリで過ごした後、6月9日ロンドンへの帰途ステイプルハースト駅の手前で、多数の死傷者を出した鉄道事故に遭遇したことで知られていることは述べるまでもない。彼と同乗していた愛人エレン・ターナンとは運よくかすり傷一つ負わないで済んだが、この事故から受けた悪夢の如き生々しい記憶は一ヶ月後はおろか、奇しくも事故に遭遇したのと全く同じ5年後の1870年6月9日に他界するまで抜き難く付きまとい続けて、彼はそのショックから完全に回復することはなかったのである³⁾。1858年に妻と離婚した後、27歳も年齢差のある秘密の若い愛人との間も、女の方が男の名声と財力に屈服したことはあり得るとしても、相互の愛と信頼に基盤をおくノーマルな形の男女関係として成り立っていたとは到底考えられない。9人を数える子供達(息子7人と娘2人)の中で、社会人として巣立ち始めた上の方の息子達の能力や人格面に失望させられることが多かった上に、サッカーを始めとする長年の知己の訃報に接することも増える一方であった。そこへこの鉄道事故に遭遇するという出来事が持ちあがって来たのである。前作 *Great Expectations* から4年振りにこの年の9月長篇最後の完結作品である *Our Mutual Friend* を完成させたのに続いて、間髪を入れず DM の執筆に取り掛かり、AYR のクリスマス増刊号として

刊行したのが年内に20万部も売れる⁴⁾など、1865年もディケンズは旺盛な活動を展開し、人気も衰えを知らぬどころか、ますます上昇の一途を辿って行く華やかな一年を過ごしたようには見える。だがその実、2月雪が降り積もる中、長年の習慣である早朝の長距離散歩をやったのはよいが、ひどい凍傷に冒されて、3月中ずっと苦痛の余り眠れぬ夜が続き、散歩を何とか再開できたのは4月下旬になってのことだった⁵⁾という風に、53歳を迎えた年齢を思うと当然の現象ではあるが、肉体面に確実に衰えがはじめていたことは否定できない。そこへ更に6月の鉄道事故で深刻な回復不能のショックを精神面が受けたとなると、心身共に暗さへと傾斜して行き、死の影に色濃く覆われて行くばかりであったことと、孤独感、寂寥感も募る一方であったことは、述べるまでもあるまい。それで、「大道商人の王様」と称される程の名声を博した外観と、それとは裏腹の生き地獄の如き家庭を抱え、家族の死後は孤影悄然と荷馬車とともに国中を巡回する主人公ドクター・マリゴールドの姿に、作者ディケンズのこれまで説明してきた姿が生々しく直截的とも思える形で投影されていることは、もはや指摘するまでもなく明らかである。「素晴らしい迫真性を持っている」⁶⁾という作者の強烈な自信より生み出された主人公の流麗な口上と語りにも支えられて、DMは十分なリアリティを持って展開されているといつてよい。

だが、作品はここから意外な筋道を辿ることになる。主人公の前にピクルソン (Pickleson) なる巨人が現れ、この人物から主人であるミム (Mim) が養女にしている聾啞者の幼女を虐待している話を聞かされる。

When I heard this account from the giant, otherwise Pickleson, and likewise that the poor girl had beautiful long dark hair, and was often pulled down by it and beaten, I couldn't see the giant through what stood in my eyes. (447)

(下線は筆者)

この巨人、つまりピクルソンからこの話と、同じくその可哀想な幼女が美しく長い黒髪を持っていることと、その髪をししばつかまれて引き倒されて打ち据えられるということを聞いた時、私は目になじんで来た涙のためにピクルソンを見ることができなくなってしまった。

これは妻がソフィーの髪を引っ張り回しては虐待していたかつての場面が再現された感じで、主人公が涙なしに聞けないのは当然のことであろう。ソフィーでは 'a wonderful quantity of shining dark hair' (443) と描写されていたのが、この未知の幼女では 'beautiful long dark hair' と叙されていて、まさに二人の共通項であり象徴でもある「豊かな黒髪」により、主人公は魂を揺さぶられ、その幼女と会い、姿も年格好もソフィーの面影を宿していることを確認するや否や、ミムと交渉してズボン吊り6個との交換で彼女を引き取り、即刻ソフィーと命名する (448)。そして、いわば第二のソフィーも辛抱強く教育にあたる養父の期待と熱意に応えて、知力と教養を徐々に確実に上昇伸展させ、二人の間に音声抜きのコミュニケーションが成立して、遂には相互の魂の交流が顕現する。第一のソフィーが蘇ったと思えるまでに第二のソフィーが似て来たこともあって、マリゴールドの寂寥感、孤立感は払拭されて行く (449)。

第二のソフィーが16歳を迎えた時、彼は淑女への成長変身を願って、ロンドンの聾啞学校へ2年間入学させる。その2年の間大道商

刊行したのが年内に20万部も売れる⁴⁾など、1865年もディケンズは旺盛な活動を展開し、人気も衰えを知らぬどころか、ますます上昇の一途を辿って行く華やかな一年を過ごしたようには見える。だがその実、2月雪が降り積もる中、長年の習慣である早朝の長距離散歩をやったのはよいが、ひどい凍傷に冒されて、3月中ずっと苦痛の余り眠れぬ夜が続き、散歩を何とか再開できたのは4月下旬になってのことだった⁵⁾という風に、53歳を迎えた年齢を思うと当然の現象ではあるが、肉体面に確実に衰えが始まっていたことは否定できない。そこへ更に6月の鉄道事故で深刻な回復不能のショックを精神面が受けたとなると、心身共に暗さへと傾斜して行き、死の影に色濃く覆われて行くばかりであったことと、孤独感、寂寥感も募る一方であったことは、述べるまでもあるまい。それで、「大道商人の王様」と称される程の名声を博した外観と、それとは裏腹の生き地獄の如き家庭を抱え、家族の死後は孤影悄然と荷馬車とともに国中を巡回する主人公ドクター・マリゴールドの姿に、作者ディケンズのこれまで説明してきた姿が生々しく直截的とも思える形で投影されていることは、もはや指摘するまでもなく明らかである。

「素晴らしい迫真性を持っている」⁶⁾という作者の強烈な自信より生み出された主人公の流麗な口上と語りにも支えられて、*DM*は十分なリアリティを持って展開されているといつてよい。

だが、作品はここから意外な筋道を辿ることになる。主人公の前にピクルソン (Pickleson) なる巨人が現れ、この人物から主人であるミム (Mim) が養女にしている聾啞者の幼女を虐待している話を聞かされる。

When I heard this account from the giant, otherwise Pickleson, and likewise that the poor girl had beautiful long dark hair, and was often pulled down by it and beaten, I couldn't see the giant through what stood in my eyes. (447)

(下線は筆者)

この巨人、つまりピクルソンからこの話と、同じくその可哀な少女が美しく長い黒髪を持っていることと、その髪をしばしばつかまれて引き倒されて打ち据えられるということを聞いた時、私は目ににじんで来た涙のためにピクルソンを見ることができなくなってしまった。

これは妻がソフィーの髪を引っ張り回しては虐待していたかつての場面が再現された感じで、主人公が涙なしに聞けないのは当然のことであろう。ソフィーでは 'a wonderful quantity of shining dark hair' (443) と描写されていたのが、この未知の少女では 'beautiful long dark hair' と叙されていて、まさに二人の共通項であり象徴でもある「豊かな黒髪」により、主人公は魂を揺さぶられ、その少女と会い、姿も年格好もソフィーの面影を宿していることを確認するや否や、ミムと交渉してズボン吊り6個との交換で彼女を引き取り、即刻ソフィーと命名する (448)。そして、いわば第二のソフィーも辛抱強く教育にあたる養父の期待と熱意に応じて、知力と教養を徐々に確実に上昇伸展させ、二人の間に音声抜きのコミュニケーションが成立して、遂には相互の魂の交流が顕現する。第一のソフィーが蘇ったと思えるまでに第二のソフィーが似て来たこともあって、マリゴールドの寂寥感、孤立感は払拭されて行く (449)。

第二のソフィーが16歳を迎えた時、彼は淑女への成長変身を願って、ロンドンの聾啞学校へ2年間入学させる。その2年の間大道商

人としての生業を続ける傍ら、マリゴールドはもう一台荷馬車を購入して、戻って来る彼女のために書物の蒐集に全力を傾注する。そして約束の2年が過ぎて再会の日が巡って来る。

Grown such a woman, so pretty, so intelligent, so expressive !
I knew then that she must be really like my child, or I could never have known her, standing quiet by the door. (454)

非常に美しく、知的で、表情豊かな、素晴らしい女性に成長していたのだ！私はこの時彼女が本当に第一のソフィーの成長した姿の生き写しであることを悟った、そうでないと静かに戸口に立っている彼女が誰であるか分からなかったことであろう。

ここでもあくまでも第一のソフィーの蘇りという視点から、美しく知的な淑女へと期待通り成長変身し得て眼前に姿を現した第二のソフィーを見つめる、という一種奇跡の顕現に対する感動から生まれる姿勢を主人公は持続させている。

“To Be Taken for Life”と題する第3章では、学校在学中に知り合い互いに愛し合うようになった同じく聾啞者である“the strange young gentleman” (468) との結婚を、父親から容認され祝福を受けた後、第二のソフィーはある商会の事務員として中国へ赴任する夫⁷⁾に従って主人公の許から巣立って行ってしまふ。またしても主人公は孤独な状態に陥ったのであるが、5年ほど経過した1864年のクリスマス・イヴの夜、老馬ともどもロンドンへ出て来て娘のために買い集めた書物を積んだ荷馬車の中でうとうととしていた彼の前に、突然一人の幼女が出現する。

Looking full at me, the tiny creature took off her mite of a straw hat, and a quantity of dark curls fell all about her face. Then she opened her lips, and said in a pretty voice, “Grandfather !”

“Ah, my God !” I cries out. “She can speak !” (472) (下線は筆者)

私をじっと見つめながら、その幼女は小さな麦わら帽子を脱いだ、すると豊かな黒い巻き毛が顔の周りで波打った。その時彼女は口を開き、可愛い声で、「おじいちゃん！」と言った。

「おお、神様！」と私は叫んだ。「この子は口が利けます！」

これは中国に渡っている間に娘夫婦の間にできた孫娘で、主人公は口が利けるものかどうか気を揉んでいたのであるが、それが思いがけず登場して来て彼に話しかけたのであった。しかも、第一のソフィーの再来、二度目の蘇りとしかいいようのない、とりわけ「豊かな黒髪」に凝縮され象徴される姿で。それ故主人公の奇跡としか思えない出来事に接しての感動、激情も抑え難く迸り出て来たのであるが、孫娘に続いて出現した第二のソフィーとその夫と5年振りの再会を遂げた場面における心情は、*DM* の結びも兼ねて次のように叙されている。

And we did begin to get over it, and I saw the pretty child a-talking, pleased and quick and eager and busy, to her mother, in the signs that I had first taught her mother, the happy and yet pitying tears fell rolling down my face. (ibid.)

興奮をどうにか抑えて、可愛い孫娘が私が母親に教え込んだあのやり方で、母親に、明るく活発に熱意を込めて生き生きと、話しかけるのを見て、同情混じりの嬉し涙が私の顔を転がり落ちて行ったのである。

幼くして死去した第一のソフィーとロが利けぬ第二のソフィーへの同情心、憐憫の情が思わず湧きあがって来て、ロが利ける上に明るく活発な孫娘を得ての幸福感と一体となって、涙にむせぶ姿となったのであろうか。主人公と娘夫婦及び孫娘とが血の繋がりが全くない赤の他人同士に過ぎない事実を考えると、こうした心情の発露はいかにもクリスマス物にふさわしい雰囲気盛り上げる叙述であるといえよう。

家族が相次いで他界して寂寥感、孤独感に押し潰され息も絶え絶えになっている主人公が描写されている件までは、*DM* が堅固なリアリティに支えられていることはもう述べるまでもない。それに続く第二のソフィーが養女となる件以降の本篇の後半部分は、どんなものであろうか。後半部分が何か希薄だという評価⁸⁾も十分に成り立つだろう。余りにも第一のソフィーの存在感が濃密に過ぎる上に、音声抜きのコミュニケーションを通して、いくら「王様」とはいえ旅回りの大道商人に過ぎない主人公に、組織的で緻密な方法で文字や知識を教え込むだけの力が存している、というのも少し話がうますぎはしないか。国中を回って書物を蒐集するというのもそうだし、孫娘と初対面のシーンもそうであろう。という風に見てみると、*DM* が“a sentimental piece”⁹⁾と呼ばれても、それは致し方のないことといわざるを得ない。クリスマスという年に一度の祝祭に作品発刊の時期を合わせ、フィナーレの大団円の部分もクリスマス・イヴの夜の出来事という設定になっているなど、祝祭の雰囲気

を最大限に活用したことより醸成されるバリアーを通して *DM* に接することになるので、後半部分における感傷過多の、それとともに主人公と第二のソフィーのコミュニケーションに集約される「休日のゲーム」¹⁰⁾のごとき設定と展開が、読み手にとってさほど不自然で大袈裟に過ぎる話とは感じられない、ということは十分に考えられ得ることである。だから、そうした付随的で装飾的な要素を取り除いた形で定着させて見ると、やはり後半部分の叙述と展開に夢物語的な甘さと弱さが付きまどっている事実が浮き彫りにされて来るのは、否定できないように思われる。だが、弱点や欠陥は容認するとして、作者ディケンズの切ないまでに救済を希求してやまない心情も、あわせ同時に浮き彫りにされて来ることも見落してはならない事実である。第二のソフィーが中国へ渡っていた5年間も大道商人の王様であり続け、名声も更に上昇の一途を辿るばかりであった(471)と相も変わらぬ華やかな外見に言及した後、主人公は次のような叙述を行っている。

Sophy's books so brought up Sophy's self, that I saw her touching face quite plainly, before I dropped off dozing by the fire. This may be a reason why Sophy, with her deaf-and-dumb child in her arms, seemed to stand silent by me all through my nap. I was on the road, off the road, in all sorts of places,... and still she stood silent by me, with her silent child in her arms. (ibid.)

ソフィーのために蒐集した書物がソフィー自身を現出させたので、暖房の火の傍で居眠りに落ちるまでに、私は彼女のいじらしい顔をくっきりと見ること

ができた。聾啞者の子供を両腕に抱えて、居眠りが続いている間中ソフィーが私の傍に無言のまま立たずんでいるように見えたのも、多分これのなせることであつたのであろう。私が色々な場所で行商の仕事をしていようと、いまいと、(中略) ずっと彼女は無言のままにいる子供を両腕に抱えて、私の傍に無言のまま立たずんでいた。

この夢から醒めた主人公の眼前に孫娘が突然登場して大団円となる訳であるが、それはともあれ、幼な子イエスを抱く聖母マリアよりしく、この幼な子を抱いて傍に立たずんで無言のまま主人公を見守り続ける第二のソフィーの姿は、ディケンズの孤独な魂から生み出された幻像であろう。母子共に聾啞者であるというのも極めて効果的である。音声媒介していない分だけ、相互の魂の触れ合いがより一層静かに凝集された形で営まれている様が感受されるからである。「豊かな黒髪」を主人公をめぐる三人の女性像を象徴するものとして位置付けていることと併せ、夾雑物の存在を許さない直接的であり、かつ控え目に抑制を利かせて慈愛を注いで魂を癒してくれる女性像を、純粹無垢の化身と信じることのできる少女と聾啞者に希求せざるを得ない程、ディケンズにとり付いている孤独感、寂寥感は重く激しいものであつたのであろうか。

いずれにせよ、第二のソフィーに集約される女性像に反映され投影されているのは、エレン・ターナンではなくて、メアリー・ホガースであると思われる。*DM* は彼女の他界から30年後に発表されているが、依然としてこの17歳で世を去った義妹へのディケンズの愛は衰えを知るどころか、秘めよう抑圧しようとする程、却って静かに激しく燃え続け、彼女の霊、幻像に魂の癒しと救済を希求してやまなかつたのである。それは主人公の名前マリゴールドに何よりも端的に示されている。一見して明らかなように、この名前

は聖母マリアを讃えて植物に付けられたもの¹¹⁾であるし、マリアがメアリーと同義であることは指摘するまでもないからである。

〔注〕

- 1) Peter Ackroyd, *Dickens*, p. 969.
- 2) *A Dickens Chronology*, p. 118.
- 3) Edgar Johnson, *Charles Dickens – His Tragedy and Triumph –* (London: Victor Gollancz, 1953), vol. 2, p. 1020.
- 4) Robert L. Patten, *Charles Dickens and His Publishers* (Oxford: Oxford University Press, 1978), p. 301.
- 5) *A Dickens Chronology*, pp. 116–7.
- 6) “It [a Cheap Jack] is wonderfully like the real thing.” (*The Letters of Charles Dickens*, vol. III, p. 438.)
- 7) 龔唾者が中国という異郷の地で商会の事務員として家庭が持てるだけの働きを示す、という設定には不自然で無理があるように思われてならない。
- 8) “It [DM] wears a little thin as it proceeds.” (Philip Hobsbaum, *A Reader's Guide to Charles Dickens*, [London: Thames and Hudson, 1972], p. 148.)
- 9) Peter Ackroyd, p. 969.
- 10) “a holiday game” (Deborah A. Thomas, *Dickens and the Short Story*, p. 108.)
- 11) “... so called in honour of the Virgin Mary” (*Brewer's Dictionary of Phrase & Fable*¹⁴, p. 704.)

第 五 章

Mugby Junction について

— 主人公の蘇生をめぐる —

MJ は *AYR* の1866年のクリスマス増刊号 (*AYR*, vol. 18) に掲載された作品で、*CS* に収録されている作品群の中では第19番目の、そして『クリスマス・キャロル』からは数えて第24番目のクリスマス物に属する作品である。*AYR* に掲載された時は *MJ* の全8章の内前半の第4章までをディケンズが担当し、後半の第5章以下はそれぞれ1章ずつを4名の作家が担当するという形で構成されていたが、*CS* には他の作家の手になる後半部分は削除される形をとって収録されたのであった。ちなみに、第5章以下第8章までのタイトルと作家名を順次記すと、次のようになる。“No. 2 Branch Line. The Engine-Driver” by Andrew Halliday (1830-77), “No. 3 Branch Line. The Compensation House” by Charles Collins, “No. 4 Branch Line. The Travelling Post-Office” by Hesba Stretton, “No. 5 Branch Line. The Engineer” by Amelia B. Edwards (1831-92) ということになる。ディケンズ自身の手になる全4章のタイトルを第1章から順次記すと、“Barbox Brothers”, “Barbox Brothers

and Co.”, “Main Line: The Boy at Mugby”, “No. 1 Branch Line: The Signal-Man” ということになる。一見して分かるように第1章と第2章が一つの物語として連続しているのに対し、第3章と第4章はそれぞれに独立した物語を担っている。それで本章では、以下第1章と第2章のみに対象を限定して分析と考察を展開して行きたいと思う。

第1・2章のタイトルを通して見られるバーボックス・ブラザーズ (Barbox Brothers) なる名称は、ジャクソン (Jackson) と併用される主人公の名前であり、かつロンバード街のとある路地の片隅にあった穴蔵のごとき公証人兼手形売買の仲介業を営んでいた事務所の名前でもあるのである。この事務所に長年仕えている間に不本意ながら何時の間にか経営者に納まらざるを得ない状況に遭遇した主人公が、思い立って事務所を整理解散して、生きて行くのに困らないだけのものと手荷物だけを携えて当て所のない旅に出て、偶然乗り合わせた汽車が停車したマグビー乗り換え駅 (Mugby Junction) のプラットフォームに、ふと気紛れを起こして風雨の強い深夜下りたところから話が始まる。彼の風貌は次のようである。

Speaking to himself he spoke to a man within five years of fifty either way, who had turned grey too soon, like a neglected fire; a man of pondering habit, brooding carriage of the head, and suppressed internal voice; a man with many indications on him of having been much alone. (476)

自分に語りかけながら45歳くらいから55歳くらいまでの年齢の一人の男に彼は
呟きかけていた。放置されて知らぬ間に灰になった火のように、余りにも早く

第五章 *Mugby Junction* について

白髪に変わり、いつももの思いに沈む習慣と頭の姿勢を持ち、抑え込まれた内向的な声を持つ人物であり、常に孤独であることの数多くの徴候を持つ人物であった。

この50歳前後の孤愁に深く包まれた人物を迎える辺りの佇まいもそれにふさわしいものである。

Now, all quiet, all rusty, wind and rain in possession, lamps extinguished, Mugby Junction dead and indistinct, with its robe drawn over its head, like Caesar¹⁾. (477)

その時、静まりかえり、錆色に包まれ、風雨に占領され、明かりも消えた中で、マグビー乗り換え駅はシーザーのごとく、顔をマントで覆われて、死に絶えぱんやりと横たわっていた。

擬人法を用いて、謀略にはめられ不意に襲撃されて、外套で顔を覆いながら倒れたシーザーに擬せられた深夜の嵐に洗われているプラットフォームが、死の雰囲気にも包まれていることは指摘するまでもない。こうしたいかにも似つかわしい死の世界の出迎えを受けて、主人公は一人下り立ったのである。そして彼の半生も暗く惨めなものであった。宿をとった旅館の部屋で、夜明け後自分自身への眩きを続けている彼のモノローグと連続し一体化している地の文で、それが説明されている。

The discovery—aided in its turn by the deceit of the only woman he had ever loved, and the deceit of the only friend he had ever made; who eloped from him to be married together—the discovery, so followed up, completed what his earliest

rearing had begun. He shrank, abashed, within the form of Barbox, and lifted up his head and heart no more. (482)

その発見—彼がこれまで愛した唯一人の女性の裏切りと、彼が持ち得た唯一人の友人の裏切り、つまり彼を捨てて駆け落ちした二人の裏切りに大いに加速された—その発見が、徹底した加速を得て、幼児期に端を発するものを完成させた。彼はバーボックスの枠の中でちこまり、うろたえた、そして顔も魂もうなだれたきりとなった。

主人公の自己疎外して殻に閉じこもった孤独な姿、恋人と唯一人の友人に裏切られて捨て去られたことに象徴される暗く惨めな過去等は、5作目のクリスマス物である *The Haunted Man* (1848) の主人公レドロー (Redlaw) の焼き直し²⁾ といってよい。だが『憑かれた男』の暗く重苦しい雰囲気 が全篇を貫いて流れているのに対して、*MJ* はそうではなくて、途中でトーンが変調している。上掲の引用文の箇所までは暗く沈んだタッチで叙述が展開されているが、主人公バーボックス・ブラザーズが旅館から散歩に出るあたりからトーンが変わって、その日が11月上旬の「よく晴れ上がった日」(“a fine bright day”) (485) であったという叙述が出て来る箇所以降は、冒頭のトーンが目立って変容している³⁾ ように思われる。それは彼が散歩の途中でとある家から出て来た数人の子供達が、その家の二階の窓辺に横になった姿のまま顔を覗かせている病身の女性に向かって手でキスを送っているのを目撃したシーンと、前後して起こっている。

この病身でありながら「極めて明るい顔」(“a very bright face”) (ibid.) に微笑を絶やさない上に、細い両腕を楽器でも弾いているかのよう にせっせと動かしている女性に引かれるものを覚えたバーボック

ス・ブラザーズは、その次の日も同じ方向へ散歩の足を向けて出て来た子供の一人をつかまえて、その女性の名前がフィービー (Phoebe) であることや、彼女が近所の子供達を集めて教えていることを聞き出す。その後彼女の前にさしかかっただけで不器用な会釈を送った彼に対して、フィービーが明るく応えるシーンを経て、彼の方はもう少し滞在しようと思つて決心するに至る。それから数日ほど経過して再びよく晴れあがった日、子供達がいなくなるのを見計らって、窓を開けているフィービーの前に姿を現した彼は、今度はきちんと会釈をして、中へ入るよう誘い受ける。二階へ上がって部屋も彼女が横になっている寝床も清潔に白色で統一されているのを見だし、更に楽器を弾いているように見えた両手の動きが、本当はレースをせっせと編んでいる素早い動作であることを発見した彼の目に、フィービーは次のごとく映る。

He guessed her to be thirty. The charm of her transparent face and large bright brown eyes was, not that they were passively resigned, but that they were actively and thoroughly cheerful. Even her busy hands, which of their own thinness alone might have besought compassion, plied their task with a gay courage that made mere compassion an unjustifiable assumption of superiority, and an impertinence. (490)

彼は彼女が30歳だと思った。彼女の透き通った顔と大きな明るい茶色の両眼の魅力は、受身的なあきらめからではなくて、前向きで極めて明るいものから生まれてくるものであった。その細さが同情を誘ったかも知れない忙しく動いている両手でさえ、単なる同情を不当な優越感と思ひ上がりの表れにしてしまう活気ある勇敢さでレース編みという仕事に精を出していた。

丁度そこへ仕事から帰宅した父親の説明によると、フィービーが1年2ヶ月の時に他界した母親が持病の錯乱に陥る発作を起こして、抱いていた彼女を落としてしまったために、寝た切りの状態になってしまったという。その上子供を教えたり、レース編みをしたりして、乏しい家計を助けるために寸暇を惜しんで働いているという。そうした過重とも思える負担を生涯寝た切りの状態にある彼女が、積極的に明るく勇気を持って日夜引き受け取り組んでいるというのである。しかも「仕事としてではなく、愛を持って取り組んでいる」(“I do it as love, not as work.”) (493) と宣言し、父親を恨むどころか、彼女を励まし元気づけるために歌を幼少時から唄い続けてくれた彼を「詩人」(ibid.) と絶賛している。だから父親が指摘することく、“Everything is music to her” (ibid.) ということになる。つまりフィービーを最良の感化力を持つ音楽と同等の高さにおいて評価するという、最高の讃美が捧げられている⁴⁾ということになるのである。それ故に、バーボックス・ブラザーズは彼女の影響の下に自ら進んで、“I am all wrong together.” (496) と自己の人生態度を懺悔し、暗澹とした思い出の連続でしかない誕生日(12月20日)から逃れるために、生涯の残りの日々を流浪の旅で埋めるつもりであったと告白を行い、マグビー乗り換え駅から分岐している7本の鉄道のそれぞれの旅の結果を報告するから、それを踏まえての最終的な行き先の決定に力を貸してほしいと懇願する姿勢をとり、ミニチュアのピアノを贈るという行動にまで出るのである。

かくして7本ある鉄道のうち6本まで試みたけれども、どれもこれという決定的な要因に欠けたので、バーボックス・ブラザーズは

上述のピアノを買うために一度乗った路線を、フィービーの勧めもあって再度試みることにする。実行に移したのが12月18日。終点の大きな町に到着後ホテルに旅行鞆を預けて散歩に出た時、突然一人の幼女が“*I am lost!*” (502) と言いながらまつわりついて離れない。ポリー (Polly) という名前以外はいっさい何も分からない。致し方なく彼はこの幼女をホテルに連れて行くことにするが、その道行きはバーボックス・ブラザーズが“*a foolish giant*” (503), “*a good-humoured monster*” (505) と形容されることで、おとぎ話的な雰囲気包まれている。特にポリーが語って聞かせる一人の少年が妖精の作った巨大なパイを貪欲に食べ尽くしたのはよいが、頬が膨張を重ねて遂には破裂してしまうという、不気味さを秘めた“*a long romance*”⁵⁾ (504) が、大いにそうした雰囲気を濃密なものにし盛り上げていることは指摘するまでもない。

ホテルで夕食を済ませ就寝のためメイドがポリーを部屋へ連れて行った後、“*Mr. Jackson!*” (507) と声を掛けてきた者がいる。それまでもポリーに対して、初対面にもかかわらず以前から知っているという奇妙な感覚を味わっていたバーボックス・ブラザーズは、その人物を見た途端全てを了解する。それはポリーの母親であるとともに、彼の唯一人の友人トレシャム (Tresham) と駆け落ちすることで彼を見捨てた女性ベアトリス (Beatrice) に他ならなかったからである。その想像以上の憔悴振りに驚き同情の念で一杯の彼に対し、彼女は先日フィービーへの贈り物を選ぶために彼が訪れた楽器店で彼の姿を目撃した時から、彼との再会を願って毎日駅へ足を運んだと切々と訴えたのであった。

“You were meditating as you walked the street, but the calm expression of your face emboldened me to send my child to you. And when I saw you bend your head to speak tenderly to her, I prayed to God to forgive me for having ever brought a sorrow on it. I now pray to you to forgive me, and to forgive my husband.” (510)

「通りを歩きながらあなたはもの思いにふけておられました、あなたの顔のもの静かな表情に力づけられてわたしはわが子をあなたの前に送り出したのです。前かがみになってポリーにやさしく話しかけるあなたの姿を見た時、あなたに悲しみを植え付けたわたしをお許し下さるよう神様にお祈り致しました。わたしと夫を許して下さいようお願い申し上げます」

ひざまずいて許しを乞う彼女を彼は当然許すけれども、それとともに彼女とトレシャムの間でできた6人の子供の内、ポリー以外の5人は幼くして世を去り、それをトレシャムがバーボックス・ブラザーズの呪いのせいだと苦にして寝込んでいること、夫の方が書店を持ち、彼女が音楽の教師をしてこの町で何とか生計を立てている事実等を知る。ベアトリスが音楽と関わりを持っていることを見落す訳には行かない。いうまでもなく音楽即フィービーと称してよい程、両者は一体化した関係にあるからである。ベアトリスの言葉を聞いている彼の耳に、“Was Phoebe playing at that moment on her distant couch? He seemed to hear her.” (509) と叙述されているように、同時にフィービーが奏でる楽の音がテレパシーのように聞こえてきたという。つまりは彼女の魂に感応した彼の魂が音楽とつながるベアトリスを許すのは自然の成り行きといえよう。事実後に彼の仲介によりベアトリスはフィービーに音楽を教えるようにな

るのである。

それとポリーの存在も大きな比重を占めているのは指摘するまでもなく、バーボックス・ブラザーズがトレシャムを許したのはこの幼女を通してである。ベアトリスと再会した次の日、人形を買って貰ったりサーカスを見物したりして楽しい半日を過ごした疲れから、「子供の眠りという素晴らしい楽園」(“the wonderful Paradise of a child’s sleep”) (513) に入りこんだポリーを抱きしめて両親の待つ家へ運んだ彼は、病み衰えた状態でソファーに横になっている父親に声を掛ける。

“Tresham,” said Barbox in a kindly voice, “I have brought you back your Polly, fast asleep. Give me your hand, and tell me you are better.”

The sick man reached forth his right hand, and bowed his head over the hand into which it was taken, and kissed it. “Thank you, thank you! I may say that I am well and happy.” (513)

「トレシャム」とバーボックスはやさしい声をかけた、「ぐっすりと眠っている君のポリーを連れて来た。君の手を握らせてくれ、そして気分が良くなったと私に言ってくれ」

その病み衰えた男は右手を差し出し、その手を握りしめたバーボックスの手を顔を近づけて接吻をした。「ありがとう、ありがとう！元気が出て来てとても幸せだ」

友情を踏みにじられた上に愛の対象までも奪い去られて、憎んでも憎みきれない筈の相手を慈父か牧師のごとく許すというのは、ポリーの存在を抜いては考えられない。無邪気に眠りの世界に遊んで

いる幼女の穏やかな顔 (“her peaceful face”) (514) は、バーボックス・ブラザーズ自身が認めているように、まさに「主の顔を見つめている天使」 (“the Angels who behold The Father’s face”) ⁶⁾(ibid.) のごとき魂の浄化力、即ちキリストにも通じる魂の浄化力を備えているからである。先述したポリーが突然出現するあたりから叙述を包むおとぎ話的な雰囲気は、クライマックスを成しているこのトレシャム許しの場面までプロットが展開してくると、絶妙の効果を発揮しているように思われる。

ベアトリスとトレシャムを許す行為を通して、バーボックス・ブラザーズはおのが誕生日から逃げ出すどころか、反対に “I wish you many happy returns of the day.” (ibid.) と、誕生日が巡ってきたことを素直に喜ぶ人間として再生したのであり、いかにもクリスマス物にふさわしく、一つの奇跡が実現されたといえよう。以後彼はマグビー乗り換え駅に定住してフィービーを励まし、ポリーは無論のことその他の人々とも交わる生活を送るようになったという。それを端的に示しているのが “He was Barbox Brothers and Co. now, and had taken thousands of partners into the solitary firm.” (ibid.) という、疎外感、孤立感が払拭されて、連帯感が彼の内に確立された事実に言及している、第2章のタイトルを嵌めこんだ箇所であることはいうまでもない。

以上述べてきたように、冒頭では死の雰囲気を醸し出していた人物が、フィービーとポリーという音楽とおとぎ話の雰囲気の精華とあってよい存在との出会いを契機として、復活再生するという出来事は、結局1ヶ月半程掛かって実現したのであるが、それにしても死から生への劇的に過ぎる変容が示されているといえないであろう

か。50歳を迎えようという男が簡単に自己の殻を破って脱皮し、別人に変身するということがあり得るだろうか。*MJ* がクリスマス物に属する作品であったとしても、フィービーとポリーがいかに魅力的な存在であったとしても、そして彼女等から立ち昇る音楽とおとぎ話の世界が最良の感化力を発揮したとしても、自己の誕生日を忌避する程孤独で暗澹たる半生に打ちのめされ、前途への展望も投げ捨てていた人物が、こうも鮮やかに復活再生を遂げるとは、少し話ができ過ぎてはいないか。こうした疑問や印象が湧いてくるのを抑えることは到底できないだろう。しかし、だからといってディケンズがレドローと違って、バーボックス・ブラザーズの場合彼自身とかけ離れた人間像を創造している⁷⁾、ということにはならないと思う。むしろ逆にディケンズの悲劇的な側面を濃厚に反映している⁸⁾ といってよいのではあるまいか。

MJ を *AYR* に掲載した以外、前年の10月に長篇 *Our Mutual Friend* を完成させた直後の時期でもあり、1866年のディケンズの執筆活動は殆ど休止状態にあった。毎週刊行する *AYR* の編集と、4月から6月にかけての30回に及ぶ自作の公開朗読会の巡業くらいが目立つ活動といってよい。それも医者から心臓が弱っているとの診断を受けて、強壯剤を服用しながらの巡業であったので、各都市での公開朗読会を終えた後の彼の疲労や衰弱は激しかった。成人に達してきた息子達を始めとする大勢の肉親や、愛人エレン・ターナン⁹⁾などを扶養したり独立させたりするのに、多額の金銭を必要としたので、無理を承知で多い時は3000人もの聴衆を前にしての公開朗読会を、ディケンズは行わざるを得なかった。これによって圧倒的な人気と莫大な収入を得たけれども、反面彼の健康が公演での緊

張により大きく損なわれ、彼が「早過ぎる老年」¹⁰⁾を迎えたことは想像に難くない。それで、*MJ* が翌年の1月下旬には265,000部を越える未曾有の売り上げを記録するという朗報があったとしても、ディケンズは心身共に4年後に訪れる死に向かって、確実に衰え沈みつつあったのである。

フィービーとポリーによって、自己の姿を投影させた、深く傷つき死神に魅入られていた中年男の魂が癒され救済されて、復活再生を遂げるという奇跡物語を、ディケンズは *MJ* の第1・2章において紡ぎ出したのであった。この空中の城にも似た美しくもはかない夢が音楽とおとぎ話という最上の雰囲気包まれて展開されていることが、作者ディケンズの切なく激しい思い入れの表れであることはいままでもない。

[注]

- 1) Cf. “in his mantle muffling up his face” (*Julius Caesar*, III, ii, 192).
- 2) Gordon Spence, “The Haunted Man and Barbox Brothers” (*The Dickensian*, vol. 76, 1980, p. 150).
- 3) Gordon Spence, p. 156.
- 4) 同じような考え方は *The Haunted Man* において、Redlaw が彼の病んだ魂を救済する役割を演じる Milly Swidger を讃えて、“Your voice and music are the same to me.” (*Christmas Books*, p. 392) といっている言葉に示されている。
- 5) *The Uncommercial Traveller* の第15章 “Nurse’s Stories” にも同じような話が出てくる。Captain Murderer なる人物が殺害した妻をベースにしてパイを焼いて食べたのはよいが、床から天井まで達する程膨張して、遂に大音響と共に破裂してしまう話である (pp. 152-3)。
- 6) Cf. “... in heaven their angels do always behold the face of my Father which is in heaven.” (*Matthew*, 18:10).
- 7) Gordon Spence, p. 157.
- 8) “... very close to the ‘tragic’ side of Dickens’s personality” (Philip Collins, *Dickens and Education* [London: Macmillan, 1965], p. 180).

第五章 *Mugby Junction* について

- 9) ディケンズはエレン・ターナンを1866年8月頃までにはウィンザーとイートンに近いスラウ (Slough) に住まわせていたらしい (*A Dickens Chronology*, p. 122)。
- 10) “a prematurely old man” (L. K. Webb, *Charles Dickens* [London: Evergreen Lives, 1983], p. 89).

tain outside the great windows when it was foggy, *the same* rain pattering and dripping when it was rainy, *the same* footmarks of turnkeys and prisoner day after day on *the same* sawdust, *the same* keys locking and unlocking *the same* heavy doors, —through all the wearisome monotony which made me feel as if I had been Foreman of the Jury for a vast period of time, ... the murdered man never lost one trace of his distinctness in my eyes, nor was he at any moment less distinct than anybody else. (465) (イタリックスは筆者)

それらの無限に続く10日の6日目の全ての単調さを貫いて一着席している全く同じ判事達とその他の連中、被告席の全く同じ殺人犯、テーブルに着いている全く同じ弁護士達、法廷の屋根へ昇っていく全く同じ調子の質疑応答、裁判長が動かすペンの全く同じガリガリいう音、出たり入ったりする全く同じ廷吏達、陽の光が差し込む日は全く同じ時刻に点される全く同じ明かり、霧の出た日の大きな窓の外側の全く同じ霧のカーテン、雨の日のばらばらと降ってはぼとぼとと滴る全く同じ雨、来る日も来る日も全く同じおが屑を踏む看守達と被告の全く同じ足跡、全く同じ重い扉に差し込まれては外される全く同じ鍵—長い年月ずっと陪審長を勤めてきたかのように私に感じさせた全ての退屈極まりない単調さを貫いて、(中略)殺害された男の幽霊はその明瞭な輪郭をいささかも減ずることなく私の目に映じ続けたし、いかなる瞬間においても周囲を圧倒して最も目立つ存在であったのである。(下線は筆者)

‘the same’ を14回も繰り返し畳み掛けて使用することで、陪審長として拘束されている裁判の抑揚を欠き変化の乏しい全ての動きに対する主人公のうんざりし閉口した心理状態と、それと鋭く対比する幽霊の執拗に不気味に迫って来る強烈な存在感とが鮮やかに浮き彫りにされていて、作家としては衰えを感じさせないさすがと思わせる描写が展開されている。

一方、末尾で異様な告白を行った被告の主人公に初めて接した時の反応も常軌を逸脱したものであった。

As I stepped into the box, the prisoner, who had been looking on attentively, but with no sign of concern, became violently agitated, and beckoned to his attorney. The prisoner's wish to challenge me was so manifest, that it occasioned a pause, during which the attorney, with his hand upon the dock, whispered with his client, and shook his head. (460-1)

私が陪審席に進み出た時、それまで視線は向けていたが、関心をもっている様子のなかった被告が、激しく興奮して、弁護士を呼んだ。被告の私を外せという要求が極めて明白であったので、その為全ての動きが止まり、その間弁護士は、被告席に手を掛けて、被告と小声で話をしながら、頭を振った。

この箇所が続く補足説明にあるように、名前すら知らない人物を陪審員から外せというのであるから、無論認められることはあり得ないけれども、この被告の態度も主人公との言葉では到底説明できない異常としか形容の仕様のない結び付きを、十分に看取させるものである。

同様の反応は主人公の側からも示されている。それは陪審員として召喚を受ける前のある朝、食卓で朝刊を広げてこの裁判で裁かれる殺人事件に関する記事を読んでいた際に出来る。

... when I laid down the paper, I was aware of a flash—rush—flow—I do not know what to call it, —no word I can find is satisfactorily descriptive, —in which I seemed to see that

bedroom passing through my room, like a picture impossibly painted on a running river. Though almost instantaneous in its passing, it was perfectly clear; so clear that I distinctly, and with a sense of relief, observed the absence of the dead body from the bed. (457)

朝刊を食卓に置いた時、何と呼んだら良いのか分からないし—私の語彙力では満足の行く説明はできないが—私は光のきらめき—殺到—奔流—に気が付いた、—その光の中で私は事件の現場である寝室が、急流に描かれたあり得ぬ絵のように、部屋を通り抜けて行くのを見たような気がした。ほんの瞬時の出来事であったけれども、それは極めて鮮明であった。余りにも鮮明であったので私はくっきりと、安堵感とともに、ベッドに死体が無いのを認め得た程であった。

新聞記事を読んだくらいでここまで鮮烈に殺人現場を幻視できるとは慄然とさせられるが、それとともに現場にある筈の死体が消えている事実に重要な意味が付与されていることを見落としてはなるまい。殺された被害者が加害者への復讐を果たすまでは昇天を指向するどころか、逆に地上にとどまって怨念が凝集された幽霊と化して、加害者への報復に燃えて動き回ることに、それを実現する手段として主人公を活用することを示していると思われるからである。事実、主人公はこの幻視体験で参った両眼を休めるために窓外の風景に視線を転じた時、当の幽霊を見ることになる。

... I saw the two men on the opposite side of the way, going from West to East. They were one behind the other. The foremost man often looked back over his shoulder. The second man followed him, at a distance of some thirty paces,

with his right hand menacingly raised. First, the singularity and steadiness of this threatening gesture in so public a thoroughfare attracted my attention; and next, the more remarkable circumstance that nobody heeded it. (ibid.)

私は向こう側の通りを二人の男が、西から東へ進んで行くのを見た。彼等は連なって進んでいた。前を進む男は肩越しにしばしば後ろを振り返って見た。後を行く男は、30歩ほどの間隔をおいて、威嚇するように右手を掲げて進んでいた。まず何よりも、こんな公共の往来での異様でありかつ落ち着き払った威嚇するがごとき仕草が私の注意を引き付けたのであった。次に、誰一人としてこれに気付くものがないという更に注目すべき状況が、私の注意を引き付けてやまなかったのである。

被害者の幽霊だけでなく、怯えながら前を進む加害者の幽霊までも主人公を見ている。しかも彼一人の目にしか映らない状態において。更に続けて“they both stared up at me” (ibid.) という箇所、この二人の幽霊と主人公の間の強い繋がりがより一段と露呈している、とあってよい。この時点では加害者も主人公もまだ何も知らないが、被害者の幽霊の狙い通りに事が運ばれていて、報復の執念を生々しく見せつけた死体の消えた現場に続き、主人公にそのターゲットを幻視させるのが自ら出現して幻出させたこの第二のシーンの目的なのである。殺人犯つまり加害者自身は巧みに殺人を遂行したつもりでいるかも知れないけれども、逮捕されて裁判で極刑に付される運命は、彼個人の力を超えた全く与り知らない形でもう既に定められていたのである。本人自身がほくそ笑んでいる間、その分身たる幽霊、幻像が前途に待ち構える運命を想って恐怖におのっている、という恐ろしい話なのである。そして主人公も同様で、陪審長として有罪の評決を述べる運命を被害者の幽霊により担わされ

たからこそ、加害者、被害者と全く無関係でありながら、異常で身の毛のよだつ体験を連続的にしなければならぬ羽目に陥ってしまったのである。逮捕前の加害者の枕元に主人公の分身たる幽霊、幻像が出現して、首にロープを掛けたという末尾の落ちは、その表れ以外の何物でもない。しかも、殺人事件そのものの状況や内容、加害者が殺人を犯した動機、被害者が幽霊と化して加害者への復讐に執念を燃やす理由、といった背景的な説明が一切省略されているので、その分被害者の幽霊の怨念、妄執の底しれぬ不気味さと恐ろしさが、より一層炙り出しにされて迫って来る感じである。

それにしても、陪審長として裁判にかかわる運命の下にあったばかりに、被害者の幽霊に付きまといわれ、おのが意志にかかわりなくその魔力に誘導されるままに加害者を死刑に追い込むのに決定的な役割を演じた主人公兼語り手の心理や内面は、如何なる状態にあったのであろうか。普通だといずれにせよ強く深い衝撃を受け、それが後までずっと尾を引いて行く中で、一時的にせよ心身共に陥った錯乱状態からの回復が大変であろうと思われる。だけれども、この人物の場合はそうした気配は余り感じられない。「この極悪人」(“this particular brute”) (456) と呼ぶ程、加害者への憎しみが激しかったからであろうか。全ての発端であり根源でもある加害者・殺人犯に対しては、「この極悪人の記憶は抹殺したい」と述べてはいても、被害者に対する同じような叙述は一切見あたらない。「お前が俺を死刑に処した張本人だ」と加害者から面と向かって言われた事実が、抜き難い痕跡として記憶の中に残り続けることから逃れるために、その記憶の抹殺を願望しているというのは十分に有り得る話ではある。しかしながら、それとともに記憶の抹殺を指向する姿勢は

加害者への憎念や嫌悪感などの激しい流れで、自己の内面を整理し割り切りをつけたい、という心理作用を示しているのではあるまいか。相手が殺人犯でいくら当然の報いとはいえ、一個の人間を死に追いやった行為が重い負担となって、記憶に苦痛を与え続けることは避けようのない運命であるからである。そうでないと、単調な生活と消化不良のため休養を必要とする「病気ではないが健康でもない」(458) 状態にあった中年男が、叙述の展開やタッチがしっかりと安定している手記をまとめ得る、というようなことは到底考えられない。そうとはいえ、*Salt* の主人公兼語り手がこの異常体験を通してその魂が死神に魅入られ、死の世界へ踏み込んで行ったことは確実である、と思われる。

II

Salt に続き翌1866年 *Signal* が執筆された訳だが、前作と比較すると格段に高い知名度を持った作品であることは指摘するまでもない。わが国においても英米怪奇短篇集に必ずといってよい程収録されているし、小池滋氏の優れた論考も発表されている⁴⁾。この鉄道にまつわる作品は当然前年の6月9日のステイプルハースト駅付近でディケンズが遭遇した大事故との関連を考えなければいけないが、それは小池氏の論考に譲るとして、*Signal* を一読してまず気付くことは、同じ幽霊譚に属する作品同士であっても、一年後の本篇の方が *Salt* より死の雰囲気に覆われている度合いが、想像を絶する程遙かに進行している、ということである。まるで死の世界そのものを描写したとしか思えない程、窒息しそうな息苦しい雰囲気

に全篇が覆い尽くされた作品である、としかいいようのない感じである。本篇も一人称体による叙述で構成されているが、語り手が主人公を兼ねていた前作と違って、語り手⁵⁾により叙述が進められている当の相手、鉄道信号手が主人公であることは、今更述べるまでもない。

ある夕方散歩をしていた語り手は偶然一人の信号手を発見する。この人物は、一方の側に赤い信号灯と黒々と口を開けているトンネルがあり、まるで地下牢のごとく日光が全然射し込まない深い切り通しにある番小屋にたった一人で詰めて、電信の連絡とか通過する列車への手旗による連絡などの業務を日課として行っているのである。その雰囲気は次のように説明されている。

... it had an earthy, deadly smell; and so much cold wind rushed through it, that it struck chill to me, as if I had left the natural world. (526)

土くさい、死の臭いがした。そして冷たい風が強く吹き抜けるので、まるでまっとうな世界を後にしたかのごとく、私は寒気に襲われた。

これはまさに死の世界を写した叙述である。語り手はここへ通じる踏み段をつい降りただけで、死の世界へ入り込んでしまった感じである。この世界に耐え、しかも孤独な勤務にも耐えられる人物となると自ずと限定されてくる訳で、彼の眼前に居る信号手はまさにうってつけの人物であった。若い頃は自然科学の講義を受けるなどかなりの教育を受けたのに、身を持ち崩して零落し現在の状態にいたり、浮上することなどこれまでの半生で皆無であった、というの

であるから。

次の夜再び会った時、ある月のでた夜、赤い信号燈の近くに“Haloo! Below there! Look out!” (530) と声を限りに叫び、袖口で両眼を覆い隠す仕草をする幽霊が出現したということ。幽霊の出現後6時間程して大事故が発生し、10時間程して死傷者がトンネルを抜け⁶⁾、幽霊が立っていた所を通して運ばれて行った、ということ。そして、幽霊の出現と大事故は丁度1年前の出来事である、ということなどを信号手は語る。更に続けて、6、7ヶ月前の夜明け時又しても幽霊が出現して、赤い信号燈の支柱にもたれ無言のまま両手で両眼を覆い、悲嘆にくれる態度をとったこと。幽霊の出現したその日にトンネルからでてきた列車の一つの窓の中の光景に異常を認め、機関士に合図を送り急停車させて調べたところ、問題の車室の若く美しい女性がその瞬間他界し、その遺体が番小屋の語り手と信号手が位置している間の床に置かれたこと、などを語って聞かせる。信号手は更に言葉を続けて、三度目の出現を幽霊がこの1週間ずっと続けていて、例の赤い信号燈の所から彼に“*For God's sake, clear the way!*” (532) とか、“*Below there! Look out! Look out!*” (ibid.) と叫び続け、手を振り、電信用の呼び鈴まで鳴らし続ける、との説明を行い、言葉を続けて、三度目の出現をした幽霊が残酷に執拗に付きまとって離れない理由を知りたい、と苦悶の叫び声をあげる。前二回の経験からいっても、惨事が起こるのは確実であるだけに。

“If it came, on those two occasions, only to show me that its warnings were true, and so to prepare me for the third,

why not warn me plainly now? And I, Lord help me! A mere poor signal-man on this solitary station! Why not go to somebody with credit to be believed, and power to act?" (534)

「二度の機会において、幽霊がその警告が本当であることを示すためだけに出現し、そして私に三度目の警告の備えをさせるために出現したのであれば、どうして今はっきりと私に警告してくれないのか。私は、おお、神よお助け下さい！この寂しい番小屋に勤務している一介の哀れな信号手に過ぎないのに！何故信頼される名声を持ち、行使できる力を備えた人物に付きまとわないのか」

この「耐え難い程苦悶に喘いでいる良心的な男の精神的拷問」(“the mental torture of a conscientious man, oppressed beyond endurance”) (ibid.) の状態で悲痛な叫び声を発している信号手の姿は、作者ディケンズのものであろう。下敷きとなっている鉄道事故の有無にかかわらず多数の死傷者の出た最初の惨事、若い女性の他界があった二度目の惨事等は、全て1年前作者自身が遭遇し巻き込まれた例の鉄道事故の記憶に端を発していることは明白である。深刻な衝撃が少しでも癒されるどころか、ますます募る一方であり、全的に作者にとり付いて、心身共に徹底的に苦しめ抜き衰弱させているのではないか、という想念が湧いて来るのをどうにも抑えることはできないのである。名声も力もあるディケンズが一介の無名の信号手の苦悶の叫び声に託して描き出していることに、そうしたものが凝縮されて投影されているように思われてならない。

次の日の日没時約束通り語り手は番小屋を訪れるのだが、この日は“a lovely evening” (535) であったという。これが信号手と始めて出会った時の“an angry sunset” (524) と呼応し合っていること

は指摘するまでもない。語り手がそこで見出した物は信号手の死体と数人の男達であった。夜明け時にトンネルの入り口で信号手を轢いた機関士の口を通して、その最期は次のように説明される。

“I said, ‘Below there ! Look out ! Look out ! For God’s sake, clear the way ! ’”

I started.

“Ah, it was a dreadful time, Sir. I never left off calling to him. I put this arm before my eyes not to see, and I waved this arm to the last; but it was no use.” (536)

「私は叫びました、『その下にいる人！ 気をつけろ！ 気をつけろ！ 後生だから、どいてくれ！』と」

私は慄然とした。

「ああ、本当にこわかったですよ。私は彼に叫び続けました。この腕でこわさの余り両眼を覆い、そして最後まで腕を振り続けました。だが無駄でした」

‘I put’ で始まる箇所 の ‘before my eyes’ と ‘not to see’ の間に *AYR* の原文⁷⁾ではあったコンマが削除されているが、あった方が効果的であろう。この機関士の警告の叫びと目を覆う仕草が、幽霊が信号手に対して示したものと全く同じものであることはもう述べるまでもない。三度目の出現をした幽霊が警告を発しその死を悲しむ仕草をした当の対象は、信号手に他ならなかったのである。もっとも彼の死顔はとても穏やかであったという (“his face is quite composed”) (ibid.)。これが先述の ‘a lovely evening’ と照応して、信号手の魂が死を迎えて生前の不安と恐怖からやっ と解放され、初めて安らかな境地に到達できた事実を示していることも、述べるまでも

あるまい。

Signal が「真の自己を抑制することの危険のアレゴリー」⁸⁾であることは指摘するまでもなく明らかであるけれども、ディケンズはただでさえ衰えが進むおのが心身にとり付いて、不安と恐怖を与え続け執拗に苦しめてやまない鉄道に対する自己の魂の平穩を願望して、本篇を創り出したのであろうか。そして、信号手の安らかな死の描写には、そうした苦悶からの解放は死の形を通してしかありえない、との想いが投影されているのであろうか。いずれにしても、鉄道への恐怖がディケンズの死の歩みを加速させ、その結果として死の影が重く深く彼を包み始めていたことだけは、疑うべくもない事実である。

III

次にディケンズの最後のクリスマス物に属する作品である *NT* をとり上げるが、本章で扱うのはその中でもディケンズ自身の手になる事実が確実である部分（全体の 1/6 の分量）に限定することとしたい。それは冒頭でも触れたように *The Overture* と *Act III* である。その内 *The Overture* は作品の導入部にあたる箇所では別にこれということもない感じなので、*Act III* に焦点を絞ることにするが、ここで精彩を放っているのはマルゲリーテ (Marguerite) の存在である。恋人ヴェンデイル (George Vendale) が悪事の露見を恐れたオーベンライザー (Jules Obenreizer) により冬のアルプス山中で谷底へ突き落とされたのであったが、彼女は男達に混じって救援隊に参加してその現場へと駆けつける。そして、怯む男達を叱咤激励し

て、ロープでおのが身体を縛り谷底へ降ろさせる。

“Lower me down to him, ... or I will dash myself to pieces! I am a peasant, and I know no giddiness or fear; and this is nothing to me, and I passionately love him. Lower me down!”

“Ma’amselle, Ma’amselle, he must be dying or dead.”

“Dying or dead, my husband’s head shall lie upon my breast, or I will dash myself to pieces.” (637-8)

「わたしをあの人(中略)の所へ降ろして下さい、(中略)降ろしてくれなければ自分から飛び降りてばらばらになるわ！わたしは百姓娘で、目まいや恐怖とは無縁の人間です。この谷はわたしにとって別に何でもありませんし、あの人を心の底から愛してもいます。さあ、降ろして下さい！」

「お嬢さん、彼は虫の息かもしくは事切れているかのどちらかですよ」

「虫の息であろうと事切れていようと、夫になる人の頭をわたしの胸で支えあげたいの、降ろしてくれなければ自分から飛び降りてばらばらになるわ」

マルゲリーテの自己犠牲の化身のごとき姿に、男達は“*She is inspired*” (637) と感嘆の声をあげつつ力を合わせてロープをたぐり、彼女を突き落とされたヴェンデイルが横たわっている谷底へ降ろしたのである。谷底へ着いた彼女は様子を尋ねる男達に対して、意識はないが心臓の鼓動はしっかりしていると答え、更に次のような叫び声をあげる。

The cry came up: “Upon a ledge of ice. It has thawed beneath him, and it will thaw beneath me. Hasten. If we die, I am content.” (638)

叫び声が上がって来た、「氷の棚よ。あの人を支えている氷が溶けているわ、わたしの氷もきっと同じことよ。急いで。あの人と一緒に死ねるのなら、本望よ」

この一途で純粋な愛の力が効を奏したのか、男達の一人が呼びに行った救援隊の力で彼女とヴェンデイルは無事引き上げられたが、狂喜乱舞する周囲の興奮の中で、彼女の神経は愛する男一人に注がれていた。

She broke from them all, and sank over him on his litter,
with both her loving hands upon the heart that stood still.
(639)

彼女は救援隊の人々から身を離して、担架の彼の上にかがみこみ、脈拍の停止した心臓に愛の両手を当てた。

これはまさに愛の力により死からの蘇りという奇跡が実現することを予感させる場面であり、この描写で Act III も幕となるのである。

IV

NT を除くと1867年のディケンズの活動は殆ど自作の公開朗読の巡回公演で占められている。鉄道への募る一方の恐怖心⁹⁾を無理矢理抑えつけて、1月15日から5月13日にかけて52回の巡業を実施している。その間の4月18日30年来の盟友クラークスン・スタンフィールドが他界する、という悲嘆の極みとしかいいようのない出

来事¹⁰⁾が持ち上がっている。そして、12月2日から翌1868年4月20日にかけて75回の巡回公演をアメリカで行うために、11月9日イギリスを出航して19日ボストンに到着後、この地を皮切りとしてアメリカ各都市での巡業を強行している。急に多額の出費¹¹⁾が必要になり、ジョン・フォースターなどの強い反対を押し切って実行に移したのであるが、案の定体調は悪化の一途を辿るばかりであった。8月に専門医の診察でパニオンから丹毒を併発した状態にある、といひ渡されていたところへ、アメリカへ渡っての公開朗読の巡業という無理を重ねたものだから、どうしようもない状態に落ち込んでしまった。ひどい風邪を引き、喉彦の調子も神経も至って不調で、クリスマスシーズンにニューヨークで医師から公開朗読をしばらく休止したらどうか¹²⁾、と勧告されるまで悪化し衰弱してしまったのである。幾ら経済的な理由から有利な条件に乗せられたにせよ、重度の鉄道恐怖症を抱え込んでいる中で、弱り果て衰えきった身体に鞭打って遠くアメリカにまで足をのばして、半年間に及ぶ強行日程の自作の公開朗読の巡回公演を組んだ結果、疲労困憊したあげく心身共に衰えきった状態で、異郷の地での孤独なクリスマスを迎えるとは、何とも痛ましい限りではある。もっとも、アメリカでなくとも母国イギリスの何処に居ようと、ディケンズを多少なりとも支え得る存在が果たして居たかどうかは甚だ疑問である。エレン・ターナンを始めとする女性群像に焦点を絞ってみたところで、事情は変わらない。

そうした目で見た場合、*NT* において浮き彫りにされているマルゲリーテの自己を犠牲にすることを恐れない激しく一途な愛で、愛する男を死の窮地から救出し蘇らせる気高く高貴な姿は、何とも

象徴的である。作者ディケンズのこうした理想の女性像を希求してやまない心情、内面を痛い程感受することができるからである。生身の女性達から彼の魂を癒す存在が出現し得ぬ以上、そのような存在はメアリー・ホガース以外には考えられない。だが、彼女は霊的存在と化して、ディケンズの内面、記憶の世界だけに存在していて、それが作品に投影されて叙述され描写されているだけのことで、却って恐ろしいばかりの孤独の悲哀や寂寥感が迫って来るばかりである。

Salt と *Signal* という二つの幽霊譚の上に *NT* を重ねると、幻、夢という形で献身的な愛による癒しという奇跡を願望し希求するディケンズの姿が浮かび上がって来て、1867年のクリスマスにおける現実の姿をオーヴァーラップさせると、その落差の余りの大きさに言葉が出ないくらいである。

〔注〕

- 1) 以下 *Salt* と略す。
- 2) 以下 *Signal* と略す。
- 3) Deborah A. Thomas, *Dickens and the Short Story*, p. 152.
- 4) 小池 滋『ディケンズ-19世紀信号手-』（東京：冬樹社，1979年），pp. 14-22, 49-54。
- 5) *MJ* の第1・2章との関連で考えると、*Signal* の語り手はBarbox Brothers とも Jackson とも呼ばれている人物であるが、本篇は内容的には独立した作品であるので、その辺は余り拘る必要はないように思われる。
- 6) この第一の事故の設定が1861年8月25日にロンドン＝ブライトン線の Clayton トンネル内で23名の死者を出した事故とよく似ている、という指摘がある（T. S. Lascelles, “The Signalman’s Story – Had Dickens any particular tunnel in mind?–” [*The Dickensian*, vol. 56, 1960, p. 84]）。
- 7) The Extra Christmas Number of *AYR*, vol. 16, p. 25.
- 8) “an allegory of the dangers of repressing the true self” (Gwen Watkins,

第六章 二つの幽霊譚と *No Thoroughfare* につ

Dickens in Search of Himself, p. 140).

- 9) 1867年2月19日付けの Georgina Hogarth 宛の書簡を参照のこと (*The Letters of Charles Dickens*, vol. III, p. 508)。
- 10) ディケンズは *AYR* の6月1日号に “The Late Mr. Stanfield” と題する、長年のかけがえのない親友を失った悲しみで一杯の追悼文を発表している (*AYR*, vol. 17, p. 537)。
- 11) “the ‘enormous’ expenses” (*A Dickens Chronology*, p. 126)。
- 12) 1867年12月26日付けの Mary Angela Dickens 宛の書簡を参照のこと (*The Letters of Charles Dickens*, vol. III, p. 589)。

あ と が き

本書はここ三年間に発表した論文に加筆修正を施した第一・二・三・五章と、新たに書き下ろした序章・第四・六章から構成されている。全体のスタイルの統一をはかることに極力留意したが、表現の不統一、同一事項への言及の繰り返しなどの完全な払拭はどうにも不可能で、不首尾な点が残ったことに関しては、御寛恕頂きたい。使用した四篇の論文のタイトルと初出は次の通りである。

[第一章] Charles Dickens の *The Holly-Tree* (1853) について

— “Inns” の回想をめぐる叙述の考察を中心として —

(安田女子大学紀要第19号, 1991)

[第二章] 1857年の Charles Dickens

— *The Perils of Certain English Prisoners* の考察を通して —

(英語英米文学論集第2号, 1993)

[第三章] Charles Dickens: *The Haunted House* (1859) について

— 叙述と作家の関係をめぐって —

(『英語英米文学点描』所収, 溪水社, 1991)

[第五章] Charles Dickens: *Mugby Junction*

— 主人公 Barbox Brothers の再生をめぐる —

(河井迪男先生退官記念『英語英米文学研究』所収, 英宝社, 1993)

また、本書で扱ったクリスマス物の作品群と同じ時期に発表された長篇群との関連性については、これからの課題として考察を進めて行かねばならないテーマであり、機会があれば何らかのまとめを試みたいと考えている。そうしたテーマへつなげる一里塚として本書をまとめてみたが、著名な長篇群の影に隠れて言及されることの少ないクリスマス物の作品群へ照明を当てて、私なりの一貫性を持った分析と考察を展開してみたところに多少なりとも独自性が出れば、望外の幸せというものである。

翻訳の類はこれまで手掛けたこともあるが、こうした「論考」の上梓は初めてのことで、不慣れのためかなりの苦勞やとまどいは避けられなかった。だが、私なりのディケンズ観を整理し構築する上では極めて有効な作業を経験することができた訳で、後は中味がどうかということになるが、大方の忌憚のない御意見と御教示をお願いしてやまない次第である。

私事になるが、ディケンズの生涯と文学について恩師である故田辺昌美先生から賜った学恩に改めて感謝申し上げるとともに、先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

本書の出版は安田女子大学研究助成に負うところが大きい。河野眞学長はじめ、関係各位の方々に深い感謝の意を表したい。

最後に、大学の同期生で、小著の出版を快くお引き受け頂いた溪水社の木村逸司社長にもお礼申し上げます。

1993年10月

篠田昭夫

主要参考文献

I. 作品、書簡等

- Dickens, Charles, *Christmas Stories* (The New Oxford Illustrated Dickens, London: Oxford University Press, 1964).
- , *Christmas Stories* (Everyman's Library, London: Dent, 1954).
- Thomas, Deborah, A. (ed.), *Charles Dickens: Select Short Fiction* (The Penguin English Library, Harmondsworth: Penguin Books, 1976).
- Haining, Peter (ed.), *The Complete Ghost Stories of Charles Dickens* (London: Michael Joseph, 1982).
- Dickens, Charles (ed.), *Household Words*, vols. 12, 17.
- , *All the Year Round*, vols. 2, 14, 16, 18.
- Dexter, Walter (ed.), *The Letters of Charles Dickens*, vol. II (1847-57), vol. III (1858-70) (Bloomsbury: The Nonesuch Press, 1938).
- Storey, Graham et. al. (eds.), *The Letters of Charles Dickens*, vol. 7 (1853-55) (Oxford: Clarendon Press, 1993).
- Fielding, K. J. (ed.), *The Speeches of Charles Dickens* (Oxford: Clarendon Press, 1960).
- Collins, Philip (ed.), *Charles Dickens: The Public Readings* (Oxford: Clarendon Press, 1975).

II. 伝記、研究書、論文等

(1) 伝記

- Ackroyd, Peter, *Dickens* (London: Sinclair-Stevenson, 1990).
- Chesterton, G. K., *Charles Dickens* (London: Methuen, 1960).
- Forster, John, *The Life of Charles Dickens*, 2 vols. (London: Dent, 1966).
- Gissing, George, *Charles Dickens - A Critical Study-* (Port Washington: Kennikat Press, 1966).
- Johnson, Edgar, *Charles Dickens - His Tragedy and Triumph-*, 2 vols. (London: Victor Gollancz, 1953).

- , *Charles Dickens —His Tragedy and Triumph—* (Revised and Abridged) (Harmondsworth: Penguin Books, 1986).
- Kaplan, Fred, *Dickens —A Biography—* (London: Hodder & Stoughton, 1988).
- MacKenzie, Norman and Jeanne, *Dickens —A Life—* (Oxford: Oxford University Press, 1979).
- Page, Norman (ed.), *A Dickens Chronology* (Houndmills: MacMillan, 1988).
- Pearson, Hesketh, *Dickens —His Character, Comedy, and Career—* (London: Methuen, 1949).
- Pope-Hennessy, Una, *Charles Dickens* (London: Chatto & Windus, 1968).
- Watts, Alan S., *The Life and Times of Charles Dickens* (London: Studio Editions, 1991).
- Webb, L. K., *Charles Dickens* (London: Evergreen Lives, 1983).
- (2) 研究書
- Allen, Michael, *Charles Dickens' Childhood* (London: MacMillan, 1988).
- Bentley, Nicholas et. al. (eds.), *The Dickens Index* (Oxford: Oxford University Press, 1988).
- Brannan, R. L. (ed.), *Under the Management of Mr. Charles Dickens—His Production of "The Frozen Deep"—* (Ithaca: Cornell University Press, 1966).
- Carey, John, *The Violent Effigy —a study of Dickens' imagination—* (London: Faber, 1973)
- Chesterton, G. K., *Appreciations and Criticisms of the Works of Charles Dickens* (Port Washington: Kennikat, 1966).
- Collins, Philip, *Dickens and Crime* (London: Macmillan, 1965).
- , *Dickens and Education* (London: MacMillan, 1965).
- (ed.), *Dickens: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971).
- Davis, Earl, *The Flint and the Flame —The Artistry of Charles Dickens—* (London: Victor Gollancz, 1964).

- Fielding, K. J., *Charles Dickens* (London: Longmans, 1965).
- Fitzsimmons, Raymond, *The Charles Dickens Show* (London: Geoffrey Bles, 1970).
- Grancy, Ruth, *A Tale of Two Cities: Dickens's Revolutionary Novel* (Boston: Twayne, 1991).
- Goldberg, Michael, *Carlyle and Dickens* (Athens: University of Georgia Press, 1972).
- Hardwick, Michael and Mollie, *As They Saw Him: Charles Dickens* (London: Harrap, 1970).
- Hibbert, Christopher, *The Making of Charles Dickens* (New York: Harper & Row, 1967).
- Hobsbaum, Philip, *A Reader's Guide to Charles Dickens* (London: Thames and Hudson, 1972).
- Hornback, Bert G., *Noah's Arkitecture — A Study of Dickens's Mythology—* (Athens: Ohio University Press, 1972).
- House, Humphry, *The Dickens World* (London: Oxford University Press, 1961).
- Ley, J. W. T., *The Dickens Circle* (New York: Haskell House, 1972).
- Manning, John, *Dickens on Education* (Toronto: University of Toronto Press, 1959).
- Harland, S. Nelson, *Charles Dickens* (Boston: Twayne, 1981).
- Newcomb, Mildred, *The Imagined World of Charles Dickens* (Columbus: Ohio State University Press, 1989).
- Patten, Robert L., *Charles Dickens and His Publishers* (Oxford: Oxford University Press, 1978).
- Schlicke, Paul, *Dickens and Popular Entertainment* (London: Unwin Hyman, 1988).
- Slater, Michael, *Dickens and Women* (London: Dent, 1983).
- Stone, Harry, *Dickens and the Invisible World* (London: MacMillan, 1979).
- Thomas, Deborah A., *Dickens and the Short Story* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1982).

- Wagenknecht, Edward, *The Man Charles Dickens* (Norman: University of Oklahoma Press, 1966).
- Watkins, Gwen, *Dickens in Search of Himself* (Houndmills: MacMillan, 1987).
- Welsh, Alexander, *The City of Dickens* (Oxford: Clarendon Press, 1971).
- Wilson, Angus, *The World of Charles Dickens* (London: Secker & Warburg, 1970).
- Wilson, Edmund, *The Wound and the Bow* (University Paperbacks, London: Methuen, 1961).
- (3) 論文
- Collins, Philip, “A Tale of Two Novels — *A Tale of Two Cities* and *Great Expectations* in Dickens’ Career”, *Dickens Studies Annual*, vol. 2 (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1972), 336-351.
- Lascelles, T. S., “The Signalman’s Story — Had Dickens any particular tunnel in mind?—”, *The Dickensian*, vol. 56, 1960, 84.
- Oddie, William, “Dickens and the Indian Mutiny”, *The Dickensian*, vol. 68, 1972, 3-15.
- Spence, Gordon, “The Haunted Man and Barbox Brothers”, *The Dickensian*, vol. 76, 1980, 150-157.
- Stone, Harry, “The Unknown Dickens — With a Sampling of Un-collected Writings”, *Dickens Studies Annual*, vol. 1, 1970, 1-21.
- Thomas, Deborah A., “The Chord of the Christmas Season: Playing House at the Holy-Tree Inn”, *Dickens Studies Newsletter*, December, 1975, 103-108.

Ⅲ. 日本における文献

(1) 研究書

- 遠藤紀勝・大塚光子『クリスマス小事典』（東京：社会思想社，1989）。
- 海老池俊治『ディケンズ』（東京：研究社出版，1955）。
- 亀井規子『ヴィクトリア朝の小説』（東京：研究社出版，1991）。
- 小池 滋『ディケンズ—19世紀信号手—』（東京：冬樹社，1979）。

- 『ディケンズとともに』（東京：晶文社，1983）。
- 『英国流立身出世と教育』（岩波新書，東京：岩波書店，1992）。
- 小池滋他編『青木雄造著作集』（東京：南雲堂，1986）。
- 小松原茂雄『ディケンズの世界』（東京：三笠書房，1989）。
- 滝 裕子『ディケンズの人物たち—その精神構造の諸相—』（東京：槐書房，1982）。
- 田辺昌美『ディケンズの文学』（東京：南雲堂，1960）。
- 『*The Uncommercial Traveller* 研究 —Dickens 文学の一つの完成—』（東京：第一学習社，1969）。
- 『チャールズ・ディケンズとクリスマス』（京都：あぼろん社，1977）。
- 中西敏一『イギリス小説と監獄—18, 19世紀イギリス文学の一断面—』（東京：開文社出版，1991）。
- 松村昌家『ディケンズとロンドン』（東京：研究社出版，1981）。
- 『ディケンズの小説とその時代』（東京：研究社出版，1989）。
- 『ヴィクトリア朝の文学と絵画』（京都：世界思想社，1993）。
- 宮崎孝一『ディケンズ小説論』（東京：研究社，1959）。
- 『ディケンズ—後期の小説—』（東京：英潮社，1977）。
- Miyazaki Kouichi, *The Inner Structure of Charles Dickens's Later Novels* (Tokyo: Sanseido, 1974).
- Yamamoto Tadao, *Growth and System of the Language of Dickens* (Osaka: Kansai University, 1950).
- 吉田孝夫『ディケンズのユーモア』（名古屋：晃学出版，1984）。
- 『ディケンズの楽しみ』（名古屋：晃学出版，1986）。
- (2) 翻 訳
- チャールズ・ディケンズ著小池滋訳『エドウィン・ドルードの謎ほか6篇』（世界文学全集29，東京：講談社，1977）。
- 広島大学英国小説研究会訳『無商旅人』（東京：篠崎書林，1982）。
- ジョージ・ギッシング著小池滋・金山亮太共訳『チャールズ・ディケンズ論』（東京：秀文インターナショナル，1988）。
- G.K. チェスタトン著——『チャールズ・ディケンズ』（東京：春秋

社, 1992)。

P. コリンズ著藤村公輝訳『ディケンズと教育』(京都: 山口書店, 1990)。

アンガス・ウィルソン著松村昌家訳『ディケンズの世界』(東京: 英宝社, 1979)。

ジョン・フォースター著宮崎孝一監訳『チャールズ・ディケンズの生涯』上巻 (1985), 下巻 (1987) (東京: 研友社)。

エリアス・プレスドルフ著渡辺省三訳『アンデルセンとディケンズ』(東京: 研究社出版, 1992)。

索引

(本書で言及しているディケンズの作品と登場人物、そしてディケンズに直接関わりを持つ肉親、友人等に限定した。)

Act III (*NT*), 106, 118, 120

All the Year Round (*AYR*), 3, 6, 51, 53, 77, 79, 80, 84, 93, 103, 106, 117, 122, 123

Andersen, Hans Christian (ハンス・クリスチャン・アンデルセン), 43-44, 49

Arabian Nights (『千一夜物語』) (*HH*), 65, 66, 75

“Barbox Brothers” (*MJ*) (Dickens), 93, 104

Barbox Brothers (バーボックス・ブラザーズ) [Jackson (ジャクソン)] (*MJ*), 94, 96-103, 122, 124

“Barbox Brothers and Co.” (*MJ*) (Dickens), 93-94

“Barmaid, The” (*HT*) (Proctor), 7

Battle of Life, The, 32

Beadnell, Maria (マライア・ビードネル) (Mrs. Maria Winter), 5, 16, 22, 47, 75

Beatrice (ベアトリス) (*MJ*), 99-102

Belltott, Mrs. (ベルトット夫人) (*Perils*), 32

“Bill, The” (*HT*) (Dickens), 7

“Birthday Celebrations” (*The Uncommercial Traveller*), 63

Bleak House, 54

“Boots, The” (*HT*) (Dickens), 7

Bottles (ボトルズ) (*HH*), 60

Boz, 64

Bradbury & Evans, 51

Bradford, Jonathan (ジョナサン・ブラッドフォード) (*HT*), 14

- Bule, Miss (ミス・ビュール) (the Favourite, Zobeide, Sultana) (*HH*), 66
- Bumble (*Oliver Twist*), 35
- Burdett-Coutts, Angela (バーデット=クーツ), 29
- Captain Murderer (*The Uncommercial Traveller*), 104
- Carton, Captain George (カートン大尉) (*Perils*), 39, 40, 41
- Carton, Sydney (シドニー・カートン) (*A Tale of Two Cities*), 41
- Chapman & Hall, 51
- Charker, Harry (ハリー・チャーカー) (*Perils*), 31, 35
- Charles Dickens Edition, 3, 26, 52-53
- Charley (チャーリー) (*HT*), 8-11, 22-24
- Child's Story, The*, 53
- Christmas Books*, 3, 8, 53, 104
- Christmas Carol, A* (『クリスマス・キャロル』), 3, 4, 8, 26, 51, 63, 93, 106
- Christmas Stories* (CS), 3, 5, 6, 7, 24, 26, 27, 50, 51, 53, 76, 79, 80, 93, 106
- Christmas Tree, A*, 53, 65, 69
- Cobbs (コブズ) (*HT*), 8, 9
- Collins, Charles (チャールズ・コリンズ), 79-80, 93, 107
- Collins, Wilkie (ウィルキー・コリンズ), 7, 26-29, 37-38, 44, 49, 52, 106
- Cook (クック) (*HH*), 60
- David Copperfield*, 54, 72
- Davis, Gill (ギル・デイヴィス) (*Perils*), 30-31, 33-43, 45-46, 48, 49
- Dickens, Alfred Lamert (アルフレッド・ディケンズ) (弟), 57
- Dickens, Catherine (キャサリン・ディケンズ) (妻), 15, 16, 21, 22, 43-45, 47, 51, 53, 67, 75, 77
- Dickens, Elizabeth (エリザベス・ディケンズ) (祖母) (*HT*), 12-14
- Dickens, Fanny [Frances] (ファニー・ディケンズ) (姉), 14, 63
- Dickens, John (ジョン・ディケンズ) (父) (*HH*), 12, 58, 63, 68, 70, 71, 77
- Dickens, Mary Angela (娘), 123
- Dickens, William (ウィリアム・ディケンズ) (祖父) (*HH*), 63, 77

- Doctor Marigold (DM)* (*Doctor Marigold's Prescriptions*), 6, 79-92, 106
 "Dullborough Town" (*The Uncommercial Traveller*), 63, 69
- Edwards, Amelia E., 93
 Edwin (エドウィン) (*HT*), 8, 9, 10
 Emmeline (エミリー) (*HT*), 8, 9
- Fan, little (ファン) (*A Christmas Carol*), 63
 Forster, John (ジョン・フォースター), 17, 44, 66, 77, 121
 Franklin, Sir John (サー・ジョン・フランクリン) (*FD*), 28, 49
Frozen Deep (FD) (W. Collins), 28, 29, 33, 44, 48, 49
- Gad's Hill Place (ギャズヒルの邸宅), 43
 Gascoyne, Mrs., 80
 Gaskell, Mrs. Elizabeth (ギャスケル夫人), 52, 54
 George and New Inn, the (*HT*), 15, 22
 "Ghost in Master B's Room, The" (*HH*) (Dickens), 52, 54, 62-74, 75
 "Ghost in the Clock Room, The" (*HH*) ("Hesba Stretton", Smith), 51
 "Ghost in the Corner Room, The" (*HH*) (Dickens), 52, 76
 "Ghost in the Cupboard Room, The" (*HH*) (W. Collins), 52
 "Ghost in the Double Room, The" (*HH*) (Sala), 52
 "Ghost in the Garden Room, The" (*HH*) (Gaskell), 52
 "Ghost in the Picture Room, The" (*HH*) (Proctor), 52
 Governor, Jack (ジャック・ガヴァナー) (*HH*), 60, 61, 76
 Grand Vizier (宰相) ("the other creature") (*HH*), 65, 66, 67
Great Expectations, 50, 54, 84
 Green, Lucy (ルーシー・グリーン) (*The Uncommercial Traveller*), 63
 Griffin, Miss (グリフィン女史[校長]) (*HH*), 65, 66, 67
 "Guest, The" (*HT*) (Dickens), 7
- Halliday, Andrew, 93
 Haroun Alrashid, Caliph (大守ハールーン・アル・ラシッド) (*HH*), 65-68,

- 72, 73, 75
- Haunted House, The* (HH), 6, 51-78, 124
- Haunted Man, The* (『憑かれた男』), 96, 104
- Heathfield, Alfred (アルフレッド・ヒースフィールド) (*The Battle of Life*), 32
- Henri (アンリ) (HT), 19
- Hogarth, Georgina (ジョージナ・ホガース) (義妹), 77, 123
- Hogarth, Mary (メアリー・ホガース) (義妹), 11, 14-16, 22, 24, 46-48, 91-92, 122
- Holly Tree, The* (HT) (*The Holly Tree Inn*), 5, 6, 7-25, 27, 47, 57, 124
- Holly-Tree Inn (終屋), 8, 9, 15, 24
- “Holme Lee” (Harriet Parr), 7, 25
- Hôtel de Londres (HT), 20
- Household Words* (HW), 3, 6, 7, 26, 27, 29, 32, 33, 37, 46, 49, 51, 53, 72
- Howitt, William (ウィリアム・ハウイト), 7, 57
- Hunted Down*, 53, 74
- Ikey (アイキー) (HH), 59
- Indian Mutiny, the (セポイの反乱) (*Perils*), 29, 36, 49
- “Island of Silver-Store, The” (*Perils*) (Dickens), 26
- Jeddler, Grace (グレイス・ジェドラー) (*The Battle of Life*), 32
- Jeddler, Marion (メリアン・ジェドラー) (*The Battle of Life*), 32
- Jerrold, Douglas (ダグラス・ジェロルド), 28
- John (ジョン) (HH), 55-56, 58-60, 62-65, 74, 76
- King, Christian George (クリスチャン・ジョージ・キング) (*Perils*), 34, 35
- “King of the Cheap Jacks, the” (大道商人の王様) (DM), 80, 85, 89, 90
- “Landlord, The” (HT) (Howitt), 7
- Lazy Tour of Two Idle Apprentices, The*, 29
- Leath, Angela (アンジェラ・リース) (HT), 8, 9
- Little Dorrit*, 24, 29

Loui (ルイ) (*HT*), 19

Maclise, Daniel (マクリース), 17

“Main Line: The Boy at Mugby” (*MJ*) (Dickens), 94

Marguerite (マルゲリーテ) (*NT*), 118-120, 121

Marigold, Doctor (ドクター・マリゴールド), 80, 82-83, 85-87, 91

Mary, the Virgin (聖母マリア) (*DM*), 91, 92

Maryon, Captain (メアリアン大尉) (*Perils*), 32, 33

Maryon, Marion (メアリアン・メアリアン) (*Perils*), 32-33, 35-43, 45-48

Master B. (B. 少年) (*HH*), 62, 63, 64, 65

Meltham (メルサム) (*Hunted Down*), 74

Mesroul (*HH*), 68

Mim (ミム) (*DM*), 85, 86

Mitre, the (*HT*), 11, 14

Morley, Henry, 49

“Mortals in the House, The” (*HH*) (Dickens), 51, 54, 55-62

Mugby Junction (*MJ*), 6, 93-105, 106, 124

Mugby Junction (マグビー乗り換え駅), 94, 95, 98, 102

Mulholland, Rosa, 79

“Myself” (*HT*) (“The Guest”), 7

Mystery of Edwin Drood, The, 4, 6

New York Ledger, The, 53

Nobody’s Story, 53

Nora (ノラ) (*HT*), 9

No Thoroughfare (*NT*), 3, 6, 106, 118-120, 121-122

“Not to Be Taken at Bed-Time” (*DM*) (Mulholland), 79

“Not to Be Taken for Granted” (*DM*) (“Hesba Stretton”, Smith), 80

“No. 1 Branch-Line: The Signal-Man” (*MJ*) (Dickens), 94

“No. 2 Branch-Line. The Engine-Driver” (*MJ*) (Halliday), 93

“No. 3 Branch-Line. The Compensation House” (*MJ*) (C. Collins), 93

“No. 4 Branch-Line. The Travelling Post-Office” (*MJ*) (“Hesba Stretton”,

- Smith), 93
- “No. 5 Branch-Line. The Engineer” (*MJ*) (Edwards), 93
- “Nurse’s Stories” (*The Uncommercial Traveller*), 12, 104
- Obenreizer, Jules (オーベンライザー) (*NT*), 118
- Odd Girl (オッドガール) (*HH*), 60
- Oliver Twist*, 35
- “Ostler, The” (*HT*) (W. Collins), 7
- Our Mutual Friend*, 84, 103
- Our School*, 72, 73
- Overture, The (*NT*), 106, 118
- Palazzo Peschiere, the (*HH*), 59, 77
- Parr, Harriet (“Holme Lee”), 25
- Patty (パティ) (*HH*), 60, 76, 77
- Perils of Certain English Prisoners, The (Perils) (Perils of Certain English Prisoners, and Their Treasures in Women, Children, Silver, and Jewels, The)*, 6, 26-50, 124
- Phoebe (フィービー) (*MJ*), 97-100, 102-104
- Pickleson (ピクルソン) (*DM*), 85-86
- Polly (ポリー) (*MJ*), 99-104
- “Poor Pensioner, The” (*HT*) (“Holme Lee”, Parr), 7
- Poplars, the (ポプラ荘) (*HH*), 59
- Pordage (ポージェッジ) (*Perils*), 34-35
- “Prison in the Woods, The” (*Perils*) (W. Collins), 26, 37
- Proctor, Adelaide Ann, 7, 52
- Public reading (自作の公開朗読), 3, 53, 103, 120, 121
- “Raft on the River, The” (*Perils*) (Dickens), 26
- Rapper (霊媒) (*HH*), 54, 55, 57, 58, 59
- Redlaw (レドロウ) (*The Haunted Man*), 96, 103, 104
- Reprinted Pieces*, 72, 73, 74

Sala, George Augustus (ジョージ・オーガスタス・サラ), 52, 54
 Salem House (セイレム学校) (*David Copperfield*), 72
 Salt (“To Be Taken with a Grain of Salt”), 106-113, 122
 Sampson (サンブスン) (*Hunted Down*), 74, 75
Schoolboy’s Story, The, 23
 Scrooge, Ebenezer (スクルージ) (*A Christmas Carol*), 63
 Seraglio (後宮) (*HH*), 65, 68, 72, 75
Seven Travellers, The, 23, 27, 54
Signal (“No. 1 Branch-Line: The Signal-Man”), 106, 113-118, 122
 “signal-man, a” (鉄道信号手), 114-118
 Silver-Store, the Island of (シルバーストア島) (*Perils*), 31, 45
 Slinkton, Julius (ジュリアス・スリンクトン) (*Hunted Down*), 74
 Sophy (ソフィー) (*DM*), 80, 81-82, 86-91
 Squires, Olympia (オリンピア・スクワイアーズ) (*The Uncommercial Traveller*),
 63
 Stanfield, Clarkson (クラークスン・スタンフィールド), 17, 77, 120, 123
 Stone, Frank, 49
 “strange man, a” (*HH*), 68, 69
 “strange young gentleman, the” (*DM*), 87
 Streaker (ストリーカー) (*HH*), 60
 Stretton, Hesba (Sarah Smith), 51, 77, 80, 93
 Stroughill, Lucy (ルーシー・ストラウギル), 63, 66
 Swidger, Milly (*The Haunted Man*), 104

Tale of Two Cities, A (『二都物語』), 41, 49, 50, 53, 74
 Tavistock House (タヴィストクの邸宅), 44
 Ternan, Ellen (エレン・ターナン), 28-29, 48, 50, 75, 84, 91, 103, 105, 121
 Thackeray, W. M. (サッカレー), 75, 84
 Thornbury, Walter, 80
 “To Be Taken and Tired” (*DM*) (Gascoyne), 80
 “To Be Taken at the Dinner-Table” (*DM*) (C. Collins), 79

- “To Be Taken for Life” (*DM*) (Dickens), 79, 87
“To be Taken Immediately” (*DM*) (Dickens), 79
“To Be Taken in Water” (*DM*) (Thornbury), 80
“To Be Taken with a Grain of Salt” (*DM*) (Dickens), 79
Tresham (トresham) (*MJ*), 99-102
Turk (ターク) (*HH*), 60
- Uncommercial Traveller, The* (『無商旅人』), 12, 63, 69, 77, 104
Undery (アンダリー) (Frederic Ouvry) (*HH*), 60, 77
- Vendale, George (ヴェンデイル) (*NT*), 118-120
- Walmers, Harry, Junior (ハリ・ウォルマーズ・ジュニア) (*HT*), 8-9
Wardour, Richard (リチャード・ウォーダー) (*FD*), 28, 33, 44, 49
Weller, Mary (メアリー・ウェラー) (乳母), 12, 13
Wellington House Academy (ウェリントン・ハウス・アカデミー), 71, 72
White Hart Inn, the (*HT*), 17
Winter, Mrs. Maria (マライア・ウィンター夫人) (Maria Beadnell), 16
Wreck of the Golden Mary, The, 27, 47

〔著者の略歴〕

篠田 昭夫 (しのだ あきお)

1942年 広島市に生まれる

1965年 広島大学文学部文学科英語学英文学専攻卒業

1967年 広島大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了

現 在 安田女子大学文学部英語英米文学科教授

著 書—『英語英米文学点描』(共著, 溪水社, 1991)

訳 書—ディケンズ『人生の戦い』(成美堂, 1990)

同 『憑かれた男』(共訳, あぼろん社, 1982)

同 『無商旅人』(共訳, 篠崎書林, 1982)

現 住 所 〒733 広島市西区大宮1-2-20-304

TEL (082) 238-9255



チャールズ・ディケンズとクリスマス物の作品群

平成6年1月20日 発行

著 者 篠 田 昭 夫

発行所 株式会社 溪 水 社

広島市中区小町1-4 (〒730)

電 話 (082) 246-7909

ISBN4-87440-312-3